

二次元

『学園退魔師 御堂茜』の孕ませ漫画もありますよ!!

ドリーム・マガジン

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

新連載小説

あとみつく文庫の
大人気シリーズ最新作



邪悪な魔王が
伝説の女勇者に
転生したようです
酒井仁×笹弘

小説大好評連載中!

スレイブドール

空蟬×ぼっせい

マンガ大好評連載中!

超昂閃忍ハルカ

魔法少女イスカ

~after school.~



抱き枕カチる
魔が墮ちる
一夜

本誌で申し込み受付開始!

立ち読み版

特別
付録

ピンナップポスター

いるまかみり / 電胆 / BLADE

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

獣人に襲われる女剣士を描くのは

BLADE

今号の特集

孕ませ

PCゲーム



「魔法少女沙枝3」
最新情報掲載!



特製孕ませカラーイラスト
桂井よしあき

かいとうびんぐ / ハマちゃん / メノスケ

DIGITAL EDITION
vol.54
2010

10

魔王が 邪悪な鬼 に転生した 伝説の 女勇者 よかったです

SATAN SEEMS TO HAVE BEEN REBORN FOR BLAVE GIRL



あとみつく文庫発!
『○○が××に△△よんば』
シリーズ最新作が登場!

シリーズ作品好評発売中!

無敵の姫騎士が
DMに目覚めたようです
イラスト/池田端宏



不死の吸血鬼が
DSのご主人様を
募集しているようです
イラスト/にの子

第一章 美少女勇者は元・魔王!?

さかいひとし
小説 酒井仁
挿絵 笹ひろ
ILLUSTRATION 笹弘

構えられた長剣に凄まじいパワーが凝縮され、光を放っている。

それは魔族の持つ禍々しい力とは真逆のエナジー、陽光の輝きのような暖かく清浄なる光。

まさしく伝説の「勇者」だけが使いこなせるとされる、輝ける聖なるパワー。

「彼」はその黄金の光が大嫌いだつた。

「邪悪なる魔王ブロウ・ブロウ！ 今こそ勇者の究極奥義を受け、永劫の闇に沈むがよい!! ハアアアア~~~~~」

ついでに言うと、この無闇にでかいバカ声も、虫唾が走るほど嫌いだ。

「食らえッ、究極勇者、絶・対・斬!!」

ぐおおおおおんんっつっ!

裂帛の気合いと共に振り抜かれた剣から、目の眩むような黄金のエネルギーが迸る。

空を切り裂いたそれは、彼が正面で組んだ腕に激突し、強烈な光と共に砕け散る。

ズドオオオオオンッツツツ。

「ヌウツツ……!!」

びりびりとガードした腕が震え、鱗が逆立つ。ごそりと魔力が削られるのを感じる。

だが既に今の一撃をかわす余裕はない。正面から受けるのが最善の策。

あまりに長く続いた戦闘によって、彼——魔王

ブロウ・ブロウは息も絶え絶えである。

勇者と魔王の激突によつて魔王城はほぼ全壊し、大地は裂け、巨大なクレパスが幾筋も穿たれている。

人間はおろか、魔物ですら近づくこともできない激闘の爪痕だ。

「だが、消耗しているのはあやつも同じ」

「ふ、はははっ。よ、よくぞ今の一撃、持ちこたえ

たなブロウ・ブロウ。だが、もはやかわす気力もないようだな……ぜえ、ぜえ」

そう、攻撃を仕掛けたはずの勇者アールの足もふらついている。

再び剣にパワーを集中させようとするが、「あはあんっ」と立ちくらみを起こし、剣を杖代わりに身体を支える。

（何がッ、究極勇者絶対斬かつ！ 無駄に大仰な技名にばかり凝りおつて……まったく人間というのは、勇者というのは愚か極まる!!）

魔族にとつて人間は脆弱そのもので、支配して当然の格下の相手。

だが、世界は人間に「勇者」という切り札を与えた。選ばれし伝説の勇者は魔を退け、これを倒す聖なる力を持つ。

勇者は修行を積み、幾多の魔族との激闘をくぐり抜け、強く成長した。

そして今、史上最強の邪悪王と呼ばれた魔王ブロウ・ブロウの前に、立ちはだかつた者こそ、勇者アール。

「さ、さあ……そろそろ、貴様の息の根を止める時間がきたようだ。オレの絶対正義無双斬りを受けるがよい」

「やかましいッ、そんなへつびり腰で我に勝てるんでも……ぐあつ」

と、ここで魔王が足下の小石にけつまずいてつんのめる。

ぜえはあ、ぜえはあと息をしているのはこちらと同じ。魔王はばざりとマントを翻し、勇者に向けた手に魔力を注ぎ込む。

ばちばちと漆黒の稲妻が集まり、闇の力が恐るべき魔力弾を形成していく。

だが勇者もどうか体勢を立て直し、再び聖なるパワーを剣に集中させていく。

（ふっ、どうやら次の一撃で決まる、な。だが、最後に勝つのは私の最強攻撃魔法、ファイナルダークサンダーよ）

勇者の必殺技にケチをつけていたわりには、どっちもどっちの技名である。

「イヤッ……!!」

勇者と魔王が闘気を高めた、そのときであった。オギャアア……オギャアアア……。

荒野を吹きすさぶ風に乗って運ばれてきたのは、赤ん坊のような声。

死闘の場に明らかにそぐわない赤子の声に勇者は、そして魔王も呆気に取られる。耳を澄ませると、その声は地面を扶るクレパスの奥から運ばれてきているようだ。

「おい勇者」

「なんだ魔王」

「どう聞いても赤ん坊の泣き声のようなんだが」

「仕方ない、一時休戦……いや、なんだこれは!?!」

オギャアアア……オギャアアアア……。

聞こえてくるのは確かに赤子の声。だが、勇者が感じた禍々しいパワーは、尋常のものではない。

「あ、新たな魔族か？ くそ、こんな切り札が」

「いや待て！ これはそんなものではない。な、なんという馬鹿げたエネルギー……」

「あ」

勇者の指した方、すなわち自分の背後を振り返った魔王ブロウ・ブロウは、何かとつもないものを見たような気がした。

だが、その正体を見極めるより早く、彼と勇者は途方もない力に飲み込まれていた。

（なッ、なんだ、これ、は……）

抵抗することすらできず、ただ肉体が滅びていくのだけがわかる。

対峙していた勇者の気配も今は感じられない。魔王ですらこうなのだ、いかに勇者とはいえ脆弱な人間の肉體など、ひとたまりも……。

(クソオオオオッ！ こんなことで、ヤツとの決着がつけられぬなど、認めぬ！ 我は……み、とめ、ぬ……ぞお……ッ……！)

意識が消滅する寸前。

彼——邪悪にして最凶の魔王ブロウ・ブロウの耳に、祝福の鐘……転生を告げる伝説の鐘の音が聞こえたような気がした。

おお、まおうよ！

しんでしまうとはなさない

ふっかつのじゅもんをとなえますか？

↓はい

いいえ

2

「りやあああつつ」

ずばむつ、しゃぎいいいん……ッ。

銀光と共に一閃された刃が、イボだらけの不細工な怪物の頭部を一瞬で切断する。

ぐええ、と濁った断末魔の悲鳴を上げる魔物を振り返ることもなく、返す刀でもう一匹。

鮮やかな剣さばきで唐竹割りにすると、燃えるような長髪が糸を引くように流れた。

たおやかな身体のラインは明らかに女性のものの、「彼女」の身のこなしだけを見ていると、まるで舞姫の舞を見るがごとき。

剣士の額には汗どころか気負った様子すらなく、軽やかに身を翻しては、魔物の牙をまったく寄せつけない。

「お、おお……あれだけの魔物の群れをたった一人

で……」

美剣士の優雅な戦いを見守ることしかできない商人が驚嘆の声を上げる。

だが、流麗そのものの戦いの合間合間に、不思議な動きが混じるのはなぜだろう。

ときおり手を魔物にかざしては鋭く何かを叫んでいるようだが、特に攻撃魔法を使っている様子でもない。

手をかざした後に「チツ」と小さく舌打ちしているようだが、その行動の意味は不明。ただ彼女の強さは本物で、あつと言う間にすべての魔物を葬り去っていた。

「あ、ありがとうございます！」

彼は旅の行商人。

幼い娘を連れて、馬車で仕入れ先から帰る道なりだったのだが、いつも通る街道を外れたために魔物に襲われてしまったのだ。

魔物の多さに死を覚悟していたところ、突如剣士が現れて魔物を倒してくれたのだ。

「見たところお若いのにたいした腕前……」

謎の少女剣士の顔を間近に見た商人は、思わず見とれて言葉を失う。

赤みがかった茶色……はしばみ色の長髪と、同じ色の瞳と白い肌との見事なコントラスト。

すらり通った鼻筋につぼみのような唇はきりりと引き締まっている。

白を基調としたビスチェ状の剣士服は高価なものでこそないが、銀の籠手と脚絆と相まって、少女の凛々しさを際立たせている。

さらに特筆すべきは、引き締まった均整の取れたプロポーションだ。

豊かに突き出た巨乳とくびれた腰、引き締まった太ももに続くヒップのポリウムは、男のけしからぬ欲望をそそって余りある。

(いやいや、幼い娘のいる身で私は何を)

ぶるぶると頭を振って邪念を払い、馬車の中で震えていた娘にも礼を言わせようとした、そのときである。

ぴゅんっつ、と剣を振って血糊を飛ばす少女の瞳を、もろに見た商人の背筋が凍る。

「……………」

「あ……し、失礼しました、ででは私どもはこれで、こらつ、顔を出すんじゃないッ」

娘をしかりつけ、大慌てで馬車を出す行商人の顔は恐怖におののいている。

「な、な、なんだあの氷のようなまなざしは……魔物なんかよりよほど恐ろしい、血に飢えた獣のような目つきだったぞ」

「ねー、おとうさん」

「こ、こら、振り返るんじゃないっ」

「さっきのおねえちゃん、すつごくつよくてかっこよかったねえー。でも『ふあいなるだーくさんだー』ってなんどもいつてたのは、いったいなんなんだろうね？」

愛娘の無邪気な疑問に、父は答えを用意してはいなかった。

「くそっ……クソツ、クソクソクソオオオッ！ なせだ！ なせ魔法が使えないのだ!!」

がつん！ と拳に血が滲むのも構わず、少女は傍らの岩を何度も殴る。

形のいい眉をひそめるその口調は、美貌に似合わないささか荒っぽい。

自分が見目麗しい乙女だという自覚がないというか、「中身がまるで男性」であるかのようなぶつきらぼうさだ。

「ふう、ふう……魔力はある、それはわかっているんだ。魔王だった頃の記憶もちゃんと残っている。な

のになぜ、昔のように魔王の攻撃魔法が使えないんだ……」

「がっくりと肩を落としてうなだれた少女は、別に商人親子を助けようと思つて戦つていたわけではなかった。

「たまたま手ごろな肩慣らしの相手を追いかけていたら、結果的にそうなつただけである。

「剣術の修行にはなるものの……こんな体たらくでは、いつになったら再び魔王として世に君臨することができるのだ、レスティーナ・リグボルト！ いや最強にして最も邪悪なまお——」

「おおお……、こんなところにおつたのか、我が愛しの孫娘よお——」

背後から浴びせられた能天気な老人の声に、レスティーナは「ぶぽおっ」とむせ返る。

「なつ、げほげほつ。ジ、ジジイ？ な、なぜこんなところにいる！」

緩やかな白いローブとトネリコの杖は、聖職者の証。白鬚の老人の後ろから、軽甲冑の剣士姿の青年がひよっこり顔を出す。

「なぜ、じゃないよティナ。ボクたちに黙つて魔王退治の旅に出るなんて——」

「ウ、ウイルまで!?」

聖職者姿の老人はケイレン・リグボルト、レスティーナの実の祖父。

幼い頃に両親を亡くしたティナにとつては育ての親でもあり、司教として振るう回復の力は無類とも言われる。

そして長身の……どこかぬぼ〜とした糸目の青年はウイリアム・フェルディナンド。

ティナの剣術の兄弟子に当たる青年で、妹弟子のレスティーナには一歩及ばぬものの、一流以上の腕を持つ剣士だ。

「いやっ、いやいやいや！ わ、私は誰にも知らせ

ずに村を出たはずだ。行先はおろか、その目的も誰にも言わずに——」

「だって、ティナは伝説の勇者じゃないか。勇者が魔王退治に出るのは当然のことじゃないか、ハハハハハハ——」

のほほんとした糸目で笑う青年に、少女の額に青筋が浮かぶ。

「だからっ、私を勇者と呼ぶなど……ンヒイツ——」

つつ〜と背中を滑り落ちていく指先の感触に、ティナは全身総毛立つ。

「パツ、と振り返つた先にしゃがみ込み、無表情に見上げていたのは、銀髪眼鏡少女。

フードつきの裾の長いローブは闇色。小脇に抱えた分厚い魔導書は、少女が職業魔導師であることを示す。

一見して何を考えているか読めない風貌はやや幼いものの、神秘的な美貌と形容してもいいかも知れない。

「シユシユツ……！ お、お前の仕業だったのか。ウイルやジジイに私の行動の先読みなんてできつこないと思つたら——」

シユシユ・トリーという名の幼馴染みの少女は、何も答えず無言でVサイン。

「これでパーティーは全員そろつた！ 伝説の魔王ブロウ・ブロウが謎の破壊神に滅ぼされて既に百有

余年……今こそその破壊神を倒して、世界に真の平和を取り戻す、伝説の勇者レスティーナの戦いが始まるんだっ——」

「ホツホツ、わしも若い者には負けんぞよ。回復魔法なら任せておきなさい——」

（だから、人のことを伝説の勇者だとか言うなあああ〜〜ツツ、私は……私は魔王なんだああああ〜〜）

新世代の勇者候補として最も期待されている美少

女剣士レスティーナ。

しかしてその実態は、前魔王ブロウ・ブロウが転生した姿に他ならなかった。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

まで響き渡った。

「齢七歳にして「勇者候補」として勲章までもらってしまったのは、魔王としては屈辱以外の何物でもない。」

「剣の腕前は十分に上達した。だがそれだけでは足りぬ。私を滅ぼしたあの正体不明の怪物に復讐し、再び魔王として君臨するためには、魔王の力が必要なのだ。」

あのととき、勇者アーレスもろとも魔王を滅ぼした怪物は、その後一〇〇年余りというもの、不定期に目覚めては、でたらめに暴れたりを繰り返しているらしい。

（感じたのは一瞬だが、ヤツの力は圧倒的だった。魔力なくして勝てる相手ではない）

美少女剣士は傍らの雑木に向けて手をかざす。

精神を集中させ、自らのうちに眠る魔王の力に呼びかける。

「目覚めよ、我が真なる力よ。邪悪なる魔王の力を我に与えよ……………」

手のひらと心臓が熱い。

自分の中には確かに魔王の魔力が眠っている。

あと一歩、何かの契機が足りないだけなのだ。

「はあああああッッッ！ 妖魔力解放!! ファイナル・ダーク・サンダーアアアッッッッ」

喉も裂けよと迸った絶叫と共に、漆黒の闇の力が放たれたりほしない。

傍目に見れば、可憐な美少女が珍妙なポーズで出もしない必殺技の練習をしているという、相当にハズカシイ光景。

「グウッ……………た、耐えられん……………」

自分が魔王の転生であるということを隠している以上、皆の前で暗黒魔法の練習をするわけにはいかない。

「なんで私がこんな苦勞を……………だからパーティーな

んかいらんと言ったんだ」

たった一人旅をする冒険者は稀である。

理由は簡単、パーティーを組んだ方が冒険はずっと楽になるからだ。

兄弟子のウィリアムは腕の立つ剣士、祖父は回復魔法の使い手、そして幼馴染みの少女シユシユは攻撃魔法を自在に使いこなす。

互いに足りないところを補いあえる、実に理想的なパーティーと言ってもいいだろう。

（私が魔王じゃなかったら、の話だけだな）

自分を滅ぼした破壊神を倒し、再び魔王としての世に君臨する。

それがレスティナーの宿願である以上、兄弟子や幼馴染みといえども世界征服の妨げになるのはわかりきっている。

「だから、一人で旅に出たというのに……………」

確かにティナには魔王プロウ・プロウとしての記憶がある。

だが、リグボルトの家に生まれ、人間の少女として育ってきた記憶もまた、ティナ自身のもの。

人類の敵である魔王として生きること、悩んだ時期もなかったわけではない。

（私が魔王になったら、ウィルたちとも戦うことになるのだろうか）

膝を抱えうなだれるその姿は、年相応のただの少女にしか見えない。

魔物をばったばったとき倒していた少女剣士とはとても思えない、寂しげで儂げな美少女の肩がやがて小さく震え始める。

「クッ……………」

魔王の記憶を持つてはいても、ティナはうら若き乙女なのだ。

「クッ、クッ、クックック……………そうだ、何も悩むことなどない。闇に生まれ、闇に生きる。邪悪に

して非道、愛を踏みじり、希望を砕き、この世に破壊と混乱、絶望と混沌をもたらすことこそが、魔王の所行ではないか」

泣いているのかと思われた美少女が顔を上げると、そこに貼りついているのは世にも邪悪な笑み。

「ついてこられるのが迷惑なら、リタイヤさせてしまえばいいのだ。この私を呑気に勇者などと思っている極楽とんぼどもを欺き、裏切り、罠にかけ、旅などできぬ身体にしてしまえばいいのだ、わっつはっはははは！」

苦し紛れの冗談などではない、レスティナーの顔はどこまでもマジである。

「あの能面面のシユシユはともかく、ジジイやウィルを罠にハメるなど造作もなきこと。ヤツらもよもや、自分たちの勇者さまにハメられるとは思ってもらぬだろうて」

とんでもないことを言い出した美少女勇者は、自らの名案にうむうむと頷き、哄笑する。

「フフフ……………あーっはっはっはっは！ どうしてこんな簡単なことを思いつかなかったのだ。フヒヒヒヒッ、ウシャシャシャシャ……………」

夜の風に勇者にして魔王でもある少女の無気味な笑い声がいつまでも鳴り響いていた。

3

次の日の朝、眼鏡の魔導師シユシユ・トリーは幼馴染みにして美少女勇者であるレスティナーに呼び出され、薄暗い湿地帯にいた。

少し小高い丘になっていて、彼方には溪谷が見下には変わった色味の植物が群生している草原が見える。

「……………」

先導する少女剣士の後をとことことついていく魔

法使いの顔は無表情。だが、これはシユシユの通常状態だ。

恐ろしく無表情で無口なシユシユの真意は、幼馴染みのティナにもよく掴めない。

（昔つから、こいつだけは何考えてるかわからんというか、扱いに困るヤツだ）

誰にも言わず村を出奔したティナの行く先をズバリ言い当てたのも、おそらくこの少女だろう。

魔法の気配も感じなかったから、少女は「勘」でティナの思考を読みとつたとしか思えない。

思っていることがすぐ顔に出るウィリアムなどと違い、やりにくいことこの上ない。

（ウィルとジジイには既に手は打った。あとはこいつだけ……いくら勘が鋭くても、どうにもできないことだつてある）

ちら、と振り返つた先にいる眼鏡少女は、レスティーナよりもかなり小柄。

ゆつたりとした魔導師のローブからはその体型は読みとれないが、ティナのような巨乳爆裂ボディでないことは明らか。

そしてシユシユの体力も見た目通り、普通の少女のそれを大きく上回ることはないはず。

（それにしてもこいつ、理由も聞かずにあつさりついてきたな。ジジイもウィルも朝から姿を見せてないのに、心配もしてなさそうだし……やつぱりよくわからぬヤツだ）

ともあれ、自分以外のメンバーを旅からリタイヤさせられればいいのだ。

湿地帯の十分奥地までやってくると、レスティーナは幼馴染みの少女を振り返つた。

「なあ、シユシユ……お前の使つてる魔導書？ アレちよつと見せてくれないか」

眼鏡の少女は躊躇うことなく「ん」とローブの内側から分厚い本を取り出す。

魔導師が使用する杖や魔導書というのは、魔力の制御・増幅装置のようなものだと言ったことがある。シユシユのそれはしつかりした装丁で、このまま打撃武器としても使えそうだ。

「ふむ、これがそうなのか。なあ、ウィルたちに私の居場所を教えたのつて、シユシユだよな？ そんなに私の旅についてきたかったのか」

こくり、と無表情に頷く。

「……今から、村に帰ってくれつて言つたらどうする？ 私は一人で旅をしたいんだ」

「……………」

言われていることがわからない、というふうにな首を傾げる少女を見て、ティナは溜め息をつく。

真意は読みとれなくても、こういうときのシユシユが言うことを聞いてくれたことがないのを知っているからだ。

「ウィリアムとケイレン、どこ？」

ぼつぼつと単語を落とすように言つた。

本当ならもつと前にされていて然るべきだった質問に、レスティーナは髪を一振りして「にやり」と邪な笑みを浮かべる。

「ウィルには、手紙を渡した。二人きりで話したいことがあるから、あの山のでつぺんで待つてくれつて内容でな」

そう言つて指さしたのは、彼方にそびえ立つ山の連なりからひときわ突出している剣が峰。

少なくとも「ちよつと話があるから頂上に来てくれ」で呼び出せるような山では、明らかにない。

一流の登山者をして「何があるうと決して挑むべからず」とされた難攻不落の霊峰。

そそり立つ絶壁と永久氷河のオーバーハングが侵入者を頭として寄せつけない、文字通り死の山と言つてもよいだろう。

しかも五合目あたりは、極低温でしか棲息できぬ

寒冷モンスターの本拠。

魔物を避けるルートを取ろうとすれば、暗くて深い奈落が無謀な挑戦者を飲み込むべく待ちかまえている。

一瞬の油断が即、死に繋がる未だ人類未到の場所……それが霊峰の霊峰たる所以。

いくら二人きりで話したいからと言つて、そんなところに呼び出すなんて、普通なら一笑に付すところだ。

「二人きりで……つて言つたんだ？」

「ああ、ウィルはアホみたいに律儀だからな、今ごろ山頂目指して登山中だろう」

くつくつく、と悪辣な笑いを漏らすティナは、眼鏡の少女が「……わかつてない」とつぶやいたことに気づかなかつた。

「それで、ジジイの方は——」

どかああああんつつつ。

説明するより先に、遠くの草原で爆発音。それも一つや二つではない、連続して鳴り響くそれは、まるで誰かが地雷原にでも迷い込んだかのようだ。

「おつ始まつたな。ケケツ、ジジイのヤツ私とシユシユが水浴びしてるつてのを信じ込んで、まんまとあの一帯にハマリ込んだぞ」

「……バクレツソウの平原」

今の時期、バクレツソウに近づくのは自殺行為と言つてもいい。

成熟した実がほんのちよつとした刺激で文字通り爆散し、種子を周囲にばらまくのだ。

うっかり近づいた獣の毛皮をも貫通するそれは、動物の体内に埋まつて生息地を広げるとも言われている。

ドンツ、どんつ、ずばばばば〜んんんつつ。

種子の一斉射撃を食らつた獣は大抵驚きうろたえ、

草原を走り回ることですらなる集中攻撃を浴びる羽目になる。

「あひやひやひやひや！ 見ろシユシユ、ジジイとは思えない逃げ足だぞ。あゝあ、そっちの方が密生してるのに……ぎやはははは」

ぼふんぼふんと土煙を上げるたび、種子が爆発して、老人に襲いかかっていることだろう。

「お、どうやら私が事前に設置したウソ案内板を見つけたようだ。誘導に従っていけば安全地帯どころか、吸血ヒルの沼にハマるんだけど……くひひひつ、あのしなびた爺さんがあれ以上水分吸われたら、干物がミイラになっちゃうか？ 出汁も取れない爺さんの乾物だな、ひひひひ」

酷い目に遭っているのは自分の祖父だというのに、ティナは悪辣な笑い声を上げ、手を打って大喜びしている。

「……………」

「ん？ まあ心配することはない。老練まうけんしたとはいえ、爺さんは回復魔法のオソリテイ。あそこから抜け出すくらい体力と魔力くらいはあるだろうさ。まあ、死んだら死んだで運がなかったと思うしかないけどな……」

どこまでも本気でそんなことを口にするティナを見つめる眼鏡魔導師はやはり無表情。

だが、ハッと何かに気づいたように湿地に生える藪くさむらに視線をやる。

「気づいたか？ バクレツソウじゃないが、ここらに巣くつる連中に……」

ずるっ。

ずる、ずるずる……にゆるんっ。

藪の中から這い出てきたのは無数の触手を蠢うごめかせた蛇玉のような魔物。

獲物を確実に仕留めるため、いつの間にか周囲をぐるりと取り囲んでいる。動きこそ鈍いが、触手の

力は決して侮れない。

「……………」

無言でかざした少女の手に魔力の光が宿る。だがシユシユの攻撃魔法を見慣れたティナの目から見ても、その魔力収束はお世辞にも素早いとは言えない。

もたもたしているうちに、別の魔物がシユシユの足首に触手を絡ませ始めている。

「どうした、この魔導師がないと魔法もおいそれとは使えなさそうだな、シユシユ」

「……………」

ぼひゅつ、と撃ち放たれた魔力弾が、触手の塊を打ち砕く。

その一撃で蛇玉の動きが一気に激しくなる。

一匹倒せば二匹が這い寄り、二匹倒せば四匹が群がってくる。

無力な少女はたちまち触手玉に絡め取られ、地面に引き倒されてしまう。

「そいつらはそれほど凶暴な魔物じゃない。魔導師なしのお前でも、魔力を使いきればどうにか逃げられるだろう」

無論、魔導師を返すつもりはさらさらない。

ひよいひよいと触手をかわしながら、自分だけ湿地帯から逃げ出そうとしている。

「そらそら、魔力の出し惜しみなどしている状況ではないぞ……ククックッ！ ではさらばだ、幼馴染み殿！」

すちや、とおどけるように敬礼をし、ティナはシユシユを残して逃走に転じる。

シユシユは魔力弾の生成に追われ、とてもティナを追いかけるどころではない。

「ウィルとジジイによろしく言っておいてくれ！ 私は一人で旅を続けるからってな！」

そう言い残すや、美少女勇者は赤みがかった髪を

たなびかせ自分だけさっさと湿地帯を後にする。

野営した場所に戻ると、まだウィリアムもケイルンも帰った様子はない。ティナは自分の荷物を手早くまとめていく。

シユシユから取り上げた魔導師書は、少し迷ってから魔導師少女の手荷物の上に置いておく。

（これだけの仕打ちをしておけば、もうついてきたりはしないだろう）

腰に下げた剣をすらりと抜き放ち、幾多の魔物の血を浴びてきた刃紋をじっと見つめる。

（身内を裏切り、嘘をついて騙し、畏にかける。これが私の剣。レスティーナ……いや、魔王のやり方だ）

人間の少女として過ぎてきたこれまでの生活を断ち切るかのように、少女はゆっくりと剣を鞘に収める。

「さて——行くか。シユシユのヤツなら、そろそろ魔物を全滅させていてもおかしくない」

それでも念のため、レスティーナはもう一度湿地帯を覗いていくことにする。

だがそこで、少女勇者は想像もしていなかった光景を目の当たりにすることになった。

4

「ん……うう………んっ」

にゆる、にゆる、ぬめ、ぬめ……っ。

ロープの隙間から侵入してくる無数の細い肉触手が、生暖かい体液を肌を擦り込んでくる。

胸元のボタンは外れ、儂げな鎖骨や控えめな胸の膨らみが露わになっっている。

厚手のロープの内側はなんと下着姿。それも上下とも黒の下着に、ご丁寧ごていねいに黒タイツにガーターまで装備している。



「……………っ……………」

声を出すまいと必死に唇を噛みしめる。

眼鏡の魔法使いシユシユはティナと違って筋力に乏しく、植物的でなよやかな少女らしい体型を隠すこともできずにいた。

「ん……………くう……………しょ、触手型魔物……………食性は、精神汚染、け、い……………ッ」

必死に己を律しようとする魔物の特徴を分析するが、少女の白い頬に明らかに赤みが差している。

「た……………体液中に、と、特殊、効果を認める……………た、体表温度の上昇をかくに……………んんっ！」

この種の魔物は獲物の肉ではなく、精神エナジーを取り込むタイプだ。

物理的な危険はないが、長時間襲われ続けているれば精神が汚染され、最悪の場合、人格崩壊をも起こしかねない。

ことに、人間のメスを補食する場合、彼らはどの部分にどのような刺激を与えれば獲物が混乱するかを心得ている。

「ふあっ……………ん、ううう……………ッ」

下着の上から股間を撫でられ、シユシユは内股をひくひく痙攣させる。

だが足を閉じようにも両膝にしつかり触手が巻きついて、無様な開脚を強いられる。

少女の反応を見ながらじわじわと局部を責め懲るその動きは、下等な触手モンスターとは思えない、スケベ親父のような陰湿さだ。

「な……………なんであいつ、捕まってるんだ!! そんなに数は多くなかったはずだぞ」

物陰から幼馴染みの様子を窺っているレスティナーは、完全に混乱している。

無口で何を考えているかはわからなくても、シユシユの魔力容量やその実力は熟知している。

よもやあんな魔物に引けを取るなどあり得ない。

だが今眼前にそのあり得ない光景がある。

（ああもう、完全に捕まっちゃやってるじゃないかしかも一番のデカブツに……………シユシユの力じゃ絶対に振りほどけないぞ）

「んあ……………っ」

（しかし、それにしても……………）

聞いたことのない甘やかな声で悶える幼馴染みの姿に、ティナは頬が熱くなるのを感じる。

触手は少女の股間だけではなく、乳房を包む肌着の内側にまで潜り込み、くりくりと突起物を弄んでいるようだ。

その妖しい動きにシユシユは敏感に反応し、明らかに快美の声を上げている。

（あいつの、あんな声なんて聞いたことない……………そんななに気持ちいいのか？ ああ、あんなはしたない格好で腰をくねらせて）

無口でおとなしいからあまり目立たないが、シユシユはティナのような健康的な魅力とはまた違った意味で美少女である。

色白で唇はつぼみのよう、深い紺色の瞳は冬の星空のようでティナは好きだった。

込み上げる快感に手足をよじり、ひくひく震える華奢な少女を見ているだけで、胸の奥が熱くなってくる。

（くそ、触手の間際で私の幼馴染みを弄ぶとは！なんだか無性に腹が立つぞ。下等モンスターであんなに気持ちよさそうな顔を見せるなら、わ、私が優しく触ってやつたりしたら、あいついつたいどんな顔になってしまうんだ……………）

ティナの中で、「邪悪な魔王」だった部分がむくむくと活性化してくる。

（あんな触手に汚されるくらいなら、いつそ私自身の手でシユシユのあんなところやこんなところを弄り回してやればよかった……………そ、そんなもって、こ

の指でお股をぐりぐり弄んで、シユシユの大事な処女膜を引き裂いてやつたら、さすがのシユシユでも破爪の痛みで顔を歪ませたりなんかしちゃったりして……………）

自分がシユシユを組み敷いている光景が脳裏に浮かび、ティナはだらしなく頬を緩める。

白い肌を舌を這わせ、なよやかな太ももを押し開き、指を股間にそよがせたら……………そんな妄想で、思わず口元がにやけてくる。

「うえへへ……………シユシユのアソコは縮まりがよくてたまらぬなあ……………ハッ……………!! わ、私はいつたい何考えているのだ、何を！」

はしばみの長髪をぶるんと揺らし、少女勇者は決然とその場に背を向ける。

「こうなったのはヤツの不覚！ ふん、私としたことが、あやつを買いかぶっていたようだ」

ちら、と振り返り、触手に絡まれた幼馴染みを一瞥すると、美少女勇者の顔にどす黒い邪悪な笑みが浮かぶ。

「この程度の魔物も倒せぬようでは、この先の旅で間違ひなく無惨な死を迎えるだけ……………ここで触手にへろへろにされれば、私についてこようなんて気もなすぞう」

まるで自分に言い聞かせるように、ティナはうむと頷く。

「シユシユはあれで神経のず太い女だからな。触手が満足して解散すれば、けろっといつものシユシユに戻るだろう。死んだり、再起不能にまではなったりしないさ、はは」

幼馴染みの痴態から目を背け、立ち上がりかけたときである。

「む……………？ このゲスな触手玉めが」

見るとティナの足首に小さな触手玉が絡みついて

ノロイ党の思惑は――



沙汰は
無しか

あてが
外れたのう

理由は
どうあれ

フム



「青龍」が健在で
ある事に変わりはない

まずは良しと
すべきだろう

うむ



フン!

今一度妾が
撃つて出ようぞ

我が「朱雀」をもって
上弦諸共食らい
尽くしてくれるわ



あわっ!!

ふあああ



ぎこごこ

ははなしてっ
まだ途中なのっ

まだ

出るのおっ



いや
これつきりだ

想い人の腹ン中
でなきやもう一生
粟一滴出せねエよ

想い!?!



迷惑：：
かけないように：：

…っだから
せて…



ナリカは
偉いなあ



こんなに苦しいのに
一人ぼっちなのに

みんなのために
一生懸命頑張って…

やめて…



タカマルの声で
そんなこと
言わないで!!



ダメよ
そんなこと…っ

私…こんなに
なっちゃって

もう…お
おヨメさんなんて
無理だし…っ

「閃忍」でも
なくなっちゃって…



やめてよ!



ひにやつ!!

本当にいい子だなあ



可哀相に

こんなに泣いちゃって

うんうん





フレイアVSフルセン、ついに最終決戦!

『閨神艶戯』にて『ハーレムキャッツル』コミック連載中!

ハーレムシネラル

THE LEGEND OF HAREM GENERAL

最終章 不死身の將軍

小説
NOVEL

たけうち
竹内けん

挿絵
ILLUSTRATION

な
かん奈

登場人物紹介



クリスティーナ

リュシアンが率いる部隊の戦目付で軍師役。真面目なエリート。



ルキノ

下級兵士からの叩き上げで、一騎当千の強さを誇る女戦士。



オルタンズ

リュシアンの先輩で、現在は副官を務めている。



マージョリー

フルセン王国に祖国を滅ぼされ、フレリア王国に亡命した女将軍。

前号までのあらすじ

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。戦いでミスから自分を縛って現れたクリスティーナを、部下の女たちとともに責めて処女を頂くのだった。

「閣下、それはいかなる理由からですか？敵は目下、勝って勝つて勝ちまくっています。ここで退却する謂れはないでしょう」
オルタンズから手渡されたお茶を、苦そうに叫びたリュシアンは、まさに茶飲み話といった様子で口を開く。
「敵は前回の戦いで追撃してこなかったよね。勝ち戦で追撃の手を控えるって普通する？」
「……っ」
前回の戦で、コテンパンにされたところを

「はい。我らを蹴散らすことができても、王都にはまだ国王陛下がおられます。また、よしんば我が国を滅ぼすことはできたとしても、東にいるドモス王国のことを考えますと、とても支配を維持できないでしょう」
クリスティーナの答えに、リュシアンは頷く。
「たぶん、エルフィンのお思惑としては、エバークグリン城を占領して橋頭堡を確保したいってぐらいはあったらうけど、本音は国内問題だと思っんだ」
お茶のお代わりを淹れてやりながらオルタンズが

「エバークグリン城を包囲していた敵が退却を始めた！」
リュシアンが西部方面軍の総大将を拜命してからすぐのことである。
フレリア王国の西の最前線エバークグリン城を包囲していたフルセン軍が、一夜にして消えたという情報が入った。
戦目付のクリスティーナから、寝ているところを叩き起こされたリュシアンは、せつつかれるままに軍議を開く。
直属の幕僚とは別に、前任者のダングラール將軍からそっくりそのまま引き継いだ三人の將軍も駆けつけた。
「性懲りもなく、また我らを誘うための罠か！」
「何度も同じ手を食らうと思うとは、我々も舐められたものですね」
「知恵の泉も枯れたと見える。せいぜい無駄に踊っていたらどう」
それぞれ千人前後の兵を率いている国を代表する軍部の重鎮であり、歴戦の猛者たちであった。しかしながら、いずれもムサイおっさんたちであったから、リュシアンの興味を誘う存在ではない。

寝ぼけ眼のリュシアンは、半ばウトウトしながら軍議の行方を見守った。
このやる気のない態度に、將軍たちは戸惑っているようだが、もともと変わり者として知られた人物である。
貴人として、敬っておけばいいと冷静に判断したらしく、無視して軍議を進めた。
会議の流れとしては、このまま敵の蠢動を見守ろうということに落ち着こうとしたときである。不意にリュシアンは、副官のオルタンズに声をかけた。
「先輩。悪いけどお茶濃いめにちょうだい。お茶っ葉ケチらなくていいよ。たぶん、今回の戦争はもう終わりだ」
「……っ!?!」
軍略に一家言ある將軍たちの意見とは、真つ向から反対の見解をこどもなげに吐いたのだ。
若僧、それはどういふことだ。と言いたげに將軍たちは殺気立つ。
またいい加減なことを、と言いたげな顔をした戦目付のクリスティーナだが、この一見、無能。実際に無能な男だが、その本能的な直感力は無視できない、ということを肌身に染みて実感させられているだけに、年上の將軍たちに代わって、説明を求めた。

リュシアンに助けられたことを思い出したのか、敵意剥き出しであった將軍たちは肅然となった。
將軍たち以上に、思い出したくない過去を思い出したクリスティーナは、顔をしかめながら応じる。
「それは……さようですね」
「先の戦における敵の作戦目的は、エバークグリンの周囲に展開しているぼくら後詰めの兵を叩き潰すことだと思っていた。でも違ったということだ。なら、何が目的だったんだらう？」
総大将の疑問に、幕僚一同は顔を見合わせる。そして、リュシアンは顎で將軍たちを示した。
「その答えが、これだ」
「……は？」
総大将の言わんとしていることがわからず、將軍たちは戸惑う。
「つまり、ぼくらをこういう心理に陥らせるための作戦だった、と考えれば辻褄が合うじゃないか？」
「……ん？」
リュシアンの説明はどうにも要領を得なかったが、クリスティーナも何か引っかけたようで眉を寄せて考える顔になる。
「そもそも敵の今回の出兵の作戦意図は何か？まさか我が国を占領支配できるとは思っていないでしょう」
「はい。我らを蹴散らすことができても、王都にはまだ国王陛下がおられます。また、よしんば我が国を滅ぼすことはできたとしても、東にいるドモス王国のことを考えますと、とても支配を維持できないでしょう」

口を挟む。

「外に共通の敵を作ることによって、国内の統一を図る。軍事国家がよくやる手ですね」

「そう、西方半島というのは、少し前までセルベリア、サイアリーズ、フルセンの三ヶ国に分かれて鼎立していた。それをセルベリアが統一し、フルセンが篡奪した、という流れがある。当然、未だに国内には深刻な対立があるだろう。それから目を逸らさせるための出征だった。だから、野戦で勝利し、適当に武威を示せしめ、採掘場から魔法触媒をせしめることができた今、とりあえずは満足し、長期出兵の無理をせずに一旦退却しようとしていた、と考えても不思議ではない」

「なるほど」

総大将の意外な観察能力に、幕僚たちは感心した様子で頷く。

「敵は追撃をしなかったのではなくて、できなかったと考えると考えればいろいろと見えてくるんじゃないかな？」

リュシアンは指摘は、新鮮な空気となつて幕僚たちを打った。ややあつて、末席にいたルキノが遠慮がちに呟く。

「つまり、敵の物資の欠乏は、我々が思っていたよりも深刻だった、ということですか？」

「その通り、ぼくらの嫌がらせ作戦が功を奏したということだ」

リュシアンは胸を張ったが、実際のところ、出撃するたびに軽く一蹴されていた。しかしながら、敵は勝つても、なんら得ることなく、無駄に矢や魔法宝珠を消費させられていたのだ。

「前回の戦闘における敵の作戦意図は、ぼくらを殲滅することではなく、一撃を加えて、ぼくらが畏だの意図をくじくことだった。そして、ぼくらが畏だと思ひ警戒しているところを、本気で退却する。こ

ういう作戦だったんだと思うよ」

話終えたリュシアンは口直しに饅頭を頬張った。一方、軍議の席はシーンと水を打ったように静かになっている。ややあつてオルタンスが口を開く。

「凄くいい、リュシアンくんがまともそうなこと言っている」

「ヒド、先輩がぼくのことをどう見ているかよくわかりますね。これでいろいろ考えているんだよ」

「やだ。わたしはリュシアンくんの一番の理解者よ」笑つてごまかすオルタンスは、肘でリュシアンを小突き、それをリュシアンは押し返す。

軍議の席でじゃれあうバカッブルのことは他所に、クリスティーナを始めとした軍事専門家の人々は、何やら思案していたが、やがて称賛の声を上げた。

「素晴らしい！」

「わしも総大将の意見に賛成じゃ。さすがはその若さで総大将に抜擢されただけはある」

自分の親というより爺さんの世代から口々に絶賛されてリュシアンは大いに照れる。

「いやいやいや、たまたまですよ」

「ご謙遜を。血は争えませんな。亡きウルベイン殿下のお血筋は確かに健在じゃ」

岡目八目とはよく言ったもので、やる気がないからこそリュシアンは敵の意図を正確に読みきれたということだろうか。

そんな和やかな雰囲気はクリスティーナは、両手で軍机を叩いて断ち切った。

「そうと決まれば話は簡単です。追撃しましょう」

元気な小娘に続いて、歴戦の將軍たち及び、それに従っていた幕僚一同も勇躍して立ち上がって声を上げる。

「フルセンの盗人ども一兵たりとも生かして祖国には帰さぬぞ！」

「おう！ 復讐の時は来れり！」

意気上がる人々を前に、ただ一人、リュシアンは不満の声を上げる。

「えい、せっかく敵が逃げ帰ってくれるんだから、それでよしとすればいいじゃん」

見事な情勢分析をしてみせたわりに、相変わらずやる気のない上司を、クリスティーナは怒鳴りつけてる。

「何をのんきなことを。ここで取り逃がしては近い将来また来襲すること必至です。ここは断固追撃して完膚なきまでに蹴散らさなければなりません！」

今回は退くエルフィンだが、これは一時的なことに違いない。これからもしつこく越山を繰り返すことだろう。

それを防ぐためには、敵の機動部隊を壊滅させなければならぬ。

そして、退却する敵を追撃するというのは、まさに決定的な打撃を与えるチャンスなのだ。

わざわざこんな偽装をしたということは、敵も追撃されることを恐れているという証であろう。敵の嫌がることをする。それが戦争なのだ。

「將軍。追撃させてください！」

「お願いします」

意気上がる幕僚たちを前にリュシアンは、左手を顔に乗せて天井を見上げると、わざとらしく溜め息をつく。

「はあ〜」

「閣下ご決断を」

クリスティーナが今一度促してきた。

部下たちの突き上げを前に、若き総大将は心底からやる気がなさそうに応じた。

「まあ、仕方ないか……」

覚悟を決めたリュシアンは、左手を顔から離れた

とき、表情を一変させていた。

「やるからには徹底的にやるぞ。ハンパな気持ちで

やるとこつちが大火傷をする」
眼光鋭く一瞥したその表情には甘さがなく、まさに若き將軍の精悍な面構えである。

その覇氣溢れる表情に、幕僚一同は威に打たれた。今までの反動もあって、あるいは、この大將は韜晦してただけで、本当は物凄い才能を隠した名將なのではないのか、という予感に捕らわれたのだ。そういう錯覚を覚えさせるだけ、見てくれだけはいい男なのである。

男たちはしびれたし、女たちは濡れた。リュシアンに対して懐疑的なクリスティーナやオルタンスマで一瞬、我を忘れて魅せられた。

「わかつております」
瞳に闘志燃やすクリスティーナの声に、リュシアンは頷く。

「よし、全軍出撃。きつとエルフィンエルフィンの首級しゅきゅうを上げる！」

「えい！ えい！ おう！」
羊の皮を脱いだ狼の煽動に従って、意気上がるフルリア軍は猛然と追撃を開始した。

※
「いた！ 追いついた。フルセン軍です」
エバグリーン城を包圍していたフルセン軍は、

一路祖國に帰るべく、砂漠を行軍していた。それをフルリア軍は捕捉することに成功する。

「突撃っ！」
見敵必殺とはまさにこのこと。フルリア軍の先鋒は勢いに任せて突撃した。しかし、フルセン軍は、これを予期していたのだろう。たちまち猛射を浴びせられる。

算を乱しての突撃は、たちまち撃退されたが、フルリア軍の士気は高かった。追いついた軍から逐次突撃。そして、そのたびに撃退された。

敵を撃退するとフルセン軍は行軍を再開。フルリア軍も態勢を整えて追撃を再開する。

三人の將軍は交互に突撃しては撃退されていた。そんな激戦の最中、最後に十二人の野郎の担ぐ輿に乗って登場したリュシアンは、戦況を見てうんざりとした。

「うあ、やはり異なんじゃねえ……。適当なところでお茶を濁して終わりにしない」
自分の戦況分析をたちまち覆そうとするリュシアンを、傍らで河原毛の馬に跨がったクリスティーナが怒鳴りつける。

「出陣のときに見せた、あの覇氣溢れるお姿はなんだっただけです！」
「いや、あの場合、ああでも言わないと収まんなかったでしょ」

リュシアンの言い訳に、クリスティーナは顔を背け、左手を握り締めながら、歯噛みをし、何やらぶつぶつと呟く。

「こういうやつだ。こういういい加減なやつだとわかっていたのに、一瞬、ときめいてしまったわかって……」

過去の自分の感情をなかつたことにしたいらしい女軍師はひとしきり苦悩した後、なんとか精神的な再建を果たして、声を張り上げる。

「閣下の読み通りでした。敵は本気で帰国するつもりです。攻撃の手を緩めるな。一兵たりとも生かしてターラキア山脈を越えさせてはならぬ」

これではどちらが総大将かわかつたものではないが、戦術指揮能力という意味ではクリスティーナのほうが何倍も才能がある。

ともかくも追撃戦と迎撃戦。その整然たる攻防が幾度となく繰り返された。

勢いに乗るフルリア軍に対して、フルセン軍は要所に伏兵を配して逆撃を加えてから退却していく。

「くう……さすがに硬い」

戦争に置いて、退却戦が一番難しいと言われているが、守勢が攻勢より易いというのをもまた戦理である。追撃軍は攻撃側であり、敵の待ち構えているところに突撃しなくてはならないのだから、損害はバカにならない。

「帰師阻むべからず——故郷に帰ろうとしている軍隊を追撃すると驚くような損害が出るからやめときなさい、という言葉もあるくらいだ。」

「そうこうしているうちに、戦線はターラキア山脈の麓にまで達してしまった。」

山を越えたらフルセン領である。さすがに敵地はまだ攻め込む余裕はない。そうなったら、フルセン軍の勝ち逃げだ。

「手駒が足りぬ。もう、千騎、いや、五百騎でもいい。そうすれば敵の側面に回り込み、敵を攪乱できるものを……ここまで追い詰めてみすみす取り逃がすのか」

悔しがるクリスティーナだが、実はまだ、切り札を残している。

リュシアン率いる直属軍を投入してはいないのだ。ルキノ率いる女騎士団の他、千人を超える余剰戦力であった。

しかし、これを投入して撃退されたら最後、追撃軍の足は完全に止まる。現在、前線で戦っている三軍が、撃退されても撃退されても、すぐに態勢を立て直して追撃戦を再開できるのは、後方にこの部隊がいるおかげだ。

この最後の手札をどこで切るか、これがクリスティーナの用兵家としての腕の見せ所であろう。

「後方から砂煙が上がっています」
「なにっ?！」

クリスティーナは目を剥いて、後方に目を向ける。みな一瞬、やはりこれはフルセン国王エルフィン

「ハーレムジェネラル」

「ハーレムデスティニー」

「ハーレムロイヤルガード」

「ハーレムマイスター」

「ハーレムプリズナー」

「ハーレムウェディング」

の畏で、背後から伏兵が来るのか、と背筋に水を落とされたような気分を味わった。

しかし、その軍勢の掲げているのは、菱形に丸の軍旗。すなわち、フレイアの軍旗だ。

「あれはマージョリー將軍っ!?!」

エバーグリン城に籠城していた兵を率いて駆けつけてくれたのだ。

その数は五百人にも満たなかったが、一割増である。この意味は大きい。

クリステイナーが喉から手が出るほどに欲しかった五百騎である。それも、歴戦の將軍に率いられたフルセン軍に恨みを持つ、極めて士気の高い軍勢だ。

マージョリー將軍は、左翼から回り込み、フルセン軍の右側面から突撃した。

右側。すなわち、武器を持つ手。盾を持たない死角だ。

一般に軍勢は、右側面が弱いと言われている。「見事っ!」

マージョリーが嫌いなクリステイナーだが、その絶妙なタイミングで登場した友軍を喝采した。そして、ただちに上司に進言する。

「閣下、勝機です。今こそ全軍に突撃命令をしてください」

その青い瞳は血走って、とてもではないが冗談とかで茶化せるような雰囲気ではない。

仕方ないのでリュシアンが従おうとしたとき、クリステイナーは小声で注文をつけてきた。

「先ほど、出陣のときに見せた、あのカッコイイ雰囲気でお願ひします」

「あ、はいはい」

輿の上でだらけていたリュシアンは、すつくりと立ち上がった。

一瞬前までのへらへらしていた雰囲気は影を潜めて、これぞ若き名將といった風格で、軍配をかざす。

「全軍、突撃せよ!!!」

「うわああああああ!!!」

ついに最後のカードが切られた。ここで敵陣を崩さないと、追撃戦は失敗である。

そのことは兵士たち個々人もわかっていて。クリステイナーも愛馬に鞭を入れていた。

「全軍突撃っ! わたしに続けっ!」

全軍の総参謀長たるクリステイナーが抜剣。先頭に立って馬上突撃を敢行。陣頭指揮に入った。

ここが最後の一大一番だ。それはまさに死闘となった。

焼けた砂は、人々の熱気でさらに燃え上がる。その激闘に、突如として変化が起こった。

フルセン軍からの猛射が途切れたのだ。「えっ?」

思いがけない事態に、フレイア軍は困惑する。「これは……矢切れ?」

クリステイナーが茫然と呟いた。「敵さんの物資は、本当に困窮してたんだねえ」

後方で他人事のように観戦していたリュシアンも呟く。

ついに鉄壁だったフルセン軍の殿軍が崩れたのだ。まさにフレイア軍の執念の成果と言っていられる。

矢の援護のある軍と、ない軍。それは戦力的に雲泥の差がある。

勝利を確信したフレイア軍の兵士たちは勢いに乗って敵陣に突入した。フルセン軍は後方の部隊から順次、ターキア山脈に逃げ込む。

「うわああああ!!!」

白兵戦へと移行すると同時に、突撃していった兵士たちが血相を変えて引き返してくる。

「ほら、どうした砂漠の鼠ども」

追い立てているのは、十文字槍を振り回す壮年の男。

男。

フルセン軍の殿軍を務めるロックス將軍だ。この歴戦の勇士は、山道に独り立ち塞がり、自軍の兵士たちを援護しつつ、追撃軍を止めてしまった。

その豪槍が振るわれるたびに比喩でなく、文字通り、本当に人がぶっ飛んだ。

「うわっはっはっは、こそそと逃げ回っていた鼠が今さら出てきて勝てるなどと考えるのが浅ましいわ」

その姿に激昂したのはクリステイナーだ。

「ええい、怯むな! エルフィン首級は取り逃がしたが、せめて右腕たるこやつ首級は頂く。数で押し潰す。我に続けっ!」

蹶躩色の軍服を返り血でさらに赤く染めたクリステイナーは、馬上サーベルをかざして、突撃。それに五騎ほど続いた。

「笑止っ!」

一喝とともに十文字槍は振るわれ、クリステイナーは馬上から弾き飛ばされた。それどころか、従っていた五騎全員が白い砂地に叩き落とされていた。

「つええ……」

兵士たちがビビって逃げ出すのもわかる。後方で督戦していたリュシアンも目を瞠った。

「ば、化け物が」

さすがの強気のクリステイナーも、顔面蒼白で奥歯が震える。

白いズボンの内側からみるみるうちに濡れていく。失禁しているような女を殺しても手柄にならぬと思ったのか、ロックスは悠然と身を翻す。

敵を撃退したとはいえ結局、有効な打撃を与えられなかった。

敗北感に打ちひしがれるフレイア軍はただただ見送るしかなかったかに思われたとき、呼び止めた声がある。

「待たれよ、ロックス將軍。敵に背を向けるとは勇名が泣くぞ」

青い豊かな髪を筒状の髪飾りで包み、ツインテールにし、砂塵に柵引かせる。

青いビキニ鎧に身を包んだ女勇士だ。

「ほお、小娘っ、いい度胸だ」

自分の娘ぐらいの年齢であろう女騎士に挑発されたロックスは、年甲斐もなく振り返った。

「我が名はルキノ、お相手願う」

馬から降りたルキノは、三本刃の戟を振り回して見得を切った。

「ルキノ……。ほお、あのお嬢ちゃんどやりあったとかいう女か、面白い。一つ揉んでやろう」

余裕綽々のロックスに対して、ルキノは真剣だ。

「参るっ！」

三本刃の戟を構えた女騎士は、白砂を蹴り、双尾の髪を柵引かせながら真つ正面から突っ込んだ。それを十文字槍を構えた中年親父は真つ向から迎え討つ。

ガツン！ ガキン！ ドス！

「っ！」

フレイア軍の誇る青い稲妻。彼女ならやってくれ、とみんな期待した。

しかし、その期待は一瞬にして窄む。

(ダメだ。完全にパワー負けしている)

見物していたリュシアンは顔を覆った。

攻防は一方的だった。ロックスが攻勢を、ルキノはやつと凌いでいるという有り様だ。

「ふん、悪くない腕だが、所詮は女子供だな。フレイアにはこの程度の勇者しかおらぬのか！」

「くっ」

盛大に侮られても、ルキノは言い返せない。会話などしようものなら、その瞬間に決着がつくとわかっているのだ。

そんなある意味、リンチのような光景を中断させるべく、リュシアンは進み出た。

「そこまでだ、おっさん。無駄な抵抗はやめて投降しろ」

その猪口才な言い分に、ロックスは攻勢を止めて、ギロリと一瞥した。

死闘から解放されたルキノは、全身から滝のような汗を流してしゃがみ込んでしまう。その肩で息をする姿では、もはや戦う余力はあるまい。

リュシアンの左右には、女騎士隊の面々が、弓矢や魔法を構えている。

「バカっ、なんで出てきた！」

リュシアンの登場に、虚脱状態だったクリステイナは目を剥く。場の雰囲気が変わったことを察したのだろう。ロックスも少し興味を引かれたようだ。

「しゃらくさいな。しかし、小僧。いい軍服を着てるな。わしの手柄となる者の名前を聞いておこうか」

その誰何に対して、リュシアンは砂漠に仁王立ちして咳を切る。

「聞いて驚け。フレイア王国国王マドアスが甥にして、西部方面軍司令官。不死身のリュシアンとはぼくのことだ」

その名乗りに、ロックスは呵々大笑する。

「ほうっ、おまえが噂のウナギ將軍か?? 智將と聞いていたが、案外、陣頭の猛將という側面もあるのか。面白い」

智將にせよ、猛將にせよ。リュシアンをよく知る者から見ると噴飯ものの評価だったが、敵対陣営ではそのような評価がなされていたようである。

「えっ……」

ロックスの言葉に、リュシアンは顔色を変える。

「あ、却下。その渾名は却下。不死身のリュシアンって広めてくれよ」

必死に叫ぶリュシアンの抗議など、ロックスは聞

いていなかった。

「なるほどひよろひよろしたやつだ。いくぞ、ウナギ小僧。お望み通り、一騎討ちにに応じてやろう」

「いや、ちよっとタンマ、誰も一騎討ちなんて言っていない！」

リュシアンの抗議など聞く耳持たず、十文字槍を振りかざしロックスは猛然と斬り込んできた。

「は、放て」

一騎討ちになど応じて、瞬殺されることはわかりきっているのだ。リュシアンは恥も外聞もなく慌てて従えていた女たちに射撃を命じる。

飛び道具が卑怯とか、人数差がどうとか、なりふりなど構ってられない。

百本以上の矢と、魔法の矢が、集中砲火された。

しかしながら、さすがに元帥級の將軍である。よい鎧兜を着ている。厚い鉄板と魔法障壁などによって、すべて弾かれてしまった。また鎧以外の部分には掠りもさせない腕前である。

暴風雨のような魔法や矢の雨の中、ロックスは一直線に獲物に向かう。

(ちよっと待てえええええ)

洒落にならない迫力にリュシアンは震え上がった。ロックスのほうとて真剣である。悪鬼鬼神の如き表情で十文字槍を振りかぶった。遊びは一切なし、真剣に討ち取るつもりようだ。

「閣下っ！」

私たちの悲鳴が辺りを覆うが、誰一人として動かない。みんなロックスの鬼神ぶりに腰が抜けてしまっているのだ。

「もらったあ！」

一撃が決まる。

優男の頭はかち割られるか、吹っ飛ばしたかどうか。誰もがそう予測した。

しかし、凶刃は寸前のところで止まる。

75

清廉な退魔巫女を襲う、
過酷な孕ませ陵辱!!



鬼狩巫女 静香

小説 NOVEL おかしたまご **岡下誠** 挿絵 ILLUSTRATION きのこのっこ

夜の闇に浮かぶ満月は、生々しい血を思わせる赤みを帯びている。赤い月が照らす下界の片隅では、人々が騒然となっていた。

制服姿の警察官が敷く封鎖線の内側では、ものものしく武装した機動隊員たちがオフィスピルの入り口を取り囲んでいる。もちろん、裏口や非常階段も機動隊員たちがふさいでいた。

後は突入の命令を待つばかり……。のはずであった。

「くそっ。どうなっているんだっ」
指揮車の中で、隊長は苛立たしげに吐き捨てる。厳しい訓練を重ねてきた部隊なのに、手も足も出ないのだ。

突入させた精鋭部隊は数分で連絡が途絶えた。頭痛を訴えた後に異常な悲鳴を上げ、応答しなくなるのだ。

ビル内部の状況は全くわからない。犯人はこのビルに勤めるサラリーマンであり、十数人のOLを人質に取っているというだけで、警察側が把握している情報の全てだ。

「隊員の方々を責めないであげてください。彼らに落ち度はありません」

冷やかな声が指揮車内に響いた。隊長は、聞こえよがしに舌打ちをし

てから声の主を睨みつける。
指揮官である隊長に生意気な口をきいたのは、長身の若い女。彼女が機動隊員でなく、警察関係者でさえないことは、その衣服を見れば明らかだ。

女は巫女装束をまとっているのだ。まぶしいくらいに白い上着と、鮮血のように赤い袴。その上に、千早と呼ばれる薄衣を羽織っていた。

「お気を悪くされたのなら謝ります」
言葉の内容とは裏腹に、謝罪の意思は全く感じられない。
彼女の名は九鬼静香。

作戦が上手くゆかないこともさることながら、この女の存在が隊長を苛立たせている。部外者の巫女など追い出したのは山々だが、それをできないのは上からの命令があるからだ。

「私が申し上げたいのは、相手が悪かったという事です」
真横に切りそろえられた前髪の下では、深く澄んだ黒色の瞳がじつとこちらを見据えている。冷涼な容貌は、神秘的な美しさをたたえていた。

白衣の胸元は、大きく張り出している。肉体の線が現れにくい巫女装束であるが、彼女の胸があまりに豊かであるため、線を抑えきれずにいた。

「何しろ、相手は『鬼』ですから」
巫女装束の女は、なめらかな心地よい声でささやく。

「ビルの内部から鬼の気を感じます。それも、かなり強力な」
「またその話かっ」

苛立ちにまかせて隊長は怒鳴った。「鬼だなんてバカバカしい。俺は信じないぞ。そんなおとぎ話は」

女は無表情のままだ。「どのような感想を抱くのも結構ですが、突入部隊からの連絡が途絶えていることをお忘れなく」

巫女の超然とした態度が腹立たしい。そして、彼女の言葉が正論であるだけに、一層のこと苛立ちが募る。
「私にまかせていただければ、必ずや鎮圧してご覧に入れますが」

「部外者にはまかせられんっ」
「では、無益な突入を繰り返しますか？ 私はそれでも構いませんよ」
その声音には冷気すら感じる。

「私は、突入させられる機動隊員にも、人質の安否にも興味がありません。鬼を狩ることのみが目的ですから」
苦々しい表情で隊長は押し黙る。

「手柄を横取りされることを懸念なさっているのですら、どうぞご心配なく。先ほども申し上げましたように、鬼狩だけが私の望みですのぞ」
女の唇は微笑しているが、涼やかな目だけは決して笑っていない。

かつて鬼と呼ばれる一族がいた。常人をはるかに凌ぐ身体能力を誇り、不可思議な神通力を操ったという。その腕力たるや大木を引き抜くほど。その生命力ゆえに、数十の矢傷を受けてさえ倒れない。ひとたび地面を蹴れば、谷をも飛び越えたという。

神通力についても様々な逸話が残っている。念じただけで人々を逃散させたとか、視線だけで女を魅了したとか。

鬼一族の尋常ならざる力を、人々に時に恐れ敬い、時に憎んだ。とはいえ、時代が下るにつれて鬼の力は次第に衰微していった。常人との交わりによって徐々に血が薄まっていったからであろう。現在では、その存在が昔話として語られるのみだ。鬼が実在したことさえ、忘れ去られている。

だが、ごくまれに鬼の血が目覚めることがある。普通に生活していた人が、ある日突然に暴れ始めるのだ。

人間離れた力を発揮し、おのれの欲望のみ従う。本能が赴くままに喰らい、女を犯し始める。
鬼の存在が人々に知られていないのは理由がある。血に目覚めた者である女がひそかに狩っているからだ。

「これほどとは。なかなかやるな」
あたりを見まわしながら静香はつぶやいた。ここはオフィスピルの三階。何十人という機動隊員が倒れている。皆、苦悶の表情で失神していた。

隊長と一悶着した末にビルへ入ってみれば、思った以上の惨状である。
「くっ……」

鈍い頭痛を感じて静香はわずかに眉根を寄せた。鬼の神通力だ。
「千早がなければ危なかった」
白衣の上に羽織っている薄衣は、退

鬼の呪文字が金糸で刺繍されている。「一般人ならば失神も無理はない」
倒れている機動隊員をそのままにして、静香は階段を上がった。

五階まで来ると、鬼の気がこのほか強く感じられる。

「ここか……」

得物の長杖を強く握りしめてから、オフィス内へと足を踏み入れる。

そこでは、三階よりもさらに異様な光景が繰り広げられていた。

半裸のOLたちが、一人の男に群がっているのだ。下半身を剥き出しにして、はだけた胸元から乳房をあらわにしつつ、男の脚にすがりついている。

「あああ……んっ……はああ……。ください……お情けをください……」

一人の女性は、男の足元にひざまずいて、筋肉質の脚を抱え込むようにしていた。剥き出しの美尻をくねらせながら乳房と女陰をこすりつけている。

「どうか私のあそこにくください……。あそこがもうたまらないんです……」

もう一人のOLは、尻肉を高く持ち上げて這いつくばり、男の足指を舐めしゃぶっていた。陶酔の顔つきで横たわっている女もいるし、その女の秘唇を舐めしゃぶっているOLもいる。

彼女たちは、脅されてそうしているようには見えない。むしろ、喜々として痴態をさらしていた。

何人もの女たちから淫奉仕されているその男は、素っ裸である。サラリーマンとは思えないほどに筋肉が隆起していて、たくましい身体つきだ。

二人のOLを机の上に押し伏せて代わる代わるに責め犯している。

「ひっ、ひいいっ……あああっ」

「もっど……もっどください……。私にあそこに子種汁をお……」

二人は競うようにしてよがり悶え、丸裸の美尻をうねり舞わせている。野太い肉杭で刺し貫かれるたびによがり啼き、女肉穴を収縮させていた。

「孕ませてやる。孕ませてやるっ！」

獣さながらの荒々しきで男は腰を打ちつけ、男根をえぐり込んでいた。女を喜ばせようなどという意図は全く感じられず、ただただ自分の性欲、自分の生殖本能を満たそうとしている。

「はあっ、あんっ……ああん……」

オフィス内には淫蕩なよがり啼きが響き渡っていた。そこに立ちこめる空気も、女たちの蜜臭と男の精液臭とが入り混じり、めまいがするほどに濃密な淫香となっている。

「人に仇なす鬼よ。おぞましく忌まわしき血を持つ咎人よ」

静香は、両手で杖を構えながら、鬼と化した男を睨みつけた。隊長に対しては冷静に接してきた彼女だが、鬼と相対した今、その瞳には憎しみと嫌悪の情が剥き出しになっている。

「ほほう。女が来たのか」

筋骨隆々たる男は、腰の躍動を全くゆるめないまま、静香の方を見やる。

「なかなかいい女だな」

血走って赤くなった目が、鬼狩巫女の瞳をとらえた。

「んうう……」

とっさに唇は結んだものの、静香は熱い呻きをもらしてしまふ。

これまでは頭痛程度で済んでいたが、視線を合わせたの神通力は強烈だ。しかも女の弱点を衝いてくる。

（身体が……熱い……）

肉感的な肢体は発情の火照りに見舞われていた。乳房は女の喜びに悶え、乳首をびんびんに尖り立たせてしまう。

股間の底でも秘女花が咲きほころび、ふしだらな蜜を滲ませつつあった。

「どうだ？ あそこがたまらないだろ？ 俺のものが欲しいだろ？」

見せつけるようにして男は腰を振るい、半裸のOLを啼き悶えさせる。

「おまえもこの女のように、よがり啼かせてやる。孕ませてやる」

二十五歳という女の盛りを迎えた肉体は、強力な神通力にさらされて、また、濃厚な交わりを見せつけられて、悶々としたうずきを訴えていた。

だが静香は、淫らな誘惑を拒絶する。「私の望みは鬼を狩ることのみ」

鬼へ向けてゆつくりと歩を進める。静香の瞳には、強い決意と鬼への憎悪がみなぎっていた。

「おおっど、そこまで」

全裸の男は、机の上に転がっていたナイフを手取る。女たちを脅すのに使ったのであろうそれを、今まさに犯しているOLの首筋へ突きつけた。

荒々しく肉杭を打ち込みながら。

「ひっ……ひいいいあ……ああ……」

女は、悲鳴ともよがり啼きともつかない声を上げながら、後ろへ突き出した尻肉をひくつかせていた。

「それ以上一歩でも近づいてみる。この女の命はないぞっ」

巫女の神秘的な美貌には、冷ややかな微笑が浮かんでいるばかり。

「鬼に墮ちても、小賢しい策を弄するだけの知恵は残っているようだな」

全く怯む様子を見せずに、もう一歩踏み出した。

「繰り返すが、私の目的は鬼狩だけ。女など、どうなるろうと構わぬ」

冷気すら感じさせる眼差しで射抜き、さらに間合いを詰めた。

あと一歩で杖が届く。

「くそっ」

男は女肉穴から肉柱を引き抜き、一気に距離を詰めてきた。常人では決して出せない速度である。

ざらりと光る刃が巫女の白衣を鮮血に染め上げる……かに思えた。

ナイフが貫いたのは何も無い空間。鬼の踏み込みを上まわる速度で静香は飛び退いていた。男の伸びきった右腕を目がけて杖を振り下ろす。

「ぐあっ」

呻きとともにナイフが落ちる。

巫女が手にしていた杖は、見かけによらず重みがあった。しかも、その腕力たるや女性とは思えないほどの強さ。

鬼の血に目覚めた男は、常人を凌駕する身体能力を得たはずなのに、鬼狩巫女の一打でナイフを取り落としってしまったのだ。

どうして女がこれほどの力と速さを……などと考えている暇はなかった。

雷光のような速さで杖を繰り出され、みぞおちを打ち抜かれる。

「ごおっ！」

前屈みになったところを、すかさず後頭部へと杖が打ち下ろされる。

短く叩いた後、鬼は動かなくなった。「忌まわしき鬼の血。二度と目覚めぬようにしてくれる」

静香は、気絶した鬼を杖で仰向けにする。人差し指を犬歯で噛み、血の滲む指先で鬼の下腹部へ文字を書き込む。鬼封じの呪術文字だ。

梵字にも似たその文字は、鬼の血に反応して激しく明滅する。

「ぐっ、ぐががっ……ぐあああ……」
隆々たる体躯の鬼は、気絶したまま苦悶してのたうちまわる。

やがて、血文字の激しい明滅が終息した。巫女の血で書き込まれた文字は、痣となって下腹部に残っている。

これで鬼封じはひとまず終了。
「あとは警察の仕事だ」

周囲を見まわす。

神通力で魅了されていた女たちは、気を失って倒れていた。しばらく時間がたてば目覚めるだろう。

「犠牲者を出さずに済んだか……」

神秘的な美貌には、これまでになく安堵の表情がよぎった。非情に徹した対応をした静香だが、人質に犠牲が出ればやはり心が痛むのだ。

「それにしても解せないな」

静香は、あらためて男を観察した。
「これほど強力な術を使うとは……」

突然変異的に目覚めた鬼は、身体能力のみが突出していることが多い。神通力に秀でている例は極めてまれだ。

「ん？ これは……？」

脇腹のあたりに不審な痣があった。うつぶせにしてみると、みみず腫れのような痣が背中一面に刻まれている。

「鬼術文字……」

何者かがこの男に鬼術文字を刻み込み、神通力を大幅に強化したらしい。

「いったい誰が……？」

その手がかりを求めて、静香はオフィス内を歩きまわる。倒れたデスクや投げつけられたのであろう椅子が散乱している中、一台の携帯電話を拾った。

どうやら男のものらしい……。

立てこもり事件の三日後。

静香は山奥のとある神社を訪れていた。鬼に目覚めた男の携帯電話を調べたところ、不審な人物からの着信履歴が頻繁にあった。

それがこの神社の宮司なのだ。

ふもとの村から山道を登ること数時間。ようやくにして到着した。

「こんなところにこれほど大きな神社があったとは……」

拝殿の前では、二人の巫女が竹箒で掃除をしていた。ごく当たり前の風景だが、静香は眉をひそめる。

緋袴を穿いた下腹部が、大きくふくらんでいるのだ。二人とも妊娠しているらしい。子を宿した巫女たちは、静香に気づくと一礼した。

「ようこそお参りくださいました。九鬼静香さまでいらっしゃいますね」

「私の名を知っているのですか？」

二人の巫女は微笑している。

「宮司が待つております」

「どうぞ、こちらへ……」

拝殿の中へと案内された。

広い拝殿内では、巫女たちによって神楽が奉納されている。神楽鈴を手にして、恍惚の表情で舞っていた。

「こ、これは……」

眉をひそめるどころか目を見開く。

巫女たちは、白足袋と千早しか身につけていなかった。たった一枚の薄衣だけを裸身に羽織っているため、乳房も股間も透けている。

拝殿の奥では、端正な顔立ちの男が床几にかけている。祭壇を背にして悠然とくつろいでいる様は、自分自身が神であると言わんばかりだ。

彼は一切の衣服を身につけていない。素っ裸である。その肉体は、人間離れした筋肉で覆われていた。

いや、そもそも人間ではない。強烈な鬼気を放っている。

「お待ちしていましたよ」

裸身の男は、大股開きで腰かけたまま、慥慥な口調で挨拶した。

「こんな格好で失礼いたします。神事の最中でした」

男の足元には、巫女装束の女たちがひざまずいている。彼女たちは揃って下腹部がふくらんでおり、妊娠の兆候を示していた。

白衣の胸元から乳房をあらわにして、そそり立つ男性器を挟み込んでいる。乳房で肉柱をこすりしごきつつ、亀頭へ舌を這わせていた。

「これが神事だと？」

静香の声音は冷ややかだ。憎しみの眼差しで男を射抜いている。

「乳の出がよくなることを祈願して、ご神体を崇めているんですよ」

下腹部が大きく膨らんだ巫女たちは、恍惚の顔つきで舌と乳房とを捧げている。先を争うようにして亀頭へむしやぶりつき、舌同士がこすれあうのも構わずに舐めまわしている。

「どうか……産まれてくる子どものために、御柱さまのお力を……」

「あああ……あん……。御柱さま力をお恵みくださいませ……」

陶然とした表情で奉仕にふける様は、男性器そのものをご神体として崇めているかのようだ。

「男性器を崇拝することは、世界的に見ても珍しいことではありません」

五人もの受胎巫女から奉仕されているというのに、男は泰然と構えていた。その男性器は、片手では握りきれないほどの太さを誇っている。ごつごつと血管が浮き出た肉胴は巨木さながら。亀頭は大きく笠を広げており、ひざまずいた巫女たちを睥睨している。

確かに、崇拜の対象となりうるまでに魁偉な逸物だ。

「申し遅れましたが、私は当神社の宮司・西田大祐と申します」

整った顔立ちや丁寧なしゃべり方が、肉体の異常性を際立たせている。

「おまえか？ 先の事件の黒幕は」

「私はただ、同じ血を引く者にお手伝いをして差し上げただけです」

静香の涼やかな目に、より一層の冷気と憎悪がこもった。

「人に仇なす鬼よ。忌まわしき血とともに長き眠りにつくがいい」

杖を構える。

西田も立ち上がった。

「ご高名はかねがね耳にしております。鬼狩巫女・九鬼静香」

いななき返った男性器を隠そうともせず、静香を見据える。

「私もあなたをお待ちしていました」

不敵な笑みを浮かべながら、手振りて巫女たちを下がらせた。

拝殿の内部で静香と男が対峙する。静香は、わずかに腰を落としたその瞬間、目にもとまらぬ速さで踏み込んだ。まっすぐに杖を繰り出す。

男は高々と跳躍して宙返りし、静香の背後に降り立った。振り向きざまに中段蹴りを放つ。飛び退いた静香の緋袴を、西田の足先がかすめた。

「さすがですね。常人にできる身のこなしではありません」

西田の微笑が凄みを帯びる。

「まさに、鬼の血の為せる業ですな」

静香の表情がわずかに強ばった。

「あなたが私に鬼の血を感じ取ったように、私もあなたから鬼の血を感じますよ。それも、かなり濃厚な……」

舌なめずりをする西田。

「黙れっ！」

神秘的な美貌の鬼狩巫女は、怒りを込めて杖を繰り出す。

「おのれの忌まわしき血を償うために、おまえのような輩を狩るのだ」

闇に紛れて鬼を狩る静香だが、その肉体には鬼の血が流れていた。

血に目覚めたのは高校生の頃。沸きたぎる血を持って余して、友人を傷つけたこともある。自分とその血に絶望していた時、ようやく道を見出した。

鬼狩巫女として鬼の血を封印すること。それこそが、忌まわしい血を受けたい自分にできる唯一の贖罪だ。

「私とて、おとなしく狩られるわけにはいきません」

西田も、鋭い蹴りで応戦してくる。「血を残さなければならぬのです。貴種である鬼の血を」

蹴りも突きも、修練で磨かれたものだ。地道な修行で得た技術に、鬼の瞬間発力が加わっているのだ。

「人を孕ませるのもよいですが、鬼の血を引く女を孕ませる方がなおよい」

股間の肉柱をそそり立たせながら、筋肉の塊ともいえる身体を躍動させていた。そこには妖しい美がある。

「鬼の血を持つあなたがいらっしやるのを、楽しみにしていました」

蹴りと杖とが交錯した。

「血が惹かれあうのでしょうか。鬼に目覚めた男女の交わりは、それはそれは極上の快楽ですよ」

戦闘の最中だというのに、西田の男根は隆々とそびえ立っている。鬼の血を引く女との肉交を思い出したのか、たくましい逸物はびくびくと脈動しながら先汁を湧出させていた。

「けがらわしいっ。その野蛮な根棒を叩き折ってくれるっ」

ひととき素早い一撃を、男のみぞおち目がけて繰り出す。

「ぐほああっ」

たくましい巨軀が勢いよく吹っ飛び、祭壇にぶつかった。

「覚悟っ」

杖を逆手に握り、下腹部へ打ち下ろそうとしたその時……

後頭部を衝撃が襲った。

どうやら、背後から殴打されたらしい。いくら西田との戦闘に気を取られていたからといって、そう易々と背後を取られる静香ではない。

（まさか……巫女の中に鬼が……？）

西田の鬼気に紛れて見過ごしてしまつたのかもしれない。おのれの油断を悔やむ間もなく、静香の意識は深い闇へと吸い込まれていった。

どのくらい気を失っていたのだろうか。後頭部にわずかな痛みを覚え、静香は微睡みから覚めた。

ゆつくりまぶたを開けると、淫夢の続きかと思うような光景が繰り広げられている。裸身に千早と白足袋だけを残した巫女たちが、絡みあうようにして互いの女体を愛撫しているのだ。

「んあ……あ……あ……」

「いい……お乳が気持ちいい……」

輪になってむつみあう巫女たちの中心には、人の背丈よりも高い柱が建立されていた。その柱は男の象徴を克明にかたどっており、まがまがしくも神々しい存在感を放っている。

静香はその柱に拘束されていた。左右の手を広げられ、亀頭の傘裏に

ついた金輪へ縛りつけられている。

脚も、肩幅よりも広く割り開かれていた。柱の根元には寧丸を模した鉄塊があり、その金輪にくくられている。

「こんな縄など……」

手首足首を縛りつけているのは、細い注連縄である。鬼の力をもってすれば、容易に断ち切ることができる……はずだった。

「おかし……力が入らない……」

全身の筋肉が言うことを聞いてくれず、注連縄はびくともしない。

「その注連縄は特別製です」

巨柱を背にしてもがく静香の正面では、西田が床几に腰かけていた。

やはり素っ裸で脚を広げており、魁偉な男性器を堂々とさらしている。

「注連縄の効果で、今の静香さんは常人の女性程度の力しかありません」

男の足元には、千早だけを羽織った巫女たちがひざまずいていた。三人がかりで亀頭にむしやぶりつき、野太い

肉胸を乳房で三方からこすり上げている。陶酔の顔つきで男性器を崇拜しながら、悩ましく尻肉をくねらせていた。



「私をどうしようというのだ？」
衣服の乱れがないことに安堵しつつ、凍てつく視線で西田を睨みつける。

「決まっているでしょう」

男は、端正な顔に微笑を浮かべた。

「あなたを孕ませるんですよ」

「何だと……」

「私とあなたの血が交われれば、最強の鬼が生まれるでしょう。世界を手中にできるほどの鬼が……」

静香は身震いする。

(鬼に孕まされるなんて……)

自らの身体に流れる鬼の血を、静香は心底から憎んでいた。子を成すなど考えたこともない。

「もちろん、交わりそのものも極めて魅力的ですけれど」

西田は、猥暴的に奉仕している巫女たちには目もくれず、舐めるような眼差しで静香の女体を觀賞していた。

「まずは、その美しい身体をじっくりと品定めさせてもらいましょか」

白衣の胸元にできた大きなふくらみへ、淫猥な視線が這いずりまわる。

「くっ……」

恥辱にさいなまれるが、静香にはどうすることもできない。

男の言葉を受けて、巨柱の両脇に二人の巫女が寄り添ってきた。左右から白衣の胸元へと手が伸びてきて、襦袢ごと剥きさらされる。

「やめろっ。さわるなっ」

ブラジャーに包まれた豊乳がふるるとこぼれ出た。

「ほほう。見事なものだ」

西田は身を乗り出す。

乳房の肌は、巫女装束の白衣にひけを取らないほど美しい白さをしていた。なめらかな血の通った白である。

さらに、ブラジャーの肩紐を小刀で断ち切られて、カップを取り去られてしまう。手のひらからあふれるほど豊かな乳房が、裾野から頂に至るまで余すことなくあらわにされる。

濃い紅色の乳首は、外気の冷たさにさらされてひくついていてた。ぶっくりとふくらんだ蕾がふるえている姿は、男の淫猥な視線にさらされたことを恥じているかのような顔もある。

「潔癖そうな顔をしているのに、男好きのする素晴らしい身体です」

「余計なお世話だっ」

静香は、わずかに頬を紅潮させながら、氷の眼差しで西田を射抜く。

男たちの視線が自分の胸元へ吸い寄せられるのを、静香は普段からいとわしく思っていた。ましてや、不倶戴天の敵である鬼に乳房を見られるなど、血が逆流しそうなほどの恥辱だ。

「取り澄ました顔もよいが、怒りと恥じらいの表情はもっと美しい」

男の股間で起立している肉柱は、興奮のためか力強く脈動している。

「これからどんな表情を見せてくださるのか、とても楽しみです」

二人の巫女に緋袴をまくり上げられた。さらには、その内にある襦袢をも左右に分け開かれる。

素肌の脚と、白下穿きに包まれた股間があらわにされた。

男根柱にくくりつけられた静香は、まぶたをきつく閉ざして顔を背ける。

「穢れなき巫女にふさわしい白下着ですね。飾り気が乏しくても、静香さんのような方が穿くと艶めかしい」

西田は、隆々たる男根を起立させながら、静香のすぐそばまで来た。

ねっとりとした眼差しで覗き込む。

「虫酸が走るっ」

静香は怒りを込めて吐き捨て、渾身の力で太腿を閉じ合わせようとする。

白下穿きの底部には、船底型のふくらみが浮き出ていた。顕著な盛り上がりを見せるそこには、一本の縦筋がくつきりと刻み込まれている。

「味がよさそうな形でいらっしやる」

西田は秘めやかな盛り上がりには手を差し伸べ、指腹でやさしく撫でまわした。鬼狩巫女の神秘的な美貌が屈辱に歪んでいるのを観察しながら、下穿き越しに縦割れをなぞり上げる。指腹をめぐり込ませて、小刻みに振動させる。

「んうっ、くっ、んくうっ……」

何とかして注連縄を引きちぎろうとして静香は身をもがかせていた。

股間の秘めやかなところから妖しいくすぐったさがこみ上げてきて、怒りと恥辱の炎がかき立てられる。

「けがらわしい手で触るなっ」

西田は指を引っ込めた。鬼狩巫女の剣幕に恐れをなしたからではなく、さらなる品定めをするために。

「美しき鬼狩巫女のおそごがどんな姿なのか……。拝見いたしますよ」

下穿きの腰まわりに指がかけられ、ゆつくりとずり下ろされる。へそ下のきわどい肌があらわになり、やがて太い縮れ毛が姿を現した。

「ほほう。随分と濃い陰毛ですね」

下穿きをずり下ろされるにつれて、黒々とした陰毛の茂りが出てくる。

「この生え具合からすると、あそこはさぞかし成熟しているでしょうね」

股間の性毛についてあれやこれやと品評されているのだ。ことさらにゆつくりと下着を剥き下ろされていることも、恥辱の時間を長引かせていた。

(この屈辱、どうしてくれようっ)

水槍の視線で男を睨みつける。

「おお？ いやいよ、あそこの割れ目が顔を覗かせましたよ」

鬢着とした茂りの中に、女唇の上端が現れる。ふくよかな陰門の割れ目に、細長い陰核包皮が息づいていた。

さらに下着をずり下ろされると、女陰の全貌があらさまになる。大人の女にふさわしく肉厚の秘唇をしているが、その肌は清らかな色をしている。

色素沈着がほとんどなく、気品ある乳白色である。その割れ目からは、紅色をした二枚の花弁がはみ出ている。

「美しい。成熟した女の色香を匂い立たせていながら、巫女としての清らかさを失っていないとは」

賞賛の言葉を贈られたのは、女にとつて最も秘めやかなところ。

人間界に降りてきた
悪魔の娘が見たものは…!!

テウ
テウ

ふん…誰もいないじゃない…

久々の人間狩りだったのに

つまんないな！

!!

…まったくこの奴ら
いつの間になくなって…

ん…?

おいこんなトコに悪魔なんていやがるぞ

ああ…もしかして

おまえらのせいかな？

ここが
こんな有様だったのは…

デーモン・ガール・ハント DAEMON GIRL HUNT

漫画 COMIC とうせん 冬扇

ふんそれがどうした
しかし…これじゃあ
結構稼ぎが減っちゃいますな

まあいいじゃねえか
新しい金ツルが目の前にいるだろ？

こいつは
いい稼ぎになるぞオ

……
あんまり舐めないでよね

人間如き束になっても
悪魔には敵わないんだよ

丁度いい退屈してたところだ!!

力の差思い知らせてあげるよ!!

おお頭ツ!!

うろたえるな
相手は一匹だ
あれ使えば一発で—

遅いッ

ぬ…ッ!!



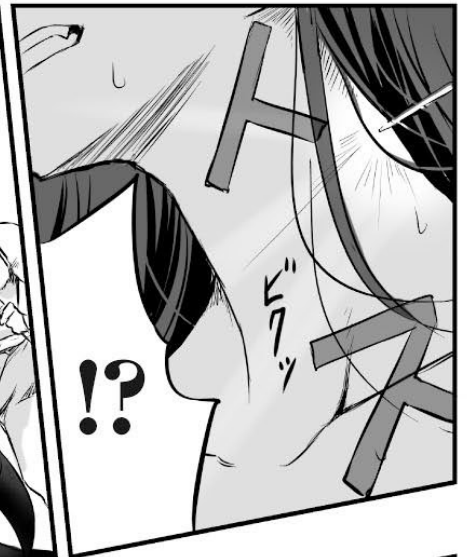
ふゝ危ねエ危ねエ
間一髪だったか？

なッ……!?

くたッ

小頭っ!!
グッ
グッ

あ……ッ!?



!!?

く……あ……なに……
ち力が抜け……



え……

たじっ

特上の聖水を仕込んだ吹き矢だ
お前らにはよく効くだろ？



そんなもったいなえ
殺さねえよ——殺さねえが……

あん？
退治されるとでも思ったか



く……こんなのヒキョウだぞ……

はア？何言ってるんだ
卑怯もへったくれもあるかよ

お……こいつは
思った以上の上物だな……



なっ!?

は……

まあこれからずいっと子を孕んで
もらいまくりましょーってこった



痛ッ

イ
カ
リ

…魔族やら
エルフやらの混ざり物の子は
高く買う物好きが多くてな

特に悪魔なんて
すぐぶつ殺しちゃまう
奴が多いから
希少価値が高エ



おいおい殺されないだけ
有難いと思えよ?

パ
るん



やだよそんなの!!

なんで人間なんかの——



へへ…お頭
早くすませてくたさいよ？

よしそいじゃあ
俺からやらせてもらうぜえ



おい追加だ 聖水

放せっ放せよお!!

ややだあ

チツ
暴れるな!!



あ…



あ…



こんなことして
どうなるかわかって…

おおまえら…

うっ…

随分
おとなしくなったなア？
二回も投与すりや当然か



あつだめっ
大きいの入って...

ひっ!!

あー

ぐちっ
三チ
三チ
三チ

あーあ
あーあ
あーあ

あー

ぐちっ

ぐちっ





ひっ...

ひっ...あ...

びん...びん...

臆内に...
人間の精液があ

こんなに...

こんなにだしたら
妊娠しちゃうよお...

人間の子どもなんて産みたくない...
そ外に...かきださなきゃ...

ポ

グ



おいおい 相手は悪魔だぞ
まあ肉付きはいいがな

へへ 最近は痩せた女ばかり
相手にしてたからな…
久しぶりにいい女にありつけるぜ

いいや…
外にださないと



おい お前ら!!
こいつを休ませんなよ

おっと
いやあ…
外に…



ほんとに妊娠しちゃ…

ひっ…
ややだ…
ままたでて…る…

おいさっさと次終わらせろよ?
後がつかえてるんだ

ふんわりってるよオ

闇の力を纏いし変身ヒロインを苛む孕ませ陵辱！
出産絶頂がもたらす人外の魔悦が理性を打ち砕く！！

ブリリアント・ペンダント

淫獄の受胎告知

小説 NOVEL まいれいじ 舞麗辞
挿絵 ILLUSTRATION せがみだいすけ 瀬上大輔

とある女学園の講堂。普段であれば朝礼が行われるその場所は今、一つの監獄と化していた。

場内に集められた全校生徒およそ五百名がまるで猛禽に狙われる子ウサギのように縮こまり、あるいは怯えきって泣いていた。

少女らの恐怖の対象は、講壇の上に立ち並ぶ人影だ。

「ぐふふ、今日の狩りはなかなかの成果ブヒね」

講壇上で腕組している男が、くぐもった声色でそう笑う。

男——便宜的にそう記したがそれは正確ではない。なぜならそこにいたのは人間ではないからだ。

二本足で直立するシルエットはヒトに酷似していたものの、その顔は豚そのもの。そんな豚が二本足で立ち、紅い軍服にそのでつぶりとした巨体を押し込めていたのだ。

豚人間の他にも擬人化した猿や犬のような化け物が講堂の四方に立つて少女らを監視していた。

「そんなに怯えなくてもいいブヒ。いやむしろお前ら喜ぶべきブヒよ？ なんだってこれからワシと仔作りできるんだからな——ブヒ、ブヒヒヒッ」

豚怪人の漏らした言葉に、会場が一気に恐慌に陥った。仔作り——それが犯され孕まされるという意味であることくらい、女学生らにも理解できた。

「うるさいブヒねえ……おい、この中から一番の上玉を連れてくるブヒ」

「へへ、お任せを」

豚男の命令に、黒い体毛を持つ巨大な猿のような化け物が講壇から降りて女生徒の群れへと飛び込んだ。

「ギガント將軍、とびきりの上玉を見つけてきましたぜ」

やがて乙女の群れから意気揚々と戻ってきた化け猿が、一人の女生徒を壇上へと引つ張り上げる。

他の生徒と同じ紺のブレザーにチェック柄のミニスカート。身長は高く170センチほど。腰の位置も高く、ほっそりとした足元は黒タイトのおかげでよりその脚線美が強調されていた。

胸はそれほどないものの、それでもリボンのあしらわれた胸元は自己主張するようにクツと前に迫り出して女性的なラインを浮かび上がらせている。

黒く艶やかな髪はポニーテールにしており、少女の小顔を強調していた。瞳は軽くつり目気味、小鼻と薄い唇も相まって子猫を思わせる顔立ちだ。

体つきと容姿といい、猿の言葉どおりまさに「とびきりの上玉」だ。

——が、そんな獲物を目にした瞬間、豚將軍は表情を凍りつかせた。

「手を離せブヒ!! そいつは——」

慌てふためき吠えるギガント。彼は目の前の少女に見覚えがあったのだ。しかし化け猿はその意味を解せず、

「こいつ? この小娘がどうか——」

ドオオウツツ!!

その言葉を言い終わる前に、化け猿は消えた。同時に講堂最後方で響く爆

音。皆がそちらへと視線を向ければ、今ここにいたはずの化け猿が壁に半ばまでめり込んでいた。

「いつまでもヒトを小汚い手で触っているからよ」

そう言ってハンカチで掌を拭うのは、壇上に上げられたつり目の少女だ。こんな修羅場に居合わせているのに、先

ほどから恐ろしいほど平然としている。

「お、おまえ……やっぱり……」

豚怪人が二、三歩後ずさる。それを見た少女がフツ、と小さく微笑した。

同時にバツとポニーテールの髪留めを解く。ふわりと広がる黒色の髪。甘酸っぱい思春期の匂いを振りまきながら、少女は手にした髪留めの穴を覗き込

込むように右目へと睨した。

「反・転!!」

天井に突き刺さる鋭い叫び、同時に。ブワツツ!!

少女の鬢した髪留めを中心に、鋭利な風が旋風を起こした。風は水に溶かした黒汁のような漆黒の霧へと変貌し、

瞬く間に少女を包む。

巨大な繭のような闇。霧はやがて暗れ少女は再び姿を見せたが、その外見は一変していた。

鋭い顔立ちはそのままだが、先ほど髪飾りを鬚した方の瞳はルビーのように紅い輝きを孕んでいる。

その肢体は黒のボディスーツに包み込まれ、胸元や股間、肘には左右アシ

ンメトリーのプロテクター。手の甲ではエメラルドグリーンに光る宝玉が呼

吸するようにゆつくりと点滅していた。

「私は闇を狩る闇、陽の光より生まれし聖なる影——夜の観察者、プリリアント・シャドウ。ギガント將軍、お久しぶりね」

姿を変えた黒髪的女生徒はそう名乗るや、オッドアイの瞳でキツと豚怪人

たちを睨みつける。

シャドウの言葉どおり、二人は初対面ではなかった。既に何度となく、ギ

ガントは目の前の少女にこの人間界での、狩りを邪魔され続けていたのだ。

「くそっ……やはり貴様か! またワシの邪魔をしに来たブヒかっ……くっ、お前らやつてしまえ!!」

ギガントの号令に周囲の怪異が一斉に女狩人へと飛びかかる。しかし少女は動じない。微動だにしないまま鋭い

視線で迫る敵を睨み続けるばかりだ。

怪物の爪が今まさにその柔肌を引き裂こうかというとき、ようやく少女は

その手をスツと水平に掲げた。

同時に手甲の宝玉に浮かび上がる五芒星。それはプロペラのように回転を

始め、やがて火を熾すように闇色の光を産み落とす。

「闇は闇に——還れッ!!」

ビシュンツツツ!!

鋭い叫びをあげる少女。同時に闇が指先へと収束し一直線に大気を穿つ。

矢のように放たれる黒い光。それは迫り来る魔物をいともたやすく貫いた。撃たれた怪異は日の光の前の影絵みたいにその場で溶けて四散する。

「闇よ招け夜の静寂——鳥よ!!」

「バツ!! 水平に翳す両腕の先から漆黒の閃光が伸びた。」

「ぐごあああつ!!」

「ぶごおあつ、バカナ——ツツ!!」

五指から放たれるそれはまさに巨大な鳥が羽ばたくかのよう。闇の翼は不規則に舞い踊って空を切り裂き、次々と魔物を切り裂いては塵へと還す。

瞬く間に散ってゆく闇の住人たち。それを見ていた豚將軍の顔にみるみる

脂汗が滲み出す。

「ブヒッ、相変わらず強いっ……ここはいつたん退却して……」

「何逃げようとしているの」

「ぶっひいっ!!」

蹴散らされる部下を尻目に一人逃げを打とうとしたギガントが震え上がる。その行く手には既に他の魔物を殲滅した女狩人が、すつくと立ちほだかっていたのだ。

「今まで何度も取り逃がしたけど——今日が最後よ」

ギユウウツツ——そう呟く少女の

五芒星がまた回転を始める。その甲高い音に豚魔族はいよいよ震え上がった。

「まっ、待つブヒッ! お前ワシらのアジトを探してるんだろ? 教えるっ、だからワシだけは助けてブヒッ!!」

巨体を折ってペコペコと土下座までして、豚將軍は黒の少女に媚を売る

「自分が助かりたいばかりに仲間を売

るの? 本当にサイテーね」

あまりの低俗ぶりに、心底軽蔑する

ようにシャドウは眉をひそめる。

「——まあいいわ。その取引、応じてあげる。万一騙したら——」

言って少女が手甲を翳す。そこから溢れ出る旋回音に豚はもう汗だくだ。

「騙さないっ、騙さないブヒよっ!!」

今すぐ案内させてもらおうブヒッ!!」

ブルブルブルと必死で首を横に振る化け物を尻目に、

(ま、こっちはアジトまで案内させたら、お前も狩ってやるつもりけどね)

オッドアイの女狩人はしかし、心の

内でそう呟くのだった。

※

魔族が人間界に越境を始めたのは、

今から十一年前のことだ。

天地創造の昔より人間界と表裏一体

となつて存在する魔界。そこにおける

勢力争いに敗れた彼らは異界である人間界に越境し、逆襲に向けて力の増強

を図らんとしたのである。

彼ら魔族には牡しかない。そのため人間界の女、それも若くて健康的な

少女らを狩り集めては犯し、繁殖を繰り返しているのだ。

シャドウはそんな彼ら越境者狩るべく魔界より遣わされた狩人だった。

その見た目どおり彼女自身もまた年若い少女だったが、若い娘を狙う魔族を

誘い込むにはむしろ適任だ。それに若いながらその実力は、魔界を統べる女

王からさえ一目置かれる天才でもある。

そんな天才狩人が捕虜豚・ギガント

に案内され辿り着いたのは人里離れた

山の中にある穴倉だった。

「随分都会から離れたわね——」

講堂での騒ぎから三時間弱、今頃は

女学園も元の平静を取り戻している頃

だろうか。シャドウの持つ特殊能力、精

神擬態は見知らぬ人々の群にまると

で最初からそこにいたかのように溶け

込む能力だったが、同時にそこから姿

を消すと彼女がいた間の記憶が人々の

中からすつぽりと抜け落ちるのだ。だ

から魔物に襲われたことも、そこを彼

女に助けられたことも。あの場に居合

わせた女生徒たちは誰一人として記憶

することはないだろう。

「ほれっ、ここ……ここが入り口ブヒ」

汗だくのギガントがそう叫びたのは

穴倉の最奥。彼が指差す地面には幾何

学模様の魔法陣が描かれていた。

「なるほど、魔法陣をゲートに使うこ

とで人間界の生き物は出入りできない

仕組みか。でも私には関係ないわ——

行くわよ」

転送陣の上に立ったシャドウはトン

トントン、と三度踵で円陣を蹴る。

ゴウツ!!

円陣がにわかに薄紫の光を放ち、そ

の中に立つ二人を包み込む。

一瞬貧血を起こしたような気の遠く

なる感覚の後、目の前の世界は一変し

た。シャドウの視界に広がったのは百

匹は優に超える魔物の群れだ。

「私は闇を狩る闇、ブリリアント・シ

ャドウ。この世界に在らざる者たちよ、

覚悟なさい——」

怪異の群れにも怯まぬ闇の狩人は

朗々とした声で名乗りを上げる。その

右目が赤光を孕み、怪異を見据えた。

「闇を狩る闇——狩人かっ!!」

「げえっ狩人!! 狩人がなんでこんな

とこにいいっ!!」

対する魔物どもは突然の侵入者に激

しく狼狽し、沸騰した熱湯のようにぎ

わめいている。

「雑魚とはいえ数は多いわね——よし、

一気にカタをつけてあげる」

シャドウの赤目が一際力強く瞬いた。

目の前でクロスさせるように翳される

両腕。手甲の宝玉がけたたましく唸り

をあげた。回転を始めた五芒星が闇を

討つ闇を生む。

「闇より来たりて、闇に還れっ!!」

ブワアツ!!

叫びと共に手甲で巨大な闇がどぐろ

を巻いた。闇はまるでブラックホール

のように渦を巻きつつ膨張してゆく。

同時に辺り一面の魔族どもは磁石に引

かれる砂鉄のように四方から闇の旋回

へと引き寄せられた。

「グアツ!!」

「からだがあああつ!!」

人外の魔性らは口々に叫びつつどう

にか抗おうとするも、蟻地獄に落ちた

蟻のようにもがきあがきながら最後

は闇の渦へと飲まれてゆく。

そうして狩りはあつげなく終わりを

迎えるかに見えた——が、しかし。

「シャドウ、止めるブヒ!!」

水を差したのは身の程をわきまえない

捕虜豚、ギガントの叫びだった。無論聞く耳など持つ道理もない。シャドウは更に宝玉へと魔力を集中させ一気に魔族を叩こうとする、が、シユウウンツツ……。

どうしたのか。宝玉はそれまでの勢いが嘘のように孕んだ闇を霧散させた。緑の輝きはくすみ、終いには鈍色へと落ち込んで沈黙してしまふ。

「なっ……どうということ?！」

状況を飲めないオッドアイの狩人が吠える。答えたのは背後の魔豚だ。

「グフフ、どうにか解析できたか……もう少しで全滅するところブヒよ」

豚將軍は下品に鼻を鳴らしながら、のしのしと少女狩人へ近づいてくる。

「ギガント、お前……何をッ?！」

「お前も魔界の住人ならば、この人間界に来るために転送陣を使用したらう? 我々の住む魔界は精神の世界、対して人間界は物質の世界。基準を異にする二つの世界を行き来するには転送の際に魂を変換させる必要がある——ここまでではいいブヒか?」

「……つまらない講義を受けに来たんじゃないわよ?」

「そう言うなブヒ：先ほどの転送陣でお前が人間界に再構成されたときの交換コードを読み取らせてもらったブヒ。これがどういいう意味かわかるブヒ?」

「あいにく興味ないわ——そのお喋りな口を塞がせること以外にはッ!!」

「タンッ!」

ドーム状の地底窟、その上空まで跳ね上がり天井を一蹴り。一転して燕のような鋭さでギガントを強襲する。それでも魔豚は余裕の表情だ。「わかってないブヒねえ……この世界で我々が転送コードを知られると言うのは——」

ギガントがその掌をスツと前に翳す。まるで迫り来る狩人を制するような構え。するとそれだけで、

ピクンツツ!!

今まさにギガントの顔面に蹴りを見舞おうとしたシャドウの動きが止まった。まるで生きたまま蝶にされた蝶のように、その場から押すことも引くこともできなくなつてしまった。

「な……に……?!!」

（こんな……バカな!!）

自らの身体を襲う変異にシャドウが驚愕の呻きを漏らす。

「見てのとおり。コードがわかれば人間界でのお前を好きなように再構成可能ということブヒ」

言いながらギガントが翳した手を下ろす。同時に中空で蝶にされていたシャドウの身体も重力に引かれてどざりとその場に崩れ落ちた。

「ちなみに今のお前はワシの言葉どおりになるようコードを改竄してある……ほら、その壁に手を着いてその可愛いおケツをこつちに向けるブヒ」

「誰がそんなマネ……なっ、か、身体が……勝手にイツツ!!」

ギガントの下劣な命令をはねのけよ

うとしたシャドウだが、その身体はまるで他人のモノみたいに勝手に動き出し近場の壁へと手をかけた。そして長身をくの字に曲げるようにして腰を折り、醜態な豚人間に向けて突き出された姫臂はただでさえタイトなボディスーツを突き破らんばかりにギユツと張り詰め、細身のわりに意外と肉付きのよい逆ハート型の丸みを強調していた。

「ぶぎっぎっ、いいザマブヒツ……そのまま自分でケツを開いてみせろ」

「くそっ、ふざけるなっこんなことして後でどうなるか……ううっもうやめろお……!!」

四肢を強張らせ全身に力をみなぎらせて、どうにか呪縛を解き放とうとする。しかしどんなに頑張ってもその肢体を揺さぶらせるのが関の山。豚將軍の命令を根本から覆すことはできず、突き上げた尻をふりふりと左右に振つて男を誘っているようなはしたないダンスを披露したに過ぎなかった。

抵抗虚しく壁に着いていた片手は尻房へと伸ばされ、指先を形よい若桃の溝に差し込んでそのままむにゅっ、と尻たぶを大きく割り広げてしまふ。

それ自体法衣であるボディスーツの下には何も身につけていない。おかげで股座を駆けるクレヴァスの形状までもが外からくつきりと透けて見えた。

「ぐふっ、かゝわめいのおケツブヒ、早速種付けしてやるブヒからね」

ゴクリと生唾を飲んだ豚將軍が、期待に上ずった声でそう囁く。

「たねつけッ!! くっやめるこの馬鹿っ、それ以上近づいたら殺すっ、絶対殺してやるうっッ!!」

わかつていたことはいえ、魔族の言葉に今更ながら貞操の危機を思い知らされたシャドウは半狂乱になって喚き散らす。

闇の狩人を務める者は大抵一度や二度は魔族に捕らわれその毒牙にかかるもの。だから捕らわれてなお生還するのが狩人の一つの資質とさえ言える。しかしシャドウは狩人としてあまりに優秀すぎた。故に今まで捕らわれたことはなく、従つて陵辱を受けたこともない。彼女自身、敗北する自分など思い描いたこともなかった。

だから今、シャドウはほとんどパニック状態に陥つていた。

「このっよせ腐れ豚っ! それ以上近づくな、私まで腐るっッ!!」

壊れたラジオのように吠え続ける女狩人を前に、豚將軍は悠々と軍服のズボンを下ろし、下半身を露出させた。

「ひっいいいっ……!!」

差し出されたペニスを前に、シャドウが少女らしい悲鳴をあげる。

それはドリルのように螺旋を描く恐ろしく奇怪な一物だった。長さはシャドウの中指程度、しかし胴回りは五指を束ねたより断然太い。螺旋肉はビクビクとしゃくりあげ、先端から滴る先走りの濁り汁が狩人の恐怖を煽つた。

「邪魔なスーツピヒね……」
言いながらギガントはボディスーツの股座に両手をかけると、そのまま力任せに左右へと引き裂いた。

「ビィー——ッッ!!」

限界まで引き伸ばされた股布が断末魔の悲鳴をあげて引き裂かれ、ちょうど陰裂だけを晒すように丸い穴を開けられる。身体中を覆いながら肝心の部分を丸出しにした破廉恥な格好。秘所を強調するようなその姿はある意味何も身につけていないより卑猥だ。

腰を突き出すポーズのせいで秘裂はくばつと綻んで、脛口はもちろん針穴みたいな尿道口までもが見て取れた。

「案外可愛らしいマンコピヒね。毛もちよつとしか生えてないピヒか？」

曝け出された幼貝を前に魔豚が笑う。その言葉どおり少女狩人の陰毛は産毛のような幼い叢で、護るべき秘唇を卑猥な目からさえ護れていない。痴豚の視線が牝華の中心へと矢のように突き刺さるのがイヤというほど感じられた。「黙れこの色情豚ッ! 必ずその醜悪な面を潰して——ひいうんっつ!!」

今まで誰にも見られたことのない秘所、それをいやらしい化け物に笑いのにされている——血液が沸騰しそうほどの激しい恥辱をやり過ごそうと吠えたシャドウだったが、その雄叫びは途中で牝鳴へと取って代わられた。

剥き身となった姫貝、その幼い入り口へと灼熱の塊が押しつけられたのだ。粘膜が火傷しそうなほど熱い。振り

向くまでもなく、それはギガントの螺旋を描いた肉槍の矛先だ。

「やめつるおっ!! っつ、いいかそれ以上してみる!! お前なんか骨も残らないくらい粉微塵に八つ割いて……ひやぐううう——ッッ!!」

「ずぶずぶずぶううう——っつ!!」

最後のあがきとばかりに脅しをかけるシャドウ。しかし魔豚は構わず腰を迫り出し、一気に女陰を刺し貫いた。

ズシンッ!! 身体を左右に引き裂かれるような激痛が股座から天骨までを霹靂のように突き抜ける。

「おや……お前、もしかしてヴァージンだったピヒ? グヒツそれじゃワシがシャドウちゃんの初めての相手ピヒか、なんだか照れるピヒ」

結合部から滲む破瓜の紅色にシャドウが生娘だったと知って、豚將軍は嬉しそうに鼻を鳴らす。

「くっううう……うるさいこの腐れ豚っ……ひぐつ、動くなあっ!!」

痛みを堪え気丈に振る舞おうとするシャドウだが、ギガントが抽送を始めるや情けない悲鳴をあげてしまう。

股間が火を噴くように熱い。深く突かれるたびに意識が飛びそうになるほどの激痛に視界が霞んだ。話には聞いていた破瓜の痛みだが、それは少女の想像を遥かに絶する苦悶だった。

「ぐひひっ……さすが処女、温くっつい縮まり具合ピヒ」

ずぶずぶずぶううううっつ!! 身悶えるシャドウに構わず、豚將軍

は牝腰を捕まえて好き放題に抜き差しを始めた。ドリル状のペニス乾いた肉洞を出入りするたび腔壁がえぐられ、腔内に針山を飲まれたようにズキン

ッ、と鋭い痛みが下腹部で弾けた。「ひいっぐつ、ひいぎううううっつ……ふあつう、もうっひやめろおっ!!」

身体を好き勝手にできるのだから、その気になれば快楽に乱れさせもできるはず。そうしないのはこれまで辛酸を舐めさせられてきた豚將軍の、シャドウに対する悪意に違いない。

しばらくすると結合部からぐちゃつ、ぐちゃつとぬかるんだ水音が響き始めたが、それは傷つけられた粘膜が防衛本能で愛液を滲ませたもの。刺し貫かれる肉壺は依然抜き差しのたびに加速する激痛に苛まれた。

「ぐへへ、濡れてきたピヒっシャドウちゃん実は実はDMピヒかねエ?」

潤滑液を得た魔豚は調子付き、勝手なことをほざきながらぐりぐりと処女穴をこじ開ける。

ぐちゅ、ぐちゅ、じゅぶぬちゅっ!! 次第にギガントの腰使いが早まる。抜き差しの間隔が狭まり、摩擦される粘膜がギチギチと悲鳴をあげた。

「ぐひっ、もうでてるっ……さあ、一発で孕ませてやるピヒ」

牝尻にガンガンと太鼓腹を打ちつけながら、豚將軍が悪意たつぷりにそう宣言する。

「うっぐううっ……誰が貴様なんかの……仔などおっ……!!」

痛みに悶えながら、それでもどうか気丈に振る舞い続けるシャドウ。今日は幸い安全日、万一腔内射精を受けても受精の確率は低いはずだ。

操を蹂躪されたのは堪えがたい恥辱だった。遅かれ早かれいつかは訪れる宿命だったと諦めるしかない。

「だから今は一刻も早くこの陵辱を終わらせ、こいつの隙を——」

「ほらシャドウ、何をしている? ワシが射精してやると言っているんだ、さっさと排卵しろピヒ!!」

突然ギガントが意味不明な言葉と共に姫臀を打つ。尻肌に焼くような痛み、変化はその直後に起きた。胎内の奥の方、蹂躪を受ける腔道の先に眠る子宮の辺りがにわかには疼き始めたのだ。まるで綿棒で擦られているような疼痛が灯り、チリチリと燃る。

「何これ……ギガントお前、何を!!」

自らの身体に起きた妖しい変化に不吉な何かを感じ取り、狩人は陵辱者を振り返る。そこには口端から汚らしくよだれを垂らした豚面が満面のニヤケ顔で、おののくシャドウを待っていた。

「お前の身体はワシの言うとおりになると教えたろ? だから間違いないく妊娠できるよう排卵させてやったピヒ。卵管が卵子を送りだしているのがわかるピヒか? ほおら、子宮も子種を欲しがってワシの好物に吸いついてくるピヒ」



刺激が欲しい



浮気調査じゃなく妊婦調査!?
しかも女子校の新聞部!?



推理探偵 新聞部

Inference detective newspaper club

漫画 / かのう 嘉納あいら
COMIC

なぞのメイド



書記丸山



新聞部ですから



立ち寄り所



もう…諦めろ

ああ

あつう

いつ…いやあ
妖魔なんか
屈しない…もん

あああ

あ

往生際が悪いな
6時間も犯し
続けているのにな

学園退魔師大ピンチ！
——つてかもうヤラれてますが……

退魔師
みじうあかね
御堂茜よ

それに……

御堂茜企画はウェブでも進行中！
詳しくはKTCメルマガを見てね！！

☆学園退魔師☆

御堂茜

放課後異形出産

漫画 COMIC 天道まさえ

くうい

オレの子を孕んで
いるのだぞ

くっく

お前達と違って
すぐ出産出来るぞ

出産!?

そんな...うそよ
いくら妖魔といったって...
はったりよ

あっ

くくくく
その証拠に

クッ
クッ

クッ
クッ

クッ
クッ

えっいやあ

乳首じんじん
するん

んい

あっ

うそお…私…
ミルク出てるう

んい

んい

んい

んい

んい

あっ

んい

んい

んい

んい

気の早いことだ子が
母乳に反応してるわ

ああ…まさか…
…そんなあ…



妖魔の子が

私の中で…お腹の中で動いている…

…私の…初めての…

ああ

初めての…

あーあーあー

子供が妖魔なんて
いやあああああ

あ

いあ

ああ

うあ

ああ

ズ
キ
ン

コ
ロ
コ
ロ

コ
ロ
コ
ロ

コ
ロ
コ
ロ

コ
ロ
コ
ロ

コ
ロ
コ
ロ

コ
ロ
コ
ロ



SLAVE DOLL

スレイブドール
紅眼の女特務捜査官

Mission

2

幸福

うつせみ

空蝉

小説
NOVEL

挿絵
ILLUSTRATION

ぼっしい

パートナーの行方を追う京子……
しかしその前に肉拷問の
罠が待ち受ける！

登場人物紹介



黒崎京子

国家警察特務機関所属捜査官。肉体を義体化した“ドール”として反政府組織への秘密工作を任務としている。

ジャン

反政府組織「イーグス」への単独潜入捜査中に行方不明となった、京子の同僚のエージェント。彼女とは親密な関係にあったと推測される。

前号までのあらすじ

西暦 2150 年。世界大戦の折に確立された義体化技術により、めざましい発展を遂げた小国マルタでは、一党独裁の体制と反政府組織との戦火が燃っていた。義体化により肉体を強化した特務班の“ドール”黒崎京子は、反政府組織「イーグス」との戦いに身を投じていたが、その最中、相棒のジャンが任務中に失踪したことを知らされる。彼女はジャンと繋がりがあった情報屋と接触、自分の身体を餌に、ジャンの行方を探ろうとする。京子の引き締まった肢体にペニスを踏みこじられ、搾り上げられる快感に情報を漏らす男。彼女はその言葉をヒントにジャンの足取りを追うが…

「よろしくお嬢さん」
 その男の第一印象は決して芳しくなかったのを、今でもよく覚えている。

ジャンと名乗った長身の男は初対面にもかかわらず気安く肩を抱いてきて、にこやかな顔で、

「今日からはパートナーだ。よろしくな」
 そう語り、また白い歯を見せて笑った。

「……そう」

「なあ、京ちゃんって呼んでいい？」

人がそっけなく接しているのに、この男は神経が通っていないのだろうか？

「……遠慮してもらえろと嬉しいわ」

内心の苛立ちを抑えきれず、それでも極力加減して肩に回っていた男の手をはたいて外し、背を向け言い放つ。

「……へえ。そういう顔もできるんじやん」

わざわざ前に回り込んで長身をかがめ、下から顔を覗き込み、屈託のない顔で見つめてくる。

(……うっとうしい)

「怒った顔でもさ。そっけなくしてるよりかはずつと可愛いぜ、京ちゃん」

しかもおしやべりでひどくこと多い。特務の仕事に

はおおよそ向かないのではないだろうか。こんな奴が相棒では、仕事の邪魔をされるだけなのでは？

——けれど。

「とりあえず呼び名の改善を要求するわ」

再度彼の悪びれぬ面構えを見た瞬間から、不思議と、嫌悪感は薄らいでいた。

それから、ずっと。相棒関係の及ばない私生活にまで顔を覗かせてくるようになった彼のことを厭えないままずるずると。

「俺たちさ、いいコンビだよな？」

「どうかしらね」

「このまま生涯のパートナーになってもうまくやってけんじやないかなーなんて思ったりなんかして」

「……馬鹿」

いつしか分け隔てなく接してくれる彼の押し強さに引きずられるようにして男女の関係となり、心を許せるまでになった。

もうじき、二年が経とうとしている——。

「夢……」

今朝もまた彼の夢を見、頬を伝う涙の温みで目を覚まさせられた。ジャンの消息が途絶えてから、今日でちょうど二週間。彼の消息不明を知らされたあの日からずっと、同じような朝を迎えている。

結局情報屋から得たものはまるで役に立たず、来る日も来る日も街頭はおろか裏路地まで捜し歩いた結果、小さな希望を、京子はつかんでいた。

昨夜、夜道を歩いている時に出会った一人の男。大柄な、身の丈二メートルは優に超す巨漢はすれ違いきざま、

「探している男に会いたけりや明日の夜に、ここへ来い。もちろん一人でだ」

肩が触れるか触れないかの距離でぼそりと吐き捨て、ごつくて巨大な手に不釣り合いな小さな紙のメモを残し、雑踏に消えた。

（畏か、それとも）

相手が組織の、十中八九イーグスの手の者であるとの思いはあるが、確証は何もない。平素であれば、まず間違いなく乗らぬ誘いだっただけ。

けれどもジャンの身の安否がかかっている。そのことが気持ちを逸らせる。自らが先日殺した大量の組織員。その代償にと、命を奪われてはいまいか。命こそ無事であっても、生活に支障あるレベルの負傷をしている可能性は否定できない。

イーグス側からいまだ何の要求もなく、ジャンが人質の用を成していないことが、なおさら「死」という言葉を強く連想させる。

もちろん、ただ心配だからといって突っ込むほど馬鹿ではないつもりだ。対峙してやるだけの理由と、勝算はある。

どの道、他に有力な情報もないのだ。彼の命の期限が刻々と迫る中、残された選択肢は目の前にぶら下げられた餌ただひとつだった。

——そして、夜。女捜査官は特務のスーツに身を包み、メモで指定された地に降り立っていた。

数年前に操業を停止して以来廃屋と化している工場跡地。引き出したデータ上の情報にイーグスとの関連をにおわせる記述はなく、不必要と判断して即座に記憶下から抹消する。

「待たせ、この糞ドール」

昨日と同じズボン穿いた巨漢は、上半身裸の半裸状態で、廃工場の入り口に仁王立ちとなり待ち構えていた。

「会うなりご挨拶だな」

侮蔑の言葉にも、憎悪にまみれた視線にも慣れている。それらには少しも興味を惹かれずに、ただ「人形の紅眼」は男の右半身へと注がれる。

「……義体」

露わとなった右腕と、脇腹。そしておそらくはズボンに隠れた右脚も。前時代の技術らしくメタリックな外見が残っており一目瞭然だ。

「わざと見せびらかしてやってんだよオ」

「義体化技術を忌み嫌う組織の一員らしからぬ発言だな。脳がウィルスにでもやられてるのか？」

挑発には乗ってこずに、男はニイと口端を歪め、銀色に鈍く輝く右拳を見せびらかし続ける。

「少々、明け透けすぎたか。もう少しわかりやすいタイプだと思っただけれど」

予想したほどには単細胞でないようだ。

「組織も一枚岩じゃねえってこった。俺らみたく、力には力に対抗すべきと考える連中もいる」

「――前言撤回」

おしゃべりが過ぎる。やはり賢いほうではない。ただ自己顕示欲が強すぎるだけのタイプであると判断し、急加速。

「ふ……ッ！」

瞬時に相手の懐へ潜り、心臓めがけ蹴りを放つ。

「ぬぐッ!? おうあああッ！」

虚を突かれた男はそれでも右手をかざし、心臓を守ることに成功した。

（この感触……液状金属か!）

大穴を空けられながら蹴りを防いだ男の右手がドロリ。溶け出して、見る間に変貌を遂げていく。

自在に形状を変えられる液状金属組成体。

「つくづく見せたがり、ってことね」

人と寸分違わぬ外見にいくらでも擬態できたのを、わざわざ機械的な外見を残し、誇示していたのだ。

「せつかく手に入れた力だ。有効に使わなきゃもつたないだろ? なあッ!!」

右拳を巨大なハンマーへと変化させた男が下品な笑みを浮かべ、迫ってくる。

「ッ……!!」

頭よりも太い塊を、交差した両手で受け止めた。振動で視線がぶれたものの、痛みは――ない。

「うぬぼれるなッ」

「なんだ、と……ッギイツああアアアアアッ」

ぶちんツ――つかみもせず。ひねりもせず。ただ真下からはね上げただけで、男の腕は藻屑のようにちぎれて飛ぶ。パワー、判断。力量差は、歴然。

即座に欠損部位の液状金属が盛り上がり、紅い瞳が見つめる目前で再生を始める。だが要したエネルギーは甚大だったのか、男はぜいぜいと、早くも肩を揺すり荒い息を吐き始めていた。

「人質についての情報をよこせ。そうすれば少なくとも自信だけは持って逝ける」

「ぬ、かせつ……この糞アマアッ」

すでにその自信すらも喪失しかかっているやもしれぬ男は巨体をかがめ、あつさりと殿下の宝刀を抜き放つ。

「あの男……ジャンつつつたか。あいつの行方が知りたきや、おとなしくしろ」

わざと派手に街中で聞き込みを行い、テロリストとの出会いを演出し。わざと加減した一撃で追い込まれ、発言まで誘導されたとも知らずに、男は汗ばんだ顔に勝ち誇った笑みを張りつけて勝ち誇る。

（危険を伴う賭けだったが……当たりだったな）

せつかく、危機に晒されても問題のない頑丈な身体を得ているのだ。目前の男の言葉を借りるなら、有効活用しなければ意味がない。

問題は、唯一の予想外――相手となるテロリストが義体であるという事態だったが――。

「最初からそう言えはいい」

どの道、回り始めた函車を今さら巻き戻すわけにもいかない。さきほどの攻防から、巨漢の攻撃では完全義体である身を破壊も殺害もできないとの確信

は得ている。仮に先の一撃が五割程度の威力であつたとしても、だ。

相手の留飲が下がる程度に殴られたあとは、イージスの拠点なりにでも連行されれば恩の字。最悪、ジャンが囚われていないことだけでもわかればいい。そのためなら。

「よくもやってくれたな。へへ、たっぷりお返ししてやる」

目前に迫る下品な男に殴られることも、罵られることすらも厭わない。

無防備となった相手の思惑になど気づくよしもなく。見せつけるようにかざされた男の右腕が、今度

はドリル状に練り込まれていく。

「おらっ!!」

「ぐっ……」

硬く尖った塊で横殴りに頬をぶたれた。目眩と、苦い鉄の味を噛み締めながら、再度目前に迫つた男の顔を見定める。

「武器を出しな。銃と、他にあるならそいつもだ」

「何も持ってきてないわ」

捕まるつもりで来たのだから、相手に奪われる可能性のある武器など携帯しているわけがない。

だが事情を知らぬ巨漢は、いぶかしげな目をすぐに好色な色に変えて下卑た笑みを差し浮かべた。

「なら、身体検査だ」

（つくづくわかりやすい男）

抵抗する様子がないと知って、無造作に伸ばした手で両胸をわしづかみにされる。野卑な見かけ同様の、乱暴な手つきに、丸みを帯びたシルエットが無残に歪む。スリッ越しに感じる手のひらの熱気がまるで肌に染み入ってくるようで、少しばかり心地悪い。

「義体のくせにはかであつてえ乳ぶら下げやがって。官僚相手の娼婦でも兼ねてんのかよ」

己の腕を吹き飛ばしたモノと同じ肉体でありなが

ら、指先が沈むほど柔らかく、少し力を込めればちぎれそうなほどに突出した肉のマリ。それを蹂躪する悦びが、男の嗜虐を煽っているらしかった。

「さあ、どうかしらね」

乳肌をこねくりながら、安い挑発をくれる男の顔をわざと正面から見返して。意味ありげに微笑んでやる。それが気に食わなかったか、男の手が特殊スーツの下腹部を駆け下りて股の間へと伸び。

ぎゅむうっ。

「ん……っ」

茂みの密生する付近、柔肉を引きちぎらるばかりにつねられて、さすがに眉をひそめさせられる。

「機械のくせに生意気なんだよ……」

「その機械を宿した腕を自慢げに見せていたのはどこの誰だ」

売り言葉に買い言葉。自己矛盾を抱えた目の男に対して、つい言葉に刺を織り交ぜてしまう。

おそらく自己の顕示欲の捌け口として身体に機械を混ぜ、一方で完全義体を蔑む男。

まるで、完全義体化に踏みきれぬ己をごまかすかのように。吠え盛るその姿は理想ばかりを口にする集団のイメージとの乖離著しく、単に力を見せびらかすためだけにテロリスト集団に属しているのではないかという疑念がぬぐえなかった。

適当に飄られて連中の拠点にまで連れ込まれるつもりだったが、何より、嫌いなタイプだ。どうにも我慢できそうにない。

ひとりごちた紅い瞳が見つめた先で。武器も探り出せず、女の快感も引き出せずに苛立った獣が、丸太のような剛腕を横になぐ。

「ぐっ……！」

あえて避けずに一撃を脇に食らい、威力を殺す目的も兼ねて派手に身をねじりながら背後へと自ら倒れ込む。

「なんだその目はあつ！」

背中が地に着いた途端。鉤爪状に変化した液状金属の右脚で蹴り飛ばされ、軽く半回転。うつ伏せに寝転がった無防備な背中を、続けざまに何度も踏みつけられた。

「……は、うっ……これで、満足？」

背骨が軋む嫌な音を聞いたが、まだ。幸か不幸か頑丈な肉体に、痛みは奔らない。

「チッ、全身義体の冷血女が！ いくら殴っても張りあいがねえ」

捨て台詞を吐き、予想より早く暴行をやめた男に對し、振り向きもせずには笑んだ口端からは赤い血が

——京子がまだ人である何よりの証拠が滴り落つ。

「こっち向いて股あ開け」

暴力衝動が鎮まれば、次は性欲。

「……つまらない男」

言い回しひとつとっても面白くない。明け透けな命令に従って再度仰向けに寝転がり脚を開けば、

しゃがみ、乱暴に割り込んだドリルがびたりと

——女の芯へ。股下へと突きつけられる。ドリルの形状は、いつしか鋭利な武器のそれから溝部分に変化し、ヒダが幾重にも折り重なった、複雑怪奇な物へと変容していた。

「動くんじゃねえぞ。少しでも変な素振りしたら仲間を呼ぶ。んでもって人質の男は罫り殺しだ」

お楽しみは一人占めしたいからな——乾いた哄笑が闇夜に響く。

(馬鹿が)

それがこの事態において唯一抱いた感情だった。己の命や使命感よりも快楽を尊んだこと。そして人質について口を滑らせたこと。後者については真偽のほどは不明だが、とにかくこの牡の底が知れた。

この場で陵辱される事態も、想定内。元より抵抗するつもりもない。ジャンについて正確な情報をつかむまでは——。

「ゴイツで、このヒダつきドリルでたつぷり。隅の隅まで抉り回してやるぜえ」

ギューイイイツ……とわざとらしいくらい盛大にドリルの回転音が響き渡る。回転に合わせ、付属するヒダ部分が微細な振動を伴い開閉していた。

「自分のモノには自信がないの？」

どうもこの男とは折りあいが悪いらしい。冷静に事を運ぶつもりが、つい悪態をつかされてしまう。

(一種の才能かしらね、これも)

「いちいちうぜえんだよ！ このアバズレがあ！」

ドリルの回転が増し、特殊スーツの股布を裂こうと力一杯押しつけられた。

「ぐうっ……あ、ああ……っ！」

よじれる布地に擦れて、膣肉が震える。ヒダドリルのもたらす微細な振動に脅かされ、否応ない悦楽の火が胸にとりかけるのを、唇を噛んでどうにか堪えてみせた。

「へっ。いいんだぜえ、喘いじまって」

見透かしたように、男の顔が歪む。

ぶちっ、ぶちぶちぶちっ！

(そう……長くはもたないか)

頑健な肉体を持つ身だ。肉を抉られることに対する恐怖心は、ない。特殊スーツの限界まで、長くて四分弱。冷静に事態の把握に努める頭脳は、まだ充分な判断力を備えていた。

——大丈夫、やれる。自身に言い聞かせて、全身に回らせた強張り解いてゆく。

「くそっ、しぶてえな」

グイグイと押し入るドリルごと、膣内にスーツの布地が食い込んで。

「ア……乱暴な男は、っ、嫌われるわよ」

摩擦に煽られ、また胸奥の火が勢を増した。膣の芯にゆつくりと響き始めた衝撃に、知らず知らず

「ア……乱暴な男は、っ、嫌われるわよ」

摩擦に煽られ、また胸奥の火が勢を増した。膣の芯にゆつくりと響き始めた衝撃に、知らず知らず

「ア……乱暴な男は、っ、嫌われるわよ」

摩擦に煽られ、また胸奥の火が勢を増した。膣の芯にゆつくりと響き始めた衝撃に、知らず知らず

腰が艶めかしくねりを披露する。嘔み殺した甘露を呑み込むように、のけ反る喉がゴクリ。垂れた前髪が地を掃き、砂ぼこりの煙たさにむせてしまう。

そのことを、男は己の行為が嫌悪を与えたのだと勘違いしたようだった。

「ひび、やつとイイ顔になってきた」

救えない凡愚だ。だが、この身に宿る官能の酔いを醒ますパイプ代わり程度にはなるだろう。こき下ろした男を見つめる瞳は、まだ血の色の輝きを失ってはいない。

「どこだあ？ おら、おら！」

調子に乗った男はドリルの回転をさらに速め、好き放題に特殊スーツの股布上を往來させた。

「んう……」

時折回転のリズムが不規則に、おそらく男の呼吸に応じて変化するのが、酷く煩わしい。耐えようとした矢先や耐えきつた直後に刺激を浴び、少量ではあるものの甘い声が漏れてしまうせいだ。

「動くなつってんだろが！」

「……ッッ！」

おもむろに脇腹を蹴られて、またうつ伏せに転がされる。

（しまっ……）

男と己、それぞれの発する声音の不協和音に、ほんのわずか意識を囚われたのが災いした。不意を突かれる形での、予想外のダメージ。脇腹を突き抜けた鈍い痛みを顔をかめ、唇を噛んでやり過ぎし。

左肋骨粉砕骨折。内臓損傷。筋断裂。けたたましく脳内に響く体内ナノマシンの報告に、この日初めて紅い瞳が小さく揺らぐ。

ドクンッ——。

「んくああっ！」

「な、なんだあ急に」

ぴつたり包むスーツの光沢のおかげでよけいに丸

み際立つ尻肉が、電撃を食らわされたみたいに大きく、縦に跳ねる。

（き、た……っあ、ひ、イイツ……！）

突如の豹変に目を白黒させている男に構う余裕は、すでになく。黒髪を乱し、地によだれを漏らして、来るべき衝動に対し身構えた。

ドクンッ——。痛みを抑えるためという名目で体内で分泌される脳内麻薬。組織の施した義体がもたらす効果を味わうのは、これが初めてではない。

そして「痛みの抑制」というのは理由のひとつに

しからずぬことも、とうにわかつていた。

（これは私を縛る、楔っ……くう、あ、あああつ）

戦闘で負傷するたび、媚薬にも等しい濃度の快楽物質に溺れさせ、その快楽を癖づけることで、任務

潰けの日々に従事させ続ける。

そんな特務の目論見が今、心底恨めしく感じる。

「まあ、反応があるほうが楽しいな。へ、へへ」

——今すぐにでも、男を殺して脱出すべきか？

浮かんだ提起はすぐさま、早鐘のように鳴る胸の内

内で否決された。

（ダメ、だ、ジャンを……）

今逃げれば、組織によけいな警戒を抱かせるだけだ。仮にジャンが囚われているのなら、報復のために

に殺害される可能性も皆無ではない。考えるほどに

ネガティブな結果が浮かび、そうして、脱出の機会を

自らの意思で握り潰してしまふ。

「あ、熱いつ、あつあアア……！」

尻肉を押し潰さんばかりに身を寄せてきた男の

汗ばんだ熱とにおいに、頭が眩む。

先日のように負傷したけならまだしも、身を黴

られ続けるこの状況下での媚薬投入。脳内麻薬の効

能の強さを体感し知っているだけに、理性を保ち乗

りきれる自信は持てなかった。

みちつ、みちみちいッ！

「おら、とつとど破けちまいな」

ドリルに挟られた股布が悲鳴を上げる。同時に擦られた陰唇からは、嬉しい悲鳴とともに噴き立ての蜜液がよだれのようにトロトロと染み出し。

（くふっ、うあ！ つく、うう……！ 今は、耐えないとっ、耐え……！）

考えるほどに股間への刺激に意識が集中し、抑え

難い快楽の大波に吞まれそうになる。

ぶちッ——。まるで処女肉が裂けた時のような儂

い音色を聞きとめた、直後。

「ふあっ！ あくうああああ……！」

一瞬、涼しい夜風が剥き出しになった湿る陰毛を

優しくないだ。そして、潤み息づく肉厚の秘肉を掻

き分けて、メタリックな光を放つドリルが、無遠慮

に突き入ってくる。

ずぶっ！ ぐぢゅぶうううううう！

「ンラッッあッあ——ッッ！！」

「ぐははははっ、響くウ！ てめえの悲鳴が心地よく

腕に響くぜエ！ もうドロドロロロじゃねえかッ」

——本当は待ちきれなかつたんだろう！

体格で勝る男が押さえ込みをかけながら、耳元で

囁く。

「ちが……つうあ！ ひひやあつ……」

耳朶のむず痒さに身じろいだ、ただそれだけで。

媚熱に侵された身は切なく身悶え、よけいに突き入

るドリルの冷たい感覚を、押し入るヒダの蠢く振動

をより鮮烈に体感させられた。

ギユイイイイイイッ！

「く、うっ……うッ、くう、ううあああ！」

胎の内部を直接ほじられ、撫で掻き回される。

（ヒダが、くすぐるみたいっ、に イ……ピリピリ

ッ……し、しびれっ、てええ……っ！）

まさに女を悦ばせるために備えられた形状だ——

卑しい男の拳の蠢きに義体の身は素早く対応し、ま

たぞろ大量の脳内麻薬を分泌してしまう。

義体相手という想定外の事態に陥つた際に、すでに計画はほころんでいた。だが、後悔するつもりもなければ、その余裕すら与えられてはいなかった。(もどか、しつ、イツ……くう、ううう……)

自分主導で男を弄ぶのとは決定的に違う。意志の力ではまならぬもどかしさ。軽く掻いては引つ込み、また掻き乱す。執拗に続くヒダドリルの攻撃がもたらした肉欲のさざ波に、ただただ翻弄される口惜しさ。それらすべてが混ぜ合わさり被虐の快楽となつてぶり返し、肉の波長とリンクする。

抗う脳裏には幾度も白熱が散り。その都度口端からよだれと嘔み殺した嬌声とがこぼれ出す。

「おもらっ……！」
 「んっ……ぐウウウツツツ」

ズブリとひと際深く沈んだドリルの突端が突き当たりにぶつかり、コリコリとした感触を楽しむように何度もノックされ。

回転しながら、折られたまれたヒダを開閉、振動させられ、潤う肉壁を執拗に掻き回された。

(あぐ、う……うあ！ ツ……うふうう！ ぐちゃぐちゃにつ、なつ、るうう……！)

頭の中も、胎内も。行き渡る麻薬成分のせいで、掻かれた肉壁から染み出す蜜の触感すら知覚できるほど鋭敏に、また混乱し。

ヒダのもたらすむず痒さと、対極の痛烈な甘美を同時に味わわれ、まぶた裏が延々白熱に染まる。腰の芯を突き刺し、擦り込むみたいに叩き込まれる痛み——悦びに、動悸がいつそう強まっていった。

「っ……あッ、あああッ……！」

嘔み殺そうとして漏れ出たあられもない嬌声の振動で、ますますドリルの回転刺激を感じ取り、一斉に、強制的にももされた胸奥の官能の炎が燃え狂う。無防備な腔壁を力任せに削られるたび、震える腔

肉が歓喜に溶けて脈を打つ。

「かはっ……アッ、んぐッ、あああッ！」
 懸命に耐えようと嘔み締めた唇が唾液に濡れて上滑り。結局抑えきれずに上下の口から止め処なくよだれを漏らししてしまう。

(奥がうずく、うずいてたまらな……！ イイッ！)
 「くは……はははっ！ とんだ色ポケ女だッ。腹を抉られて喘ぐかあ普通」

痴態に気をよくした男が、ドリル状の拳を今度は内から腔肉を掻き分けるような形状へと、急速に変化させていく。

(な、中……覗かれてっ……！ 私の、奥……視線が、あ、熱いイイッ！)

医療器具のクスコに近い形となった右拳を、握り、開く要領で幾度も開閉させながら。牡は起き上がらせた身を女の股下へと窮屈そうに潜らせた。

内部からの圧迫に煩悶する牝肉をあざわらうかのように、ギラついた視線が突き刺さる。

「よく見えるぜえ。てめえの奥の奥まで全部なひはっ、ひははは！ ヒダヒダがヒクついて、ちんぽ欲しいですつておねだりしてらあ」

(いつ……ア……ッ、ペラペラとっ、くっくっ！)

言い当てられているだけに反論はできない。元より喘ぎつばなしの唇には、その機会も与えられない人らしい感情などなくしてしまつたほうがよかつたのか。そう、真剣に一瞬考えさせられたほど。身を焼く羞恥と恥辱とに耐えかねて、紅潮した顔面を地に擦りつけ。刺激と屈辱とで塗り潰し、隠す。

「さすがに処女つてこたあねえようだが。穴はまだまだ綺麗なものだな、ええおい？」

通常、人の目に決して触れぬ奥の奥。呼吸に合わせ蠢く腔壁の収縮から、染み出す蜜液の具合まで事細かに観察して、支配者にでもなつたつもりなのだろう男があざわらう。

「……臭い息を、吹きかけるなっ……」

虚勢は、甘美に沈みかける身を律するために必要だった。

「ああ!! どの口で言つてんだア」
 たどえ怒りを買い、牡の劣情を刺激してしまうとわかっているも。

「ばしゅッ」。

「あぐ！ つぐ、あ！ あああっ……！」

うつ伏せの身に、続けざまに四発。両手のひらと、両足の甲に直径三センチ大の風穴を空けられた。視線を送ると、メタリックな杭が深々と突き刺さり、その杭ごと四肢が地に縫いつけられてしまつて

いる。それが破れた靴から発射された、男の右足指が変化した液状の弾丸だと気づいた途端。

「あッあアア！ ぎあッああああ……くっくっ!!」
 傷口より噴き出した鮮血と入れ替わるように。頭蓋

がしびれるほど身を浸す過度の脳内麻薬の大波に引きずり込まれ、絶叫する。

「まどろっこしいのはもうヤメだ。この場で壊してやるぜえ黄女」

ビュルビュル噴いた本気汁と、痙攣する子宮口を目と鼻で味わいながら、牡が吠えた。

(ああぐっ……ひ、響くう。こ、のままじゃ——)
 男の攻撃により完全義体の身が破壊されることはない。だが媚薬漬けの心が壊されてしまえば。この身を今焼いているのは痛みではなく、狂おしいまでの快楽なのだ。鉄の苦みがじむほど強く噛んだ唇の奥から、死への恐怖がせり上がる。

「そお、らよっ……」

「げぶッ……んぐうううっ!!」

おもむろに、腔内一杯に突き入つた右拳を、男が頭上まで持ち上げる。四肢に刺さる肉弾丸が、癒着再生しかけの傷口ごと引き剥がされる——快感。男の右腕一本を支柱に串刺しの鶏肉のごとく釣

上げられ、人ひとり分の全体重が結合部へと集中し、より強く掘られた肉の穴の奥底で、肉悦と嫌悪が混然と吹き荒れ、染みてゆく。

(腹、破……けつ、いつ、ああアぐううッ！)

嘔み締められた口の端と四肢から鮮血を滴らせ、意識が朦朧と淀む只中で。心だけは、強く保たなければ

——そう、懸命に食い縛るほどに、ズブ、ズブと深く突き刺さる痛みはすぐさま分泌される脳内麻薬によって肉欲へと直結し、グズグズと心の内から突き崩されてゆく。

「あぐ！」

髪をつかまれて振り向かされ、土ぼこりとよだれにまみれた顔をまじまじ眺められる。

「へっ。ざまあねえな」

口端から紅い血が滴るうとも、紅い瞳から、涙は流れない。

「可愛らしいマンコ穴を、ガバガバにしてやるよ」

「好きにつ……しろっ……あぐはあッ……」

どうせ、この男程度の攻撃力で半端に壊されたところで、ナノマシンにより修復されるのだ。だが、男の次の発言は、懸命に踏みとどまる女捜査官を揺さぶり落とすのに十分な悪意を秘めていた。

「どうせガキが産めるはずもねえんだ。子宮ごとぶち抜いちまってもいいんだよな、ああ？」

ヒッ——漏れ出かけた悲鳴をどうにか呑み込んだものの。女としての本能が震えあがる。子が産めるはずがないと、とうに理解していたはずだったのに、もかわらず。

すくんだ隙を見定めたように、ヒダドリルの先端が子宮の扉をほじり開け。

「あぐ！ つひあああああッ！」

どつと噴き漏れた本気汁を弾むヒダに掻き出され、そのまま先端で無防備な肉壁を力一杯削られた。

(焼き……切れるっ……！)

舌を突き出し、白目を剥いての無様な嬌声。幾度も白む意識が、悦楽という名の熱線に炙られ、細く、細くよじれ、今にも引きちぎれてしまいうさだ。

鳴くように漏れた嬌声に合わせ、だらしなく震える口元からよだれの糸がこぼれ落ちる。

とうになくした出産機能、無用の長物であるはずの器官を、破棄し尽くされる恐怖。それも女としての本能ならば、与えられる快感に従順に、回転するドリルにびつたりと肉ヒダをすがらせて、さらなる快楽をねだる身体の反応もまた、女として——牝としての本能に他ならなかった。

「ひひ、イクか？ 子宮口がクパクパしてんぞお」

閉じようとすする肉の扉を、男はドリルのヒダでくすぐり、撫で擦って、甘美の代償にこじ開ける。

止め処なく漏れ出る蜜液と、痙攣する隙肉が、よけい奥へとドリルの先を導いてしまう。滑りをよくして、ますます肉の甘露を貪ってしまう。

「逃がさねえぜ、てめえは。ここでイキまくって、ションベン垂れ流しながらぶつ壊れんだよ」

前のめりに倒れかけた、その胸元をわしづかまれて、また、鋭い痛みにより肉の悦びを刻まれる。男の指がスーツ上にポツチり浮いた勃起乳首をあざとく見つけ、ねじ切る勢いですり潰した。

「ひぐつうああ……っ！ そ、こオッ……っ！！」

獣のような咆哮を上げ、痙攣する身をつ張らせる。脳内麻薬の分泌する瞬間を凶つたみたい、タイムリグよく子宮内部をもほじられて、明け透けな喘ぎ声の本気汁ごと噴き漏らされてしまった。

(身体なんて、ただの容れ物……っ、ただのイレっ………ただのっ、ただのッ！)

ドロドロの声と汁を漏らしながら、肉のうずきに抗い、怨嗟のごとく唱え続ける。ジャンを想い耐える心だけが本物で、義体化された身体など壊れても

代用がきく。ただの箱にすぎぬのだと——。

「ここか、ここがイイのかよつ。ほれ！ おらおらおらあつ泣けよもつとわめいてみせる糞女ア！」

男の声がやたら癪に障る。その怒りが、肉悦に肩先まで浸かる心身をかるうじて踏みとどまらせる楔となつてくれたのは皮肉だったが——。

嫌悪に彩られた心はともかく、延々ドリルで抉られ快楽物質を与えられ続けている肉体は、すでに限界を回避できそうになく。

「い……ぎウ……ッ！！」

苛烈な衝動に煽られた腰が、小刻みな痙攣を繰り返す。太腿にこびりつく血糊と愛液を洗い流すように、膣より先に限界を迎えた膀胱が尿液を迸らせた。

「ひアッ、——ッッ！！」

唾液で上滑る唇が、抑える間もなく切なさをたっぷり含有した嬌声をまき散らし。

ギチギチとよけいドリルを締めつけ唾え込んだ、肉穴に奔る快感——。我が身が内側から削り取られるにつれ強まり続ける、電撃のごとき鋭さで突き刺さる白熱の甘美に、耽溺する。

「ぶしゃっ……しゃああああアッ——！ (漏らし……っ……うう……イイツ、なん、てつ、えええっ……アッアア……っ！！)」

食い締めようとした唇が、また唾液で滑ってギリ

——と悔しまぎれの音色を響かせた。串刺された胎を震わせ、だらしなく垂れた脚の付け根から蜜をあふれさせ。尿液を噴き散らしながら、口端からは泡立った唾液を漏らして、腰の芯に溜まる喜悅を吐き漏らす。

「ぐう……ひひひひひ！ いい感触だぜえ！」

「あぐ！ つひあああああッ！」

どつと噴き漏れた本気汁を弾むヒダに掻き出され、そのまま先端で無防備な肉壁を力一杯削られた。



掻かれ、痙攣は強まりながら持続する。

「いあつ！ あつ、あがあああ……っ！」

イキっぱなしの脳裏に突き抜ける嬌声。それに混じって尿と、愛液と、鮮血の——突き刺さるドリルに、肉ごと掻き混ぜられる攪拌音がこだまする。卑しい音色に心の隅々まで蹂躪された。

「こ、んなのでっ、また、あ……も、漏れえッ！」

文字通り身を裂かれる痛みと、すぐさまそれに成り代わる、腰の芯まで蕩けそうな強制快楽に掻きぶられながら、またビクリ。ひと際高みに押し上げられて垂れた四肢を揺らし、蜜を吐く。

「イツ、ぐ……うう！ アイ、アアッ……く……!!」

声なき声を張る唇がパクつく中。蕩けかけの意識の隅で、股が奏でる卑しいメロディーを聞いた。

ズキズキと、自重によりドリルを啞え込む股へと伝わる甘露な衝動が脊髄をたどり、脳天へ。痛みと快感。快楽と苦悶。狭間で揺れながら、ズブズブ、浸かり込むように沈んでゆく。

「——京ちゃん」

不意に響いた懐かしい呼び名に意識が向く、その瞬間まで。

「ぐうおおおおおっ!!」

気づけば、巨漢が空いた左手で左の耳を押さえ、苦悶している。押さえる手のない右耳たぶからもおびたらしい出血が——正確には、すでにちぎり飛ばされてしまった耳たぶのあったあたりから。

「だ、誰だアツ！ 一体、どこから……っ」

両耳たぶを、おそろく光弾で貫かれ失った巨漢が、情けなく涙を漏らしながら吠え立てる。

「大の大人がビービー泣きなさんなって」

虚空から聞こえた声は、まるで子供をなだめる親のようなあつつけらかんとした響きを伴っていた。

「……軍用光学迷彩」

特務の専用スーツに備わる能力が発動している。

一般人の目にはわからずとも、紅色の瞳はその輪郭が虹色の明滅となって映っていた。

そして「京ちゃん」と——その馴れ馴れしい呼び名を使用するのは、この世にただ一人だけ。

「……ッ！」

いまだ遠慮なしに突き入っているドリルの根元。痛苦に震える巨漢の右腕に脚をかけ、唇噛み締めひと息に。

ずるっ、ずるるるうっ……。

へばりつく肉壁ごと、股から引き抜いてゆく。まだ己が両拳には楔が埋まり込んで血潮を噴いていたが、お構いなしにドリル先端をつかんだ。

「て、てめっ……ごううああアツ!!」

男がようやく事態に気づいて振り向いた瞬間。抜きさったドリル状の右腕にそのまま両脚を絡め、腕ひしぎの要領で極めて生身の肩ごと引きちぎる。

「ぎいやああああああああ!!」

「煩い男だな、最期まで」

ちぎれたドリルを遠心力で投げ捨てる、その動作のままに逆立ちで地に降り立ち、開いた両脚を横なぎに一閃。嘶く顎を右足で蹴り碎き。落ちてきた脳天を左踵で陥没させた。

「ヒュウッ 相変わらず容赦ねーな」

「そっちも相変わらず。射撃の腕はともかく、ノリが軽いわよ」

ズズン、と盛大に音立て声なく崩れた巨漢の末路にはすでに微塵も興味なく、背を向けて。久しぶりに己が足で降り立つ地の感触を踏みしめながら、迷彩を解いた彼へと向き直る。

「——ジャン。あなた、無事だったのね」

「ん。ああ。今の今までイージスの本拠探しに忙殺されててな」

短めの金髪をわしやわしやと掻き乱して、はにかむみたいに彼は笑った。

「それで居場所を知らせるわけにはいかなかったってわけ？」

両手のひらに埋まる液状光弾——あるじが事切れて踏ん張りをなくしたそいつを、それぞれもう一方の手で引き抜きつつ、つい刺を含んだ言葉を吐く。

足の甲にはまだ光弾が埋まったまま。おぼつかない足取りも、慣れ親しんだやりとりの中で少しずつ治まっていった。

「そゆこと。……って、なんかちよつと怒ってない京ちゃん？」

「気のせいよ。任務ならしうがない」

怒る素振りには照れ臭さを隠すため。相棒であり恋人でもある男の無事に、ほつと緩んだ顔を見られるのが悔しく思えたからだ。

「声が硬いし冷たいし」

おそろくそんな女の心情など、すべて気づいているのだろう。わざとすねた顔をしつつも、しゃがみ込み、足の甲に埋まる異物を引き抜いてくれる。

「——俺のために身を張ってくれるのは嬉しいけどさ。無茶し過ぎだぜ、京ちゃん」

「……頑丈な身体だけが取り柄だから」

言いながら、立ち上がった彼に身を寄せて。

「お。……あでっ」

抱きついてもらえらんでも思っただか、両手を広げたジャンの額に、背伸びをし、デコピンひとつ。

「な、なにすんのさ」

「私が漏らす前から現場にいたのに、わざと最後まで見届けた。その罰だ」

加減したデコピン一発なんて、安いものでしょう。

そう、表情だけでふっかけてやれば。

「あ、あれ。気づいてたんだやっぱし」

頬を掻きながら視線を脇に逸らすのが、都合が悪い時のいつもの癖。

「気づかれてないと思ったのなら、ずいぶんと見く

うっうっ…
私を幽閉して
一体なんのつもりだ？

ふふふ 幽閉だなんて…
私達は将来を誓った
仲じゃないですか

私達の仲を邪魔する王国を
滅ぼしたのがそんなに
気に障りましたか？

そなた 自分が何を
したのかわかって
いるのか!?

何を言っておる
貴様のような男
見たくもない!

囚われの姫君…

エルゴ 姫騎士

孕ませの儀

漫画
COMIC

武田あらのぶ

な何を…
誰が敵である
貴様の子など…!

ほらこれがあなたの
子宮に子種を
植えつけるんですよ

ひいっ！臭いっ！
そんな汚らわしいもの
近づけるなあっ！

Sister Priggen, Maiden
The Tainted Zunker
レクリムの受難

ピルグリム メイデム

外伝

純潔の巡礼聖女を辱める肛虐の畏!
果たして玲音の運命は!!

後編 みっしょん・こんぷりーと?

小説 NOVEL 狩野景 挿絵 ぽち。 ILLUSTRATION



『ピルグリムメイデン I~II』
絶賛発売中!

登場人物紹介



クリムゾン・レイン

教皇庁異端審問局の巡礼聖女。口が悪く態度もでかい傲岸不遜な少女。



ジュリエッタ・マッシナ

レインを補佐する巡礼聖女見習い。かなりのドジで天然系。



ヨハンナ・クリューガー

“漆黒のリヒャルト”配下の不死者。天然ボケのエロ女。

前号までのあらすじ

不死者を倒しにきたレインとジュリエッタは、ヨハンナの発情フェロモンによってエッチな気分にごさせられ、不死者の手先となった修道士たちに襲われてしまう。

「んんん、あ、あはあつ!! お乳めろめろです、お乳い。ふあああ、皆さん、こんな大勢でわたしのお乳おね」
片方の膨らみを三人で揉みながら乳首まで吸える大きさの乳房。
巡礼聖女ジュリエッタ・マッシナは、普段から少々縮まりに欠ける顔をへらへらさせて、法悦に浸っていた。
「ふあう……こんなこと、いけない、です……のにい……」
女として十分すぎるほど発育しきつた肉体は感度も抜群で、男たちの執拗な愛撫に夢中となってしまう。
「シスターってば、ヨハンナちゃんに負けないくらい、エッチな身体だね」
「こんな見事なおっぱいだもの、陸の中も、ヨハンナ並に名留じやないかな」
「わたし、巡礼聖女れすからあ、そんなの、知りません、あああああつ!!」
乳首を虐めるように抓られ軽い痙攣に見舞われながら、男たちの指し示す方をぼんやりと眺める。

そこではメイド姿をした不死者が仰向けになった男に跨って膣穴いっぱい男根を咥え込み、淫靡な所作で腰をグラインドさせていた。
「ぬおっ! も、もう、射精るっ!!」
「ど、どうぞお、存分に膣内射精あそばせえ。わたくしのお股は、ご主人様に射精れるためにあるのです。ふああ、ああ、中で大きく、ああ、き、来ますねっ?! はあああ、きたあつ!!」
「また締めつけてッ、おわ、出るっ!!」
どびゅ! どびゅるるっ!! ぶびゅびゅびゅるる——っ!
激しい射精を子宮に食らい、上気した癒やし顔が淫らに弛む。彼女が官能に陥ると、メイド服の身体から溢れる桃色の露が濃さを増した。
人間だけではなく不死者さえも、理性が及ばないほどの情欲を催させる淫霧、ラブ・ドライブ。
「ヨハンナさん、こ、今度は僕とお願います!!」
「はいです、ご主人様。あ、はああ、今度のご主人様のも、と、とても、太いじゃああああ」
収まりきらぬ白濁を太腿にだらだらと垂れ流し、もう次の男の相手を始めた不死者メイドにジュリエッタは目を奪われていた。
「ああ、男の人の、あんな物があそこ。気持ち、イイのですよね……?」
神に身を捧げた純潔の乙女には想像もつかない快楽。
禁忌と分かっているながら、ぞくりと背中が戦慄く。
「おまんこに、挿入て欲しいの?」
「ふわっ?!」
いきなり耳元で囁かれ驚いた。
「い、いえ、わたしは、そんな……」
不死者を滅ぼすには処女の血が不可欠。もし純潔を失えば、戦う術をなくし巡礼聖女としての価値は無となる。

「初めてなんでしょ。大丈夫、根本までたっぷり突き込んで失神するほど気持ちよくさせてあげるから」
「へわっ?! やっ、そ、そんな、わたしは別に。あの、結構ですのっ」
赤銅色の筋張った怒張を差し出されると目を離すことができない。
「遠慮しないで。ほら、ここだっつてほらもう、こんなになっちゃって」
「ほあ!!」
脇を抱えられ、へたり込んだ身体を浮かされた。途端に股ぐらと床の間で粘度の高い愛液が、にちゃ、と幾筋もの糸を引く。
「——はあああうっ! やっ、ち、違うんですっ!! こ、これ、これはっ!!」
己の浅ましい肉欲を見せつけられ、股ぐらから眼を逸らそうと顔を上げる。深紅の巡礼聖女と眼があつた。
（あうう、ち、違うんです、シスター・レイン。わ、わたしは……）
股ぐらを濡らしただけで、弱々しく戸惑う無様を軽蔑されたのではないかと不安になる。
「やめてください。わたしは、異端審問局の巡礼聖女! 男の方と、こ、このような淫らな振る舞いをするわけにはいかないのですっ!!」
「シスターってば、下着は黒なんですから。エッチだなあ」
氣力を振り絞って男を拒絶したのが、捲り上げた尼僧服の下を覗き込まれての言葉にあつさり遮られた。
「ふえ、こ、これは修道院のみんな

素行の悪さは異端審問局始まって以来の問題児。だが実力は数多くの不死者を討滅してきた、最強の巡礼聖女。
「あ、ああ……ッ、やああ、あああ」
その彼女が快楽の余り失禁し、精液まみれで悶えていた。
「はああ、シスター・レイン」
早く助けなければ。いや助けて欲しくて声をかけたのだっつた。
脳裏の片隅に追いやられた理性が危機を訴えるが、はだけた濃紺の修道服で放埒に波打つ生乳房を男にしやぶられると、もうどうでも良くなる。
——ちゅばちゅばつ、ちゅるるるッ、ずじゅるるるう……っ!!
「ひゅあつ、ひゃああああん!!」
コチコチに膨らんだ乳首を唇で圧迫されながら吸われ、続けざまのハレーションに目がくらんだ。
熱く火照って締めなくなりたわむ人並み外れた爆房に何本もの指がめり込んできて勝手気ままに揉み弄る。

「んんん、あ、あはあつ!! お乳めろめろです、お乳い。ふあああ、皆さん、こんな大勢でわたしのお乳おね」
片方の膨らみを三人で揉みながら乳首まで吸える大きさの乳房。
巡礼聖女ジュリエッタ・マッシナは、普段から少々縮まりに欠ける顔をへらへらさせて、法悦に浸っていた。
「ふあう……こんなこと、いけない、です……のにい……」
女として十分すぎるほど発育しきつた肉体は感度も抜群で、男たちの執拗な愛撫に夢中となってしまう。
「シスターってば、ヨハンナちゃんに負けないくらい、エッチな身体だね」
「こんな見事なおっぱいだもの、陸の中も、ヨハンナ並に名留じやないかな」
「わたし、巡礼聖女れすからあ、そんなの、知りません、あああああつ!!」
乳首を虐めるように抓られ軽い痙攣に見舞われながら、男たちの指し示す方をぼんやりと眺める。

そこではメイド姿をした不死者が仰向けになった男に跨って膣穴いっぱい男根を咥え込み、淫靡な所作で腰をグラインドさせていた。
「ぬおっ! も、もう、射精るっ!!」
「ど、どうぞお、存分に膣内射精あそばせえ。わたくしのお股は、ご主人様に射精れるためにあるのです。ふああ、ああ、中で大きく、ああ、き、来ますねっ?! はあああ、きたあつ!!」
「また締めつけてッ、おわ、出るっ!!」
どびゅ! どびゅるるっ!! ぶびゅびゅびゅるる——っ!
激しい射精を子宮に食らい、上気した癒やし顔が淫らに弛む。彼女が官能に陥ると、メイド服の身体から溢れる桃色の露が濃さを増した。
人間だけではなく不死者さえも、理性が及ばないほどの情欲を催させる淫霧、ラブ・ドライブ。
「ヨハンナさん、こ、今度は僕とお願います!!」
「はいです、ご主人様。あ、はああ、今度のご主人様のも、と、とても、太いじゃああああ」
収まりきらぬ白濁を太腿にだらだらと垂れ流し、もう次の男の相手を始めた不死者メイドにジュリエッタは目を奪われていた。
「ああ、男の人の、あんな物があそこ。気持ち、イイのですよね……?」
神に身を捧げた純潔の乙女には想像もつかない快楽。
禁忌と分かっているながら、ぞくりと背中が戦慄く。
「おまんこに、挿入て欲しいの?」
「ふわっ?!」
いきなり耳元で囁かれ驚いた。
「い、いえ、わたしは、そんな……」
不死者を滅ぼすには処女の血が不可欠。もし純潔を失えば、戦う術をなくし巡礼聖女としての価値は無となる。

「初めてなんでしょ。大丈夫、根本までたっぷり突き込んで失神するほど気持ちよくさせてあげるから」
「へわっ?! やっ、そ、そんな、わたしは別に。あの、結構ですのっ」
赤銅色の筋張った怒張を差し出されると目を離すことができない。
「遠慮しないで。ほら、ここだっつてほらもう、こんなになっちゃって」
「ほあ!!」
脇を抱えられ、へたり込んだ身体を浮かされた。途端に股ぐらと床の間で粘度の高い愛液が、にちゃ、と幾筋もの糸を引く。
「——はあああうっ! やっ、ち、違うんですっ!! こ、これ、これはっ!!」
己の浅ましい肉欲を見せつけられ、股ぐらから眼を逸らそうと顔を上げる。深紅の巡礼聖女と眼があつた。
（あうう、ち、違うんです、シスター・レイン。わ、わたしは……）
股ぐらを濡らしただけで、弱々しく戸惑う無様を軽蔑されたのではないかと不安になる。
「やめてください。わたしは、異端審問局の巡礼聖女! 男の方と、こ、このような淫らな振る舞いをするわけにはいかないのですっ!!」
「シスターってば、下着は黒なんですから。エッチだなあ」
氣力を振り絞って男を拒絶したのが、捲り上げた尼僧服の下を覗き込まれての言葉にあつさり遮られた。
「ふえ、こ、これは修道院のみんな

が、下着は厭おそかな色にするべきだと、
勧めてくれたので……。え、えっちな
色、なんですか？

ジュリエッタの天然つぷりは同僚た
ちにとつて実にからかいやすかったよ
うだ。扇情的な下着にいまさら驚く様
に、レインが呆れ顔で溜め息を吐く。

「はう〜。——あわつ、や、だ、
だめ、だめですうっ！ ああああつ」

気落ちしていると、男たちの手がそ
の黒ショーツを脱がしにかかってきた。
慌てて股を窄めるが、全身が虚脱して
いるためすぐ押し開かれてしまう。

「ッ——！！ ひうううっ！」

愛液まみれの潤滑も手伝って、小さ
な黒布はあつという間に膝まで下ろさ
れた。乳房同様肉感的に完熟した尻房
が、恥じらいにくねる。髪と同じ色の
亜麻色の陰毛が申し訳程度に飾る股間
は、純潔の乙女らしく初々しい桜色の
肉花弁が綻び開いて、異性を誘う蜜汁
を絶え間なく溢れさせていた。

「これじゃ男を誘っているとしたか思え
ないよ。そんな汁垂らしてちや、挿入
てあげないほうが悪い気がしてくる」

腰を後ろから抱き寄せられ、巨悪な
怒張の真上へと疼く股ぐらを導かれる。
「ひ、い、だ、だめ、男の方と、こん
なこと、するわけには……」

このまま、座する男の胡座の中へと
腰を下ろされれば、屹立する男根は為
す術もなく陰内に挿入されてしまう。

「そうですね。確かに処女を失ったら
シスターに取っては一大事だ」

だが同情めいたことを口にして、男
が陰口に迫った龟头を寸前で止めた。

処女の血を恐れながら、しかし同時
に処女の血は、不死者に取ってどのよ
うな血潮よりも甘く芳醇な最高の美味
であった。しかし決して味わうことが
できない。口にした途端 破壊が待ち
受ける禁断の味。

そのため不死者たちは、処女を犯す
際、せめてその香しい匂いだけでも存
分に味わおうと、なかなか破瓜させず
弄び続ける。

ジュリエッタの処女も、すぐに奪つ
ては惜しいと感じたのだろう。修道士
は龟头の先端を牝穴から逸らすと、別
の部位に追突させた。

「おほああつ!!」

ゴツンと重々しい衝撃に菊門が反射
的に窄まった。

硬い。鉄のように硬くて、焼けるよ
うに熱い。びつくりするくらい、太い。
大きい。そしてヌルヌルとした液にま
みれて排泄の穴口に密着している。

「はあッッ、イヤ、です……うっ！
ああ、あ、なに……を……？」

肛門を押ししてくる硬肉棒の存在が強
すぎる。妙なことにムズムズと菊皺が
ざわめき、弛んでしまう。

「にゆるぶっ！
弾力的な柔房が熟れ実る狭間で鶯色
の皺がこじ開けられた。灼熱の虚脱感
を纏ってヌメヌメの異物がめり込む。

「んんあああつ!!」

先端だけで息が詰まった。

尻穴が強ばって異物を締めつけ、硬
く弾力的な感触をしっかりと感じ取る。
「ふあつ、い、挿入れ？ そ、んな
へあああ〜ッ！」

声を震わせ前のめりに逃れようとす
るが、男たちに押し戻される。

その上、一時途切れていた乳房への
愛撫が再開し、ジュリエッタの強ばつ
た身体がへなへたと蕩けた。

「おっぱいもお尻も柔らかいのに、こ
こはキツキツだね。嬉しいな。僕がシ
スターのお尻処女いだけるなんて」

不浄の排泄穴への汚らわしい行為に、
見習い巡礼聖女が恐れ戦く。

「ひうう、いやです。勘弁してくださ
い。くううううう——ッ!!」

尻肉を爪が食い込むほど強く握られ
「ヒッ」と息を飲んだ刹那、

ヌブズブズヌブズ!! ズブズブズ
ブブブブブ——ッ!!

「ぐっひいひいッ!!」

一気に根本までアナルへ男根を叩き
込まれた。

潤滑の愛液がびゅびゅつ！ と飛び
散る。ぼわぼわの癒やし顔を狂おしく
引きつらせ、青い瞳をまん丸に見開く。

激しい挿入に大きく仰け反った身体
が、ガクガクと危うげに震えだす。

気も狂わんばかりの形相となったジ
ュリエッタに、修道士の容赦ないスト
ロークが繰り返された。

ヌブッ、ズブッ!! ずぶずぶず
ぶつ！ じゅつぶんつ!! ズムンッ!

「——ッはああつ！ あぎいひつ、お、

お尻いつ、いああつ、ぬ、抜い……
ッふあああつ、挿入ッ、て、あ、ああ
あ、ダメッ、んおはあああ——ッ!!」

股ぐらから溢れてきた愛液に潤滑さ
れているのだが、処女アナルは固く窄
まり、激しい刺激に晒された。

それでも、着実に凶悪なサイズの肉
槍は狭い直腸の奥を乱打する。

（お尻い、お尻にっ、お、男の人の
あつ!! ああ、こんなの、苦しい、で
すつ！ でも、変な……感じいつ）

ミシミシと肛門が軋む。拒もうと括
約筋を引き締めると、異物感が余計に
跳ね上がり気が遠くなりかけた。

「んぬうううっ！ お尻いッ!! 尻あ
はああああうううっ！」

大量の脂汗が全身から滲み出て、た
だでさえ淫靡な汁でぐちよぐちよにさ
れた尼僧服に染みこむ。

「あああ、お嬢さま。だめですよ、
せつかくのお尻をそんな力んでいては
ほらこのように身体の力を抜いて、も
っと楽しまなくっちゃ♪」

食いしばった歯の間からヒッヒッ
ーと、出産する妊婦のような息を吐い
て激感に堪え忍ぶ。その巡礼聖女へ、
メイド不死者がアドバイスを始めた。

男の上に馬乗りでヴァギナに怒張を
啜え込み淫らに振りたくつていた腰を、
上体を前のめりにして浮かす。

捲り上げた黒のスカートの中、ジュ
リエッタに劣らず撓たがわな白桃尻を自ら
両手で開帳させると、勃起を握りしめ
た男が間髪入れずに歩み出した。

カウパーを滴らせる切っ先が、ヨハンのアナルに押し当てられる。
ぬぶぶつ、ずぶずぶつ、にゅぶにゅぶにゅぶぬぶずぶ〜。
「はああああつ、んあい、いいいいいっつ！ お尻い、いっばい、あああはあああ、入って、んんんううんっ」
どす黒い極太の肉筒が根本までずっぽり埋まった。
腔に迎え入れた勃起を離さぬまま肛門まで男根に満たされ、不死メイドがぼつちやり顔を歓喜でいっばいにする。
（あ、あんなに、簡単に、お尻、にあんなに、気持ちよきそうにっ）
羨ましい。と、感じてしまったのだと思う。気がつけば、ふわんと、菊皺が甘く弛んでいた。緊張に萎縮していた直腸の壁が強ばりをほぐす。
ぬぶ、ずぶずぶずぶ、ぬつぶんつ！
「ふへあああ、ひやううつ！ くつふああああつ、あふううんっ！！」
ピクピクと波打つ痙攣をジュリエッタの背筋に見舞いながら、カリ肉が直腸を挟り返す。
（はわ、あつ、嘘お、わたしのお尻い、ほじられてるう!! めちゃくちゃされて、ふああああつ）
男の下腹部が尻房をぺちゃんど叩く感触に脳裏を掻き乱される。
驚きに呆ける最中、ひねりを加えたストロークが速度を増す。
ずむっ！ スポッ!! ブズズッ！
「うわ、ああ、ああつ、はッ、速くし

ないでっ!! ひいああ、お尻の中もおつ、イヤッ、いやいや、イヤですっ!!」
腸内を裏返しにされるような激しい刺激にひたすら恐れ戸惑う。
（こんなことつ、こんなこと、されるなんて。あああ、男の人のがあ）
身体の内側を異物に掻き回されるのが、これほど強烈な感触だとは思ってもしなかつた。
「んふううつ！ ふうあつ!! はつ、あ、あああああつ、あああダメッ」
突き込まれるたびに菊皺の内側から聞こえるぶじやつ、べじゅつという液鳴りが、響きを大きくさせて周りの者たちの注意を引く。おそらくレインの耳にも届いているのだろうと思うと、情けなくて恥ずかしくてたまらない。
「ひぎつ! いううううつ!! なんです、お尻いいいいつ! おあつ!! はううんつ、んおお、あああつ!!」
しかも信じられないことに、強烈な排便欲に苛まれる息苦しいほどの異物感を、情欲の暴走した身体が気持ちよいつ感じさせていた。
「シスターのケツつ。凄く締めつけてきた。髪髷のが絡みついて……くふうつ、とてもいいつ!!」
否応なく反応する直腸で男根を喜ばせ、突き込みを煽り立てる。
「くっおあああつ! そんな、乱暴にッ、されてはあああつ! こ、壊れつ、壊れます——ッ!! う、凄おつ!!」
ガツンガツンと腸奥を叩く衝撃に意識が点滅した。許容を超えた極太を初

めて迎えたアナルが悲鳴を上げる。
「んあつ、前も後ろも変になるほど、気持ちイイッ! もうイキそう!! 何回もイッチャいそうですう」
アナルとヴァギナ両方に剛直を受け入れ、交互に繰り返される絶え間ないストロークに、ヨハンナが切なげなしかめつ面で悦び狂う。
（わ、わたしも、あんな淫らな振る舞いを!! ひあつ、そんな……あつ）
背徳の戦きに尻穴がキュウンと狭く窄まり、怒張肉を喜ばせた。
（ああ、主よ……）
十字を切つて悔いなければいけないのに。神の名を唱えた直後、ヨハンの喜び顔を眺め、あのように腔にも男根を迎えたらどんなに気持ちいいのだろうか? と興味を抱いてしまう。
不敬極まりない思い。巡礼聖女ならば決して望んではいけない禁忌の欲望。えつへらと淫蕩な笑みを浮かべ、腸内を犯す男根に合わせて尻までくねらせ始めたジュリエッタへと、刺すような視線が注がれる。
深紅の僧衣を纏う巡礼聖女が、濁液にまみれた身体を男たちに愛撫されながらも、毅然とした眼差しを濁らせもせず、甘美に流されるジュリエッタを責め立てるように見つめていた。
「——は、あああ、あつ、シ、シスター・レイン。あ、こ、これは、違うんですっ!! んあはああ、ち、違っ」
大慌てで墮落を否定しようとする。左右から伸ばされた手に、乳房を揉

まれた。
「ほへえっ!! んんううううつ、はあ〜〜〜ッ」
ストロークのリズムで激しくバウンドし暴れ狂っていた巨房へ、無遠慮な指が食い込んだ。
その途端に甘酸っぱい歓喜が、柔肉全体に充ち満ちた。
へらんとよだれを零した呆け顔に、
「ふわんっ」
それすらも被虐の快感となった。
もう下腹が尋常じゃなかつた。
未知の衝動が膨れあがる。はち切れそうに。自慰の経験すらない、純情無垢な修道女の肉体を、淫靡極まりない感覚が染め上げた。
「ほおおあつ、奥う! んんひいひい!! ひああつ、はあつ、ひいひいひいああアアあ——ッ!!」
初めて味わう絶頂をアナルの快楽から導き出され、天上へ昇り詰める喜悅と共に直腸が硬く窄まる。
「ぬうおおつ!! 凄ッ、シスター、のっ!! くうつはああああつ!!」
どびゆるびゆるびゆるっ!! びゅびゅびゅびゅびゅ——っ!
「ああ、お尻つ、おひりいいいいっ!! ひつ、ひあつ、お尻ひえあああんっ」
熱く煮えたぎった奔流に尻穴の奥を直撃され、ジュリエッタは絶頂の痙攣を激化させた。
むつちりの房を振りたくり、極太が埋まった菊穴の隙間から、収まりきら

ぬ白濁を早くも、ぶびっ、ぶびびいっ！と噴き出している。

「へああああ、変な液イッ、お尻中ああああ……、気持ち、悪……んはあああ、イイイイイイイッ!!」

不死者に強烈な発情を強いられた身体を、快楽の頂点へ押し上げられる。

「ひうっ!! ん……へあっ」

何度も押し寄せる熱波に、全身をひくつかせ、淫らに崩れた表情で喘ぐ。

（も……、だめえ、あ、ああ……また、んはっ!! く……ふう……）

ぐつたりと突っ伏し、一向に収まる気配のない絶頂に呆けていると。

「シスター。お尻穴、大変に美味でございました。ごちそうさまあつ！」

「じゅぼむっ！ びゅりびゅりびゅりいっ!!」

「ひゅぎイイイッ！ ひあつ!! にひいいい、んんあはあああつ！」

勢いをつけて引き抜かれ、カリ肉に腸壁を掻きむしられた。

白濁を辺り一面にびちゃべちゃと飛び散らせ、不意打ちの激感に悶えていると、もう既に次の修道士が尻肉を抱え込んできた。

「シスター。次は私がお慰めしますよ」

「ふえええ？ はあああ、だ、だめ、もうちよつと、待っ……へはあああつ」

ぬぶぬぶぬぶつ、ずぶつ、ずぶつ、ずぶんっ!!

「はああああん♪」

過剰な悦楽が収まらず慌てふためく。だが菊皺が弛緩しきつてぼつこり開き

っぱなしになった後穴を再度満たされると甘い喘ぎが逆る。ジュリエッタは繰り返されるストロークに合わせて肛門を窄めて悦美を味わい始めた。

（この、ばか……。な、なに、お尻なんかに、挿入られ、て……）

ジュリエッタの気持ちよさそうな姿を見せつけられ、紅毛をツインテールに纏めた巡礼聖女が気の強そうな美貌をしかめる。

状況は余りに厳しかった。

ジュリエッタと競うように、膣と肛門にペニスを咥え込んで快楽を貪るメイド姿の不死者。ヨハンナ・クリューガーから発散される桃色霧は、並外れた催淫の威力を増してきている。

しかも呆れたことにその効力は術者本人にも影響を及ぼすらしく、ヨハンナは敵である巡礼聖女そっちのけで淫乱極まりない痴態を繰り広げていた。

（なんなんだ、こいつ。不死者のくせに、生意気に……、せつくす……）

「どうしたんですか、シスター・ジュリエッタとヨハンナちゃんをぼーっと見つめちゃって」

「もしかしたら羨ましいのかな？ シスター・レインもお尻とおまんこに俺らのを挿入て欲しい？」

「……!! そんなわけ、」

気がつくともまた、彼女らが快感に悶える様を凝視していた。修道士たちからかわれ我に返る。

「もうこんなにとろとろですからね。

これじゃ辛いでしょ」

「ひうっ! く……んうあ……」

分泌汁でぐちよぐちよになった下着の上から、膣口と尻穴の部分を指先でスリスリと探られる。不意打ちの快楽に膝立ちの太腿がカクンと揺れた。

「大丈夫。私たちは変に焦らしたりなんかしませんから。後ろはもちろん前もすぐに挿入して気持ちよくさせてあげますからね」

恐れの入りに交じった処女の血への渴望よりも、最強の巡礼聖女を散華させる喜びを優先させたらしい。

よろけるレインの身体を優しく抱き支えて、男はいきり立つ勃起肉を下着の上から股ぐらに押しつけてきた。

「くっ、あ、やめ……ろっ!!」

他の修道士たちも、躍動的な尻房を幾本もの亀頭で窪ませてくる。

熱い脈打ちに子宮が疼く。

「お前たちの、そんな汚らしい物、なんかっ、誰が挿入させるかっ!! お前から同士でしゃぶりあつてろ!!」

萎えた腕に力を振り絞って、修道士の抱擁を突き飛ばす。しかしレイン自身も勢い余りべたんと尻餅をついた。

息を荒くすると顔にへばりついた精液の生臭い匂いが鼻孔に流れ込んでくる。朦朧としかける意識を、血が出るほど強く唇を噛んで堪えた。

「あたしの膣内に挿入れようとしやがったら、お前ら全員、噛み殺してやる」

口の端から伝う鮮血をこれ見よがしに見せつけ威嚇すると、不死者と化した修道士が戸惑いを見せる。

こんな少量の血では不死者を滅ぼすに至らない。発情に苛まれながらもものしい刃のような気迫を見せたレインに圧倒されたのだろう。

「ほら、ダメですよ、ご主人様方あ。女の子なら初めては誰だつて怖いんですから、そんな皆さんで取り囲んで追い詰めるような真似しては」

「剣呑な気配にメイド不死者が這い寄ってきた。二穴から男根がにゅぽ、と抜けて男たちが残念そうな顔をする。『わたくしにお任せください、お嬢様あ。気持ちよく迎えられるようにしてあげますからね』

へたり込んで開帳する淫汁まみれの股ぐらへ、ヨハンナは顔を埋めてきた。

「んなあつ!! やめろっ、失せろ、この……ッ! へあッ」

蹴り飛ばしてやるうとしたが、指先で腰骨をなぞられ、こそばゆい痺れが走った。尻が浮き上がる。ジトジトに愛液の染みたショーツをにゆるにゆる滑りながら脱がされた。

「くう……うううっ!!」

途端に、むわんと、甘酸っぱく熟成した発情の香気が股ぐらから立ちのぼりレイン自身の鼻にまで届く。

（こんな……、あたしの）

己の肉体の弛み具合に驚き、恥じらいつつと屈辱に美貌を赤く染め菌噛みする

「ああ、殿方に汚されていない純潔の花園。美味しそうです」

色素の沈殿がない薄い色合いの陰唇



が、鮮やかな紅色を帯びて満開した。せわしくなく収縮を繰り返す奥穴から絶え間なく溢れ続けるねっとりとした欲情蜜は粘膜の谷間から溢れ、内腿までびっしょりと濡らしている。

その敏感な割れ目を、メイドの舌先がちゅろちゅろと舐め始めた。

「ふわうっ?! はわっ、はあ、ああっ」
陰部で弾けた灼熱が意識を弾き飛ばした。全身が溶け崩れるような危うい快楽が押し寄せる。

「そんなところっ、舐め……くふっ! あ、ばか、ああ、め、めくるなあ!!」
小陰唇を押し開きながら溢れ続ける愛液をすくい取り、粘膜部をなぞる。

「ふうむん、おつめたっふりれ、おいひいれしゅよ。きもひいれひよ?」
後ろ手に身体を支えてべったりと尻を床につき、膝を立てた両脚をMの字に押し開かれる。その股ぐらをじゅるじゅるとメイド不死者が吸い上げた。

(ツ——あ、あたしの、飲んでるツ!!
エッチな汁う。この、女あつ!)
舌が陰部で躍るたびに息が詰まるほどの快感が破裂した。

「ほらあ、こんなにやほこも、ピンピンになっひやっへましゅひよ」
窄めた舌先で器用に包皮を剥き下ろして、疼痛を覚えるほど張り詰めたクリトリスをリズムカルに転がしてくる。

「——ひアア?! そこイヤッ、はぐっ!! んあ、はああああ——ツ!!」
修道服がはだけた胸を突き出し、身体がくねくねと物欲しげに悶える。

その扇情的な様に興奮を昂らせた男たちが、レインを取り囲んで再び勢よく男根を抜き始めた。

「ひうっ、あ、ああっ!」
イカ臭い汚臭が脳裏をぼやけさせる。

「んふっ! おひんひんっ!! あふっ、ちゅぼっ! じゅぶるじゅぶるっ!! ずるっ、ずじゅじゅじゅう」
鼻にかかった喘ぎと下水が詰まったような異音にふと視線を向けると、騎乗位で下から尻を突き上げられるジュリエッタが、並外れた乳房の間にも極太陰茎を挟み込んで、上下に抜き上げながらその亀頭を唇を啜っていた。

「ふあり、ししゅたーれいん」
無邪気な幼児のような笑みで、亜麻色髪の巡礼聖女が淫液まみれの美貌をくしゃくしゃに弛ませる。

どびゅっ! びゅるぶびゅぶゅっ!!
大きく波打った肉勃起から大量のスペルマが噴射され、窄めた唇の隙間から溢れかえった。

ぶびゅびゅ、どびゅっ、どびゅぶじゅう——っ!
さらにはアナルをストロークするペニスまでもが、追い打ちをかけるように腸内を濃厚な精液で満たす。

「へあ、あ、おひりい。い、いい、いっばい、熱いのイッパイ、イイッ!」
白濁まみれになった愛嬌のある顔が生臭い風味に酔いしれ朦朧となる。

尻穴だけでもう何発射精されたらうか。ペニスが抜かれて白く粘った飛沫を飛び散らせる菊穴へ、間を置かず次の勃起が挿入され、抉るようなストロークでジュリエッタを悶えさせる。

(あんなの、挿入られて、簡単に落ちやがってえ。根性のない、新人……)
けれど彼女が悩ましく喘ぐたびに、グビリと喉が蠢いた。

「羨まひほうれふねえ、お嬢様も挿入ひやいまひようよ、おひんひん♪ もう何も考えられなふなうほる、気持ひいいれふよ」
肉体が求める欲望を見抜かれヨハンナがにこやかに誘ってくる。

「お前ら、なんかに犯されるくらいなら、自分で処女膜、破って、自決した方が……げふっ、ぐふっげはっ」
命をかけた覚悟まで告げるレインだが、言葉の途中で激しく噎せ返った。

顔面にぶちまけられた精液を啜り込んでしまい、それが乾いた喉に絡みついていて、咳き込むと青臭い異臭が鼻孔に抜けてくる。うっとりとなる牝本能を押し殺し、乱れた息を整えていると、ヨハンナが股ぐらから顔を上げる。

「ああ、わたくしとしたことがお飲み物もお出ししないで。喉が渴かれましてよね?」
こんな状況で喫茶店っぽいことをされるのと、むしろ違和感があった。

「あのお嬢様は紅茶とコーヒートとミルク、どれがお好みでしょうか?」
ピンクがかかったセミロングの髪へ、彼女が上体を起こしたのを幸いにと幾人かの男たちが抜いているペニスを

擦りつけてきた。自分からも頭を亀頭に擦りつけ上機嫌に口元を弛ませる。

「どっちも、お断り、だ……」
不死者に出された物など、どれほど豪華な料理であろうとまっぴらだ。

「そんなご遠慮なさらずに。でしたらミルクがお薦めですのでお持ちしますね♪」
どれほどつつけんどんな態度も、発情メイドには通じなかった。あくまでも愛想のよい笑みで応対し、そそくさと厨房へ向かう。さほど時を置かず、ほのかな湯気を立てる白いカップを銀のトレイに乗せて戻ってくる。

「お待たせいたしました、ご注文のホットミルクなのでさう」
漂ってくる甘い香りに魅惑されかけ心を引き締める。あんなもの何が混ぜられているか分かったものじゃない。(でも、飲み込まず口をすすぐだけだったら……)

口の中が精液の匂いでいっぱいだった。脳裏を蕩かす生臭さに、おかしくなりそうだ。

「それでは、ご奉仕いたします」
メイド服の不死者がわざわざ運んできたそのミルクを自分の口に含んだ。

何がしたいんだ? この馬鹿、と怪訝な眼差しを向けていると、細い眼をさらに細めて笑みを返してくる。

「んふ♪」
虚を突かれた一瞬、唇が重ねられる。

「——このっ! 何、をっ!!」
ぶにぶにと柔らかな肉厚の口唇は命

断末魔の叫びの主は果たして——!?

お姉ちゃん…



お姉ちゃん…

…か

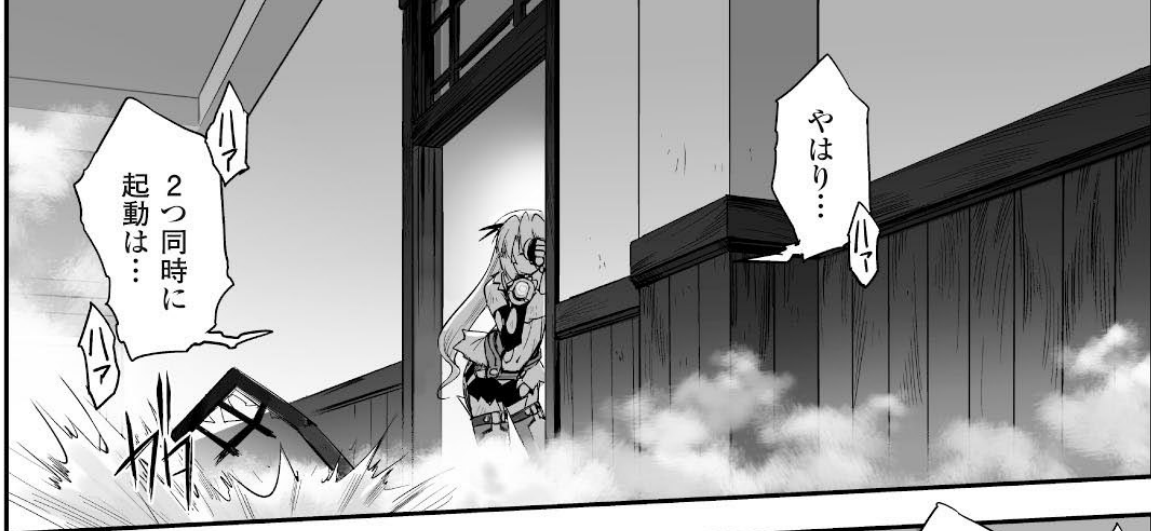
オオ

オオ



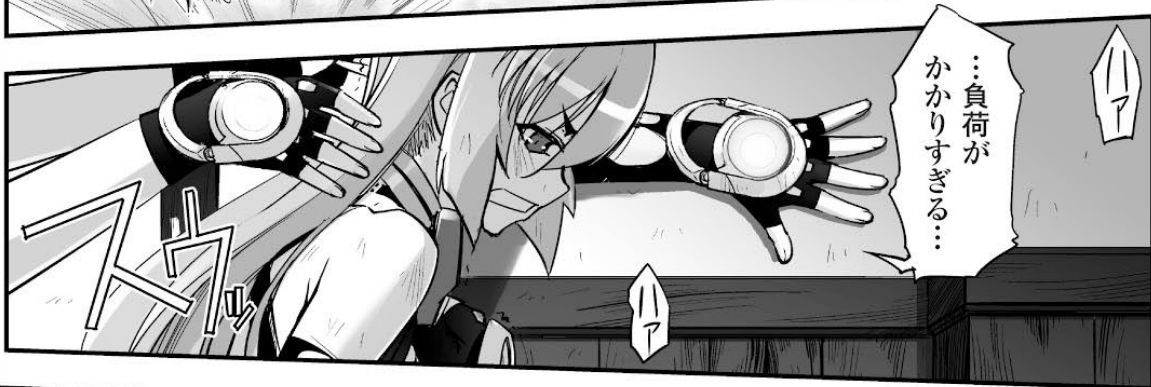


これは、異界より逃げのびてきた魔法少女たちと、彼女らを追う「魔女狩り」との戦いの物語。敵の黒幕・白亜に囚われたセツナを助けたイスカは、そのまま白亜の部下R・Bとの決戦に臨んだのであった。

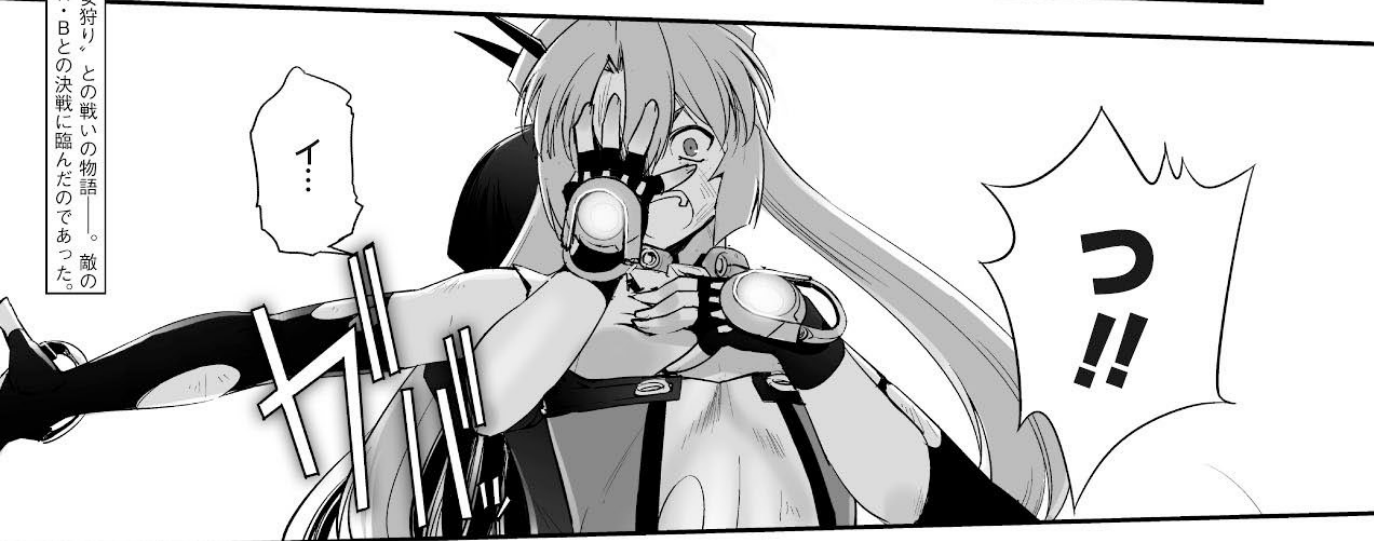


2つ同時に
起動は...

やはり...

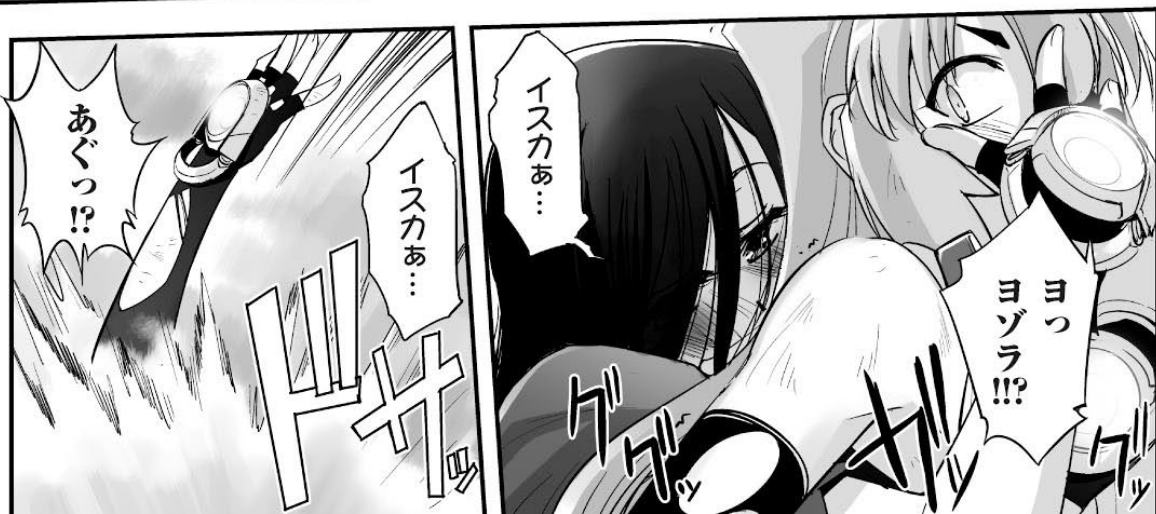


...負荷が
かかりすぎる...



クッ

?!



ヨッ
ヨゾラ!!!

イスカあ...

イスカあ...

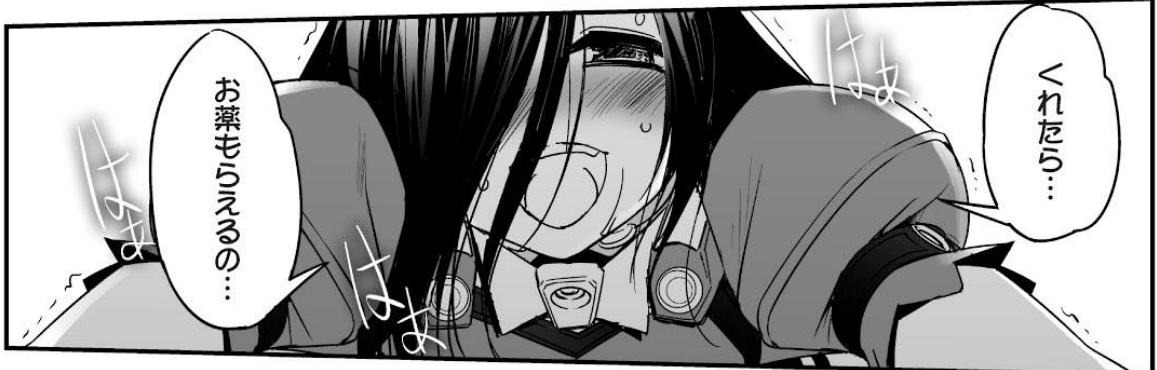
あぐっ!?



頂戴…

あぐっ!

イスカの魔石頂戴…



お薬せひんるの…

くれたり…



くっ!
んっ

あの魔族に!?



気持びいこ
お薬せひんるのお

又千



ううう

うううううう

!?

イスカの魔石

うううううう

アキ

あはっ

うううううう

や...め

正気に
もどれっ!



だめだ...

ちゅーって
したよ?



オマコ
ちゅーってしたよ?

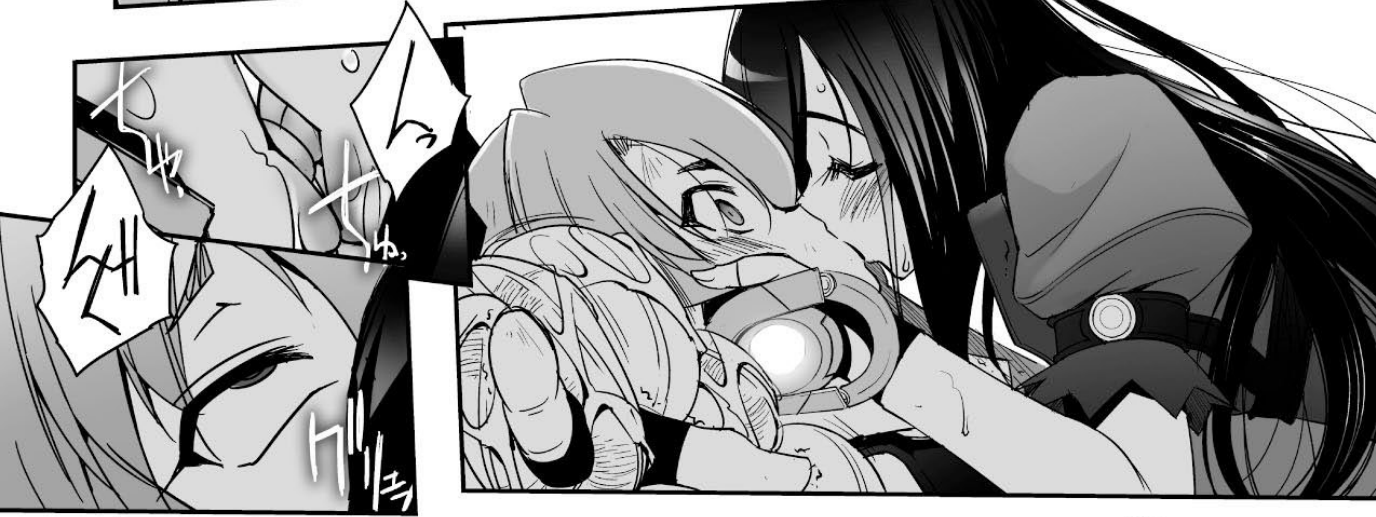
イスカのオマコ



完全に
操られている



ほら入ったよ?





こんな所で
仲良く休息中？



向こうには
加わらないの？

まあいいわ



クッ
クッ



サテユルメ
マグネシア

起動っ！



感じる

感じるよ
イスカのオマコッ

温かくて
きゆうたんってこ



今度こそ
魔女狩り
してあげる





てりゅっ!



てりゅっ
イスカの中につ



前毛後毛

てりゅっ
てりゅっ

槍姫千太郎

姫君の媚肉を陥落させる
淫靡な緊縛焦らし!

小説 NOVEL かぜときのうた
風鶴能太

挿絵 ILLUSTRATION **Moo4TT**

夜明け前。細い山道をくだる一隊があつた。二十人ばかりの足軽と、具足に身を固めた武士が四名。そして、一隊の中ほどには、杖をついて懸命に歩く禿髪の少女と、その母親らしき臍長けた女性。その背後を護るようにして、垂髪の根元を緋縮緬で結わえて腰まで流した若い娘。細身の袴を穿いて、小ぶりの槍を杖のかわりにしていた。不意に森が明るくなつた。振り返ると城が燃えている。おのずと脚がとまり、その光景を呆然と見つめる一隊。

「兄上は……討ち死にされたの？」
沈黙が、少女の問いへの回答だつた。少女は母親の胸に顔をうずめてすすり泣く。戦場で命のやりとりをしてきた荒武者も、居城と若君を失つて平然とはしていられない。声を殺して泣く者、ただぼろぼろと涙をこぼす者。槍をついている娘が、まっさきに我にかへつた。

「先を急ぎましょう。なんとしてでも、父上のもとへ参らねば」
母にすがりついている妹の手をとつて、むしろ自分を上げますようにいう。娘にうながされて、一隊は燃えさかる城に背を向けた。

化粧のない蒼ざめた細面の顔に、そこだけは紅をさしたようなぶつくりした唇を今は真一文字に引きむすび、正面を見すえて歩く娘。名を菊姫という。秋月家の長女で、来春には隣国の

相馬家へ嫁ぐはずだつた。

そして今、その相馬家の軍勢が城に攻め寄せていた。遠国にある主家筋の合戦に、秋月家は当主みずからがほぼ全兵力をもつて助勢した。その隙を、身内と信じて疑わなかつた隣国に攻められては、ひとたまりもない。
妹、菜々姫の手を引いて黙々と歩く菊姫。兄の死を無駄にせぬためにも父のもとへ落ちる。今はそのことだけを考へるべきだ。それは、わかっている。わかっているけれど……。

（あの、年賀の席でのお言葉は——詐略だつたのですね）

菊姫は、心に浮かんだ顔に呪詛の言葉を投げつけないではいられなかつた。隣国の相馬家から訪れた年賀の使者は、嫡子の高継——幼少の頃から定められていた菊姫の婚約者だつた。

初めてまみえる背の君。涼やかに切れあがつたまなじり。清冽な滝をおもわせる凛とした声。高継のかたわらにはべつて酌をする菊姫は、そのひとつひとつに心がさわいだ。

注がれるままに盃を重ねていた高継が、ひたと婚約者を見つめた。

「いつそ菊姫殿が、そこの百姓女であつてくれたらとおもうぞ」

あまりの暴言に菊姫の手が震えて、片口から酒が盃へこぼれた。

「百姓女ならば、今すぐでも連れ帰つて我が嫁にしようものを」

どつとさんざめく年賀の祝宴。菊姫は、頬が熱くなるのを感じていた。

高継は、そんな菊姫の手をとつて引き寄せた。酔いと若さで奔放にふるまう隣国の若君をたしなめる者はいない。菊姫の父にいたつては、かたわらでここに眺めている始末。

（私は菊姫殿に惚れた。なにがあるうと、一命にかえてもそなたを護る。安心して嫁いできてくれ）

耳元でささやかれる声に、酒臭さはなかつた。全身が熱く痺れて、その後ろのことを菊姫はなにも覚えていない。

「秋月家ゆかりの方々とお見受けする。降参なさるなら無下にはあつかわぬ」
森を抜けたところで、不意に声をかけられた。と同時に、一隊は二倍以上の敵に囲まれた。待ち伏せ。

城に内通者でもあつたのか。しかし、それを詮索している場合ではない。

「かかれえっ！」
二人の武士が供回りを率いて、槍ぶすまをめぐらす敵の正面へ突つこんだ。残る二人が、足軽に組ませた円陣に女人を庇つて、森へ逃げこもうとする。

敵が左右から円陣に殺到して、たちまち一角が崩される。その綻びへ、手柄にはやる雑兵が殺到した。

菊姫は妹を背後に庇いながら、左手を添えて槍を繰り出した。おのれの袖に邪魔されて槍は届かず、しかし勢いあまつた雑兵のほうから穂先を胸元へ迎え入れてしまった。

「ぎやあつ……！」
襷を掛けている暇はない。菊姫は左

身頃から腕を抜いた。大の男の掌にならずつぼりと包まれてしまいそうな乳房がひとつ、剥き出しになつた。

その間にも、しんがりを引き受けていた二人の武士が倒されて、円陣が潰されようとする。

「やあ！」
裂帛の気合とともに繰り出された槍は雑兵の胸を、こんどは確実に貫いた。（藁つとほどの手ごたえもない）

領主の娘が武器を執るのは、城が落ちるとき。狭い場所では振り回す薙刀よりは突く槍のほうが有利という父の考へで、菊姫は槍術を修めてきた。稽古で突いた藁束よりも簡単に、槍は人

体へ突き入つた。

さすがに怯んだ敵の虚をついて、今では十人足らずに減つた味方の足軽はじりじりと森へ退きつた。

「ええい、なにをしておる。足軽と小娘ごとき、一氣に押し包め」
部将に叱咤された雑兵が、槍をかまえて突進する。そのひとり菊姫が槍で迎え討つあいだに味方の足軽が二人倒された。

森へ逃げこめたのは数名の足軽と菊姫たちだけだつた。今は菊姫も足軽と肩を並べて敵と戦つていた。いや、菊姫ひとりが奮戦していた。かり集められた百姓がほとんどの足軽と、きちんと槍術を修めた菊姫とでは腕が違う。

多勢に無勢とはいえ、木々にはばまれた森の中では一斉に掛かることはできぬ。早い敵を突き、遅い敵には味方

が防いでいるあいだに二の槍を繰り出す。これが初めての修羅場とはおもえないほどに冷静な槍さばきだった。

しかし、五人突き十人退けるうちに、菊姫の息はあがり、槍がだんだんと重くなってくる。

「ぎやあつ……！」

はつと振り向く菊姫。菜々姫の生母、お鶴の方が、背後に忍び寄った敵に肩を割られていた。

「おのれ！」

駆け寄ろうとした隙に、菊姫は敵に組みつかれた。菊姫は石突（槍の柄）で敵を叩いた。が、非力な少女の打撃が通用するはずもない。

「きやあつ……！」

素手で殴られて、そのまま組み伏せられた。今や主戦力となっていた菊姫が欠け

ては、数名の足軽では抗しきれない。たちまち倒されてしまった。

「母上、死なないでえ……！」

修羅場の後の殺伐とした静寂の中に、幼い少女の泣き声が響く。

菊姫が引き起こされて、無理強いに重ねられた手首に縄が打たれようとした、そのとき。

「ちよっと待て」

敵の部将が声をかけた。

「片肌が脱げておるぞ」

その言葉で、ようやく。男に肌を晒している羞恥が菊姫によみがえった。「せつつかくた。もうひと肌脱いでいただこう」

部将は菊姫の前に膝をつくと、右腕も着物から抜き出してしまった。泥にまみれた左の乳房に並んで、雪のように白い右の乳房までが、明け初めた陽の下に剥き出される。

「な、なにを……むぐ……」

すばやく竹轡を噛まされて、菊姫は言葉が封じられた。

「小娘と油断して、とんだ目にあわされたわい」

菊姫の腕を背後にねじ上げて、部将は腰に提げていた縄で手首を縛った。さらに、首に縄をまわして引きしぼる。

「うぐぐ……」

腕を無理に引き上げられて、肩が痛い。が、腕を下げると自分の首を絞めることになる。いやでも手首を上げて胸を張っていなければならない。

二

「ほほう、これは……」

首実検の場に引き出された菊姫を見て、相馬高成はにやりとした。

誇示するように突き出された乳房をじっくりと眺める。じゅうぶんに丸みを帯びていながら、少女の風情を残している膨らみ。つんと上向いた薄桃色の乳房。

袴からこぼれるふくらはぎへ、高成の視線が移る。武芸で鍛えられて引き締まった下半身。

「風雅な花の活け方であるな」

高成は、菊姫を捕らえた部将をほめた。二十余名の損害を出した失態は咎

めない。

「まだ蕾とおもっていたが、なかなかどうして。七分咲きといったところか」

羞恥と憎悪で朱に染まった菊姫の顔を見下ろして、好色そうに唇を舐める高成。

「倅にはもつたない。僕が手折つてやろうぞ」

「むぐぐ……」

磔に架けられるか首を斬られるか。死ぬ覚悟はできていたが、身体を穢されるとはおもっていなかった。

「なんじゃ？ いたいことがあるのか？」

「むぐぐ……」

「竹轡をはずしてやれ」

「ですが……このように気の強い女子、舌を噛むやもしれません」

命じられた近習がためらった。

「自害したければ、させてやるわ。ただし……」

高成は菊姫にむかつて嗤いかけた。「おまえの妹に、僕の相手をしてもらうぞ。固い蕾をこじ開けるのも一興」

（卑怯な……！）

竹轡がはずされても、妹を人質にとられていては相手を罵ることさえはばかられた。

「ふむ。異論はなさそうじやな。僕にたっぷり可愛がりたいとな」

あらんかぎりの憎悪をこめて、兄を殺し父の領国を奪い取った仇敵を睨みつけたが、通じるはずもなかった。いや、通じたのか。菊姫は縛られた

ままで、裸馬の背を跨がせられた。

甲冑の軍勢に埋もれていた菊姫の姿が、遠目にもはつきりと晒された。

「戦っているときは鬼女かと見えたが、どうして。別嬪じゃねえか」

「顔もだが、あのおっぱい。ちよこつと揉ませてくれねえかな」

「姫さんよう。男を殺すのに槍なんぞ、いらねえんだぜ」

聞こえよがしの、雑兵どもの野次。

「こ、このような……」

抗議をしかけて、そこで言葉を吞んだ。いえば、いつその辱めを受けるやも知れぬ。自分だけなら、それを覚悟で存分になじつてもくれよう。舌を噛んで果てもみせる。けれど、妹ま

でがこのような目にあわされたら……

たとえ自分は恥辱にまみれようとも、父のほかにただひとり肉親となつた妹だけは護り抜いてみせる。前手に縛された身を騎馬武者に抱かれて鞍上にある妹の姿をちらと見た瞬間、菊姫は悲壮な覚悟を定めたのだった。

その日の行軍が終わるまで、屈辱の縄目を馬上に晒さねばならなかった。我慢の限界に達して下の用を訴えようと縛めを解かれたが、そのかわり、衆人環視の中で尻をからげて小川にしゃがむという屈辱がつけ加わった。

仇敵に乙女の操を踏みにじられることをおもえば、下賤の者どもに隠し所を見られるくらい、たいしたことではない。そう自分に言い聞かせはしたも

の。いざとなると、ひと滴さえも出なかった。脂汗を流し、ついには我が手で下腹を揉んで、ようやく欲求を身体に認めさせたのだった。

「あれこそが、最大の試練だったのではないかしら？」

夜も更けて、縛められたまま、宿營地の奥に張り巡らされた幔幕の中で、毛氈に引き据えられて、陵辱のときを待たされながら、ふと菊姫はおもった。

「辛抱せい。すぐに気持ちよくなる」

おのれの意志で醜態を晒すわけではない。仇敵に肉体を弄ばれる悔しさを耐え忍んでいれば、夜は明ける。そう自分に言い聞かせて、菊姫は未知への恐怖を克服しようとしていた。

「どうにも潤いが足りぬ。生娘なればべつと唾を吐く音。同時に、生ぬるい感触を菊姫は股間に感じた。蠢く指が、その感触を奥へ塗りこめてくる。」

やがて――突き出た腹を鎧下に包んだ高成が、菊姫の前に立った。

「い、いや。そのようなところを……」

「そう怖がらずともよい。おとなしくしておれば、極楽を味わわせてやるぞ」

「いやっ……恥ずかしい！」

菊姫の背後にまわり、縄尻をすいと引くと、手妻のように縄がほどけた。

「痛いっ……！」

ほうつと菊姫は息を吐いた。痺れた指先で衣服をととのえようとした。が、その前に押し倒された。

「痛いっ……！」

「二度手間をかけさせるな」

「でも……それが、これだなんて」

押し倒され、乳房を揉みしだかれる。

「馬鹿め！」

（痛い……）

「この苦痛が羽化登仙の心地につながっているなんて、信じられなかった。」

苦痛に息が詰まった。

「高成は、そんな菊姫の心中には無頓着に。突き挿れたあとには武者羅に荒腰を使い、短い呻きとともにおのれの」

「ひやっ……」

「高成は、そんな菊姫の心中には無頓着に。突き挿れたあとには武者羅に荒腰を使い、短い呻きとともにおのれの」

欲望を菊姫の中へ吐き出したのだった。

三

翌早朝に、ふたたび菊姫は半裸で後ろ手に縛られて馬上に晒された。股ずれを悪化させぬためと称して袴を許さず、左右にははだけた小袖の裾は太腿のほとんどを露出させていた。だけはなく――。

妹の菜々姫とともに、菊姫は城中の奥向きに幽閉された。八畳の座敷だが、廊下とのあいだは襖ではなく、角木の格子で仕切られていた。

高成は「茶筒」と形容されるほどの巨根の持ち主だった。そんな男に貫かれた菊姫の秘所からは出血がつづいていた。白い内腿に伝い落ちる鮮血までも、人目に晒さねばならなかった。

「わたしは、人質にされたの？」

軍勢は中食を使わずに行軍をつづけて、昼下がりに居城へ帰着した。

「わたしは、人質にされたの？」

甲冑姿の高成を出迎えたのは留守を預かっていた相馬高継。凱旋を迎えるにはふさわしからぬ仏頂面だった。

「わたしは、人質にされたの？」

弱肉強食の乱世、面従腹背は世の習い。裏切られるほうが迂闊――と、父のように割りきれぬ。

「わたしは、人質にされたの？」

そんな高継であつてみれば、見世物同然に引き回されている菊姫を見て、黙ってはいられなかった。

「わたしは、人質にされたの？」

「今は敵といえど、ひとたびは我と仲を言い交わした娘。このような無体な仕打ち、あまりでございませう」

「わたしは、人質にされたの？」

「馬鹿め！」

「わたしは、人質にされたの？」

それが、高成の答えだった。

「わたしは、人質にされたの？」

「このような娘、もはやなんの価値もないわい。おまえには、もつとふさわしい嫁を見つけてやる」

「わたしは、人質にされたの？」

「高成は、そんな菊姫の心中には無頓着に。突き挿れたあとには武者羅に荒腰を使い、短い呻きとともにおのれの」

「わたしは、人質にされたの？」

妹の顔がくしゃつとゆがんだ。泣き崩れる寸前の表情だ。菊姫は夜具の端をそつと持ち上げた。仔犬のように転がりこんでくる妹。

「でも、大丈夫。あんな禿げ達磨に、誰がなびいたりするのですか」

高成の容姿への痛烈での確な嘲りに、くすつと笑う菜々姫。

菊姫は、妹をぎゅつと抱きしめた。腹違いの妹。今となつては、父のほかはただひとりの肉親。我が身にかえても護り抜く。必ず……

しがみついてくる妹の背中をやさしく撫でながら、決意を新たにする菊姫。疲れきっていた姉妹は、抱きあつて深い眠りに沈んでいった。

束の間の安息は二夜とつづかない。

その夜。菊姫は湯浴みを命じられた。二人の下女が世話についた。秋月城での湯浴みと同じようであり、まるで違う。下女は湯が熱くないかと気づかうこともなく、乱暴に肌をこすつた。

菊姫はされるがままになつていたが、着替えの衣服には眉をひそめた。膝丈の腰巻と肌襦袢。それだけだった。

菊姫は下着姿のまま、寝所まで連れていかれた。

広い寝所は四隅に配された灯台の明かりだけではなく高価な蝋燭までもとされて、まぶしいほど明るかった。

そして部屋中央には、一昨夜の毛氈とは比べものならぬ絹羽二重の豪華な夜具。

（わたしにとつては、同じこと）

いずれも処刑台に変わりはない。菊姫は端座して、処刑のときを待った。

――廊下を足音が近づき、寝所の前でとまった。襖が開いて、閉じる。

高成はさつきと下帯一本になつて夜具の上に菊姫を引き寄せた。

「そう怖がるな。先夜は僕も気が荒ぶつていた。今宵はじっくり可愛がつてやるほどに」

あらがうふうもなく横たわる菊姫の肌襦袢がはだけられて。ちよんと乳首をつつかれた。

（……………）
背筋を悪寒が駆けのぼつた。というのに。くすぐつたいような感覚が乳首をしこらせていた。

「ふふ。身体は正直なものよ」

高成は乳房を掌で包んで、弾力を愉しむかのように揉みしだく。

乳房がお手玉のようにひしゃげ、泥団子のようにこねくりまわされる。

頑なに心を閉ざした菊姫にとつて、その愛撫は芋虫に這いずりまわらわっているのも同然だった。それなのに、ますます乳首が硬くなつていく。

「ふふふ、ふ」
淫蕩な笑みとともに高成の指が、菊姫のなだらかな腹を撫でおろして。

「おまえの情が薄いのは、このせいかな？」
腰巻を掻き分けて、産毛が濃くなつたほどの纖毛を指に絡める。

「それとも、ここをかまつてもらえな

くて拗ねておるのか？」

纖毛の奥に顔をのぞかせている蕾を、指の腹で英ごと転がす。

「くふ……ん」

激痛……のようであり微妙に違う、どこか甘やかな衝撃が股間から尾てい骨へ突き抜けた。

「ようやく声を出してくれたな」
指はさらに下へと進んで、蕾の下の秘裂をくじつた。

「おや？ こちらも、なかなかじゃ」
刺激を受けた肉体は菊姫の意志を裏切つて、男を迎え入れる準備を始めていた。そうと知つて、高成の指の動きが激しくなる。

「んぐ、ぐ……」
一昨夜に初めて貫かれたばかりの娘にとつて、それはひたすらの苦痛だったが。仇敵に赦しを乞ふことなど、菊姫は思いつきもしない。

仇敵の陵辱に耐える。その思念は、わずかに潤いかけていた肉体を急速に乾かしていった。

「ええい、情の薄い女子じゃ」
菊姫の股間に顔を寄せて、べつと唾を吐きかける高成。それを、ぐりぐりと秘裂に塗りこめていく。

（あ……また！）
一昨夜の悪夢をおもい出す菊姫。だが、嫌悪の言葉を呑みこんで耐えた。

貫かれる激痛は、一昨夜と変わらなかつた。激しく深く突き挿れられ、荒々しくこねくりまわされ。肉壺の中に禍々しい欲望が放たれるそのときまで、

菊姫は耐えつづけた。

その二日後にも。菊姫は夜伽を命じられた。

「今宵こそは攻め落としてくれるぞ」
菊姫を夜具の上に仰臥させて、自信たつぷりの高成。両手に細い筆と薬壺を持つていた。

「股を開け」
なにをされてもかまわぬ。とつくに覚悟はできている。でも……自分から、そのようなはしたない真似が、できるはずもなかつた。菊姫は小さくかぶり

を振つた。

「僕のいうことが聞けぬか。菜々姫なら、姉よりは聞き分けがよいかも知れぬな」

「だめっ！」
菊姫は跳ね起きた。

「菜々は、まだ子供です」
「ほほう。初めて、まともに口を利きよつたわい」

髭の中の唇をゆがめて、高成が薄く囁つた。

「おまえは、もう子供ではない。どうすればよいかわかる歳じゃな？」
菊姫は目の前の男を睨んだ。が、猥欲に濁つたまなざしに跳ね返されてのろのろと身体を横たえ、脚をわずかに開く。

「もつとじゃ」
ぴしゃりと内腿を叩かれて。意を決して一尺ほど膝を開いた。吹き上げ

る羞恥に、顔を手でおおう。

「くちゅ……ぐちゅ……」

股間に冷たい感触。あの小さな壺の中身を筆で塗りつけられている。

「唾よりは、ましです。でも、なぜそこを……?」

筆は秘裂の縁をめぐっていた。それがぐるりと一周した頃。

「あ、熱い……」

熱いようなむず痒いような奇妙な感覚が、そこに生じた。生まれ初めて体験する、奇妙な感覚。戸惑っているうちに、熱くむず痒い感覚は腰の奥まで広がっていく。

「あ……このような……なぜ……?」

仇敵に罵られていることも忘れて、菊姫は腰をもじつかせた。

「どうじゃ。たまらぬであろう?」

筆が秘裂の内側を舐めた。

「あ……ひい……」

菊姫の呻きは、だんだんと喘ぎに近づいていく。

けつして不快ではなく、もつとつづいてほしい、この感覚。しかし、この感覚に身をゆだねるのは、仇敵に屈服するに等しい。

筆から逃れようとして、菊姫は身をうつつ伏せた。高成が腰に手をかけて引き戻す。そんな攻防がひとしきり。罅が明かぬと見た高成は、後ろ向きに菊姫の上へ馬乗りになろうとした。

氣力を振り絞って、菊姫は男の背中に押し返した。腰を浮かせていた高成は、もんどり打って転んだ。

「このじゃじゃ馬め!」

立ちあがった高成は、長押しに架けてある槍をつかんだ。

「僕のいうことは聞けずとも、槍となら仲良くできるのであるう」

手早く下帯をほどき、それで菊姫の足に槍の柄を結びつけようとする。

（あ……!）

菊姫は相手の意図に気づくと同時に、

しやにむに槍を奪い取るうとした。

つかかってくる菊姫を、高成は無雑作に叩き伏せる。

「女悦膏で腰を抜かしたとおもっていが。しぶといの」

菊姫の腕を背後にねじ上げておいて、

あたりを物色する高成。縄のかわりに

なりそうな物は……

「このような……いやです。ほどういでください!」

自分の髪で手首を縛られて、菊姫は

狼狽の声をあげた。首縄よりも屈辱だった。

大きく脚を割られて、もう一方の足

首が槍の柄の反対側に縛りつけられた。

髪にひっぱられて天井しか見えない菊

姫だが、自分がどれほど恥ずかしい姿

にされているかはわかる。

「このように女子を辱めて……鬼、人

でなし!」

仕返しがあるとわかっていても、罵

らないではいられなかった。

「ふふ……せいぜい強がつておれよ。

濡れ壺を僕の極太魔羅で掻き

まわしてくださいと泣いて願うことにな

るぞ」

「誰が、そのような!」

くちゅ……」

また、あのいやらしい感触。

「花びらも丹精してやらねばの」

秘裂に埋もれた花弁の輪郭を筆でな

ぞられて、菊姫の腰がびくりと跳ねた。

ひと塗りごとに、熱いむず痒さが激

しくなる。

（いや……痒いっ!）

痒いのに熱いのに……外からの刺激

に呼応するかのようになり、腰の奥が熱く

なつてゆく。

「そうそう。蓄も愛でてやらねばの」

くりんと……秘裂の合わさる上端で、

蓄を強引にめくられる感触があった。

「痛い!」

一瞬の痛覚があつて。

「いやあ……!」

筆先につつかれて、腰が砕けそうに

なる錯覚が生まれた。蓄の芯に圧倒的

な痒さがしみこむ。

「ひ……いやあ。もう……やめて」

尻でいざつて逃れようとしたが、筆

はゆつくりと追いかけてくる。菊姫は

壁際へ追い詰められた。

「やめてくださいっ!」

筆が肉壺に突き刺さった。ずぶずぶ

と奥へ埋もれていく。

「いやあ……痒い、熱い、くすぐ

りたい……赦してください!」

腰をくねらせながら、顔を真っ赤に

して菊姫が訴える。仇敵への意地など

消し飛んでいた。

おもうさま、そこを掻き筆りたい。

それだけが菊姫の欲求だった。手の自由が利かぬなら、目の前の男に……筆

よりも硬いもので罵られても……

「どうしてほしいのじゃ。素直にいう

てみよ」

菊姫は歯を食いしばって、頭を左右

に振った。声を出せば……なにを口走

るかわからなかった。

「ふうむ。丹精が足りぬか」

高成は蜀台から蠟燭をとって、塗り

残した箇所はないかと目を凝らす。

夢中になるあまり蠟燭が傾いて。

「きやあつ!」

内腿に蠟滴が垂れて、菊姫は叫んだ。

ふと顔を上げる高成。

「今までで一番の啼き声じゃったな」

高成の中で、新たな淫欲が鎌首をも

たげた。こんどはわざと、鼠蹊部を狙

って蠟を垂らした。

「熱いっ!」

はつきりとした悲鳴——は、鼻先に

蠟燭を突きつけられて途切れた。

「あ……や、やめて……」

菊姫の眼前で蠟燭が傾き……蠟涙が

垂れ落ちた瞬間、乳首を灼熱が貫いた。

（ぐっ……）

唇を噛みしめて、菊姫は悲鳴を呑ん

だ。泣き叫べば加虐者を悦ばせるだけ

と、菊姫はすでに悟っている。しかし

……耐えれば耐えるほど嗜虐の炎を煽

るのだとまでは気づいていない。

二度三度と蠟を垂らされて。唇を噛

み破つて、口中に血の味が広がる。

「しぶといのう。やはり、こゝか……」



おなかの中
こじあけてるう

いいぞ
サキユバス!

お前の子宮は
まだ肉壁が濃い粘液で
ピッタリ閉じてるじゃないか

うっ

かったいおチポ
入ってきでる——っ!!

新品同然だな

あっ

ココもチポをしごく為の
穴に変えてやる!

あーっ

子宮まで犯されたマーニヤ

前回までのあらすじ ●天界と魔界を救う力を得たマーニヤだったが、拘束されて胎内を犯されてしまう。

チポが
子宮の行きどまりを
叩いてるのが
わかるか!?

腹の中の聖水が
揺らされて
たまらないだろ!?

むき出しの膣から
まんこ汁が
にじみ出てきてるぞっ

マーニヤの最後の光

【サキユバズディストーション】
好評発売中!

漫画 おおただけし

出させてっ

おなか
苦しいですっ

せいすい
もうガマン
できないっ

いくぞっ

子宮の中に
直に
出してやるっ



お前も
いつしよに
出して
みろっ

あひやああつ

出る

っ!!

いやあつ

まだ出てるのに
いっ

まだ苦しみ
足りない様だな

やつ

…ちっ

い
きむむむむ

うっへっ

あつあつ

あつあつ

あつあつ



ふ……うぐーっ

何だスゴいな

この腰の動き……

カウダ
身体はいつてるのに
頭の中はまだ
ガンバってるのか

ち……

どこまでも
手こずらせて
くれるね

もうボロボロ
じゃないか

ひいつ

なあ

ミラルエル!!

まだウロウロ
してたのか

く……っ

そうだ……
たしか
こんな触手
だったかな

さあ
見ものだぞ
ミラルエル

まあいいさ
せっかくだから
立ち会ってくれ
ボクが神の力を
手に入れる所にね!

お前が
耐えられなかった
触手だ
コイツを今から
サキュバスに
プレゼントしてやる!!



そんな事...

チ...

させないっ!

自分で慰めながら
おとなしくしてろ!

あっ!!



あわわっ

だっ...
ダメええ——っ!!

たっ



またせたな
サキユバス

は...っ!

くうらっ

まずは
乳首から...

地獄を
味わわせて
あげるよっ!

イセリア 英雄戦記

the legend of the Aecra war

第9話 顔魔のアヴァルス

いしほよしかず
小説 NOVEL 斐芝嘉和
ぼたん
挿絵 ILLUSTRATION 牡丹

護衛の氷継とともにアヴァルス経由で、
イセリアへの道を急ぐセリーヌ。
しかし死霊と吸血鬼メイヴェンが道を阻む！
**羞恥&スライム流腸が
女騎士と女執事を責める！！**

風に削られ草木に食い散らかされた古の都・アヴァルス。石畳の街路は胸の草に覆われ、教会の屋根を突き破った巨樹が骨色の枝を広げ——今にも森に飲み込まれそうな廃墟の街だが立ち込める死臭は生々しい。

「ッ！ また新手か……！」

「ここは我々にお任せください！」

立ち止まるセリーヌ、その脇を擦り抜けて突進するフェイエンの兵。

鋭く振るわれた戈が、行く手の四つ辻からゆらりゆらりと現れた半死人の首をあつさりとはね飛ばす。

しかし、半死人は死霊に憑かれることで死を禁じられた存在だから、その程度では止まらない。体当たりして突き倒しても、すぐにヨロヨロ起き上がるようにする。

「無駄だ、捨て置け」

なおも打ちかかろうとした兵を諫め、セリーヌは漆黒の剣を構えた。

半死人を完全に倒すには、火で焼くか、魔法を打ち込むしかない。剣に魔法を込められるセリーヌの敵ではないが、同行している氷継やフェイエンの兵たちにとっては倒しても倒してもキリがない存在で、精神的にも肉体的にもかなり疲労している。

しかし、これでもまだ最悪ではない。半死人や魔物は夜にこそ活性化するから、陽がある今は比較的楽なのだ。

氷継たちの体力が尽きる前に——そして、行く手に傾いている太陽が地平線に没する前に、

（この街を抜け出さないと、さらに厄介なことになるな……）

——そうしている間にも、櫛櫛の虚ろな眼窩に似た窓や冥府に繋がっているような暗い戸口から、襦袢を引きずる半死人たちが溢れ出してきた。ちまちま倒していったのではキリがない。

「申し訳ございません、私はこちらの道をお奨めしたばかりに……」

「気にするな、氷継。クレオラの監視網を避けてイセリアに戻るには、ここを通るしかないからな」

アイマスキに黒眼鏡をかけた男装の麗人に微笑みを返し、セリーヌは呼吸を整えた。愛剣の重みを無意識に確かめつつ、魔法の威力を調整する。

イセリア英雄公国の数少ない友好国・フェイエン武踏会と新たな同盟を結んだのは、一週間前。その時点でフェイエンはすでにグラマトン聖教会と交戦状態にあったのだから、王の片腕ともいべき氷継と六人の兵を貸してくれただけでも感謝している。

危機に陥っているフェイエンにとどまり、助力しようかとも考えたのだが、皇女フィオナが対魔術戦闘に長けた第七騎士団を送ってくれたという連絡を受け、イセリアに戻ることにした。セリーヌは外交官である前に、第一騎士団の長なのだ。異国にひとり残つてもできることは少ないし、イセリアの防衛も疎かにはできない。

問題は、クレオラ砂漠都市が敷いた監視網。セリーヌが袖にしたジュダ王子はどうか、子はどうやら蛇のような性格だったらしく、主要な交易路には多数の追っ手が放たれていた。その裏を掻くには、人々の記憶から忘れられて久しい旧街道——フェイエン北方の森を抜けて滅びの都・アヴァルスを經由し、北東側からイセリアに至る道を通るしかない。やや遠回りにはなるが、あのいやらしい王子と再会するよりはずっとマシだ。

しかし、滅びの都・アヴァルスにこれほど多数の半死人がいたのは、完全に予想外だった。四百年前に滅んで以降、禍々しい伝説に彩られたこの街に、好んで近づく者はいないはず。メイズVの封印も解かれたまま、夜毎に魔物が溢れ出しているから、強欲な墓荒らしでさえ寄りつかないのに——。

（……よし、集まったな）

前方から迫ってくる半死人の群れを見渡し、セリーヌは思考を中断した。

動きは鈍いが数の多い半死人の包围網を突破するには、一度の魔法でより多く倒さなければならぬ。だからあえて足を止め、ある程度の数が集まるのを待ったのだ。

頬の肉が溶け落ちたり腐った目玉を垂らしたりした半死人は、およそ百ネズミに食い荒らされて骨が覗いた腕をセリーヌたちへ差し伸べて、前から

も、左右からも、そして後ろからも——ゾロリ、ゾロリ、と迫ってくる。

「みんな、私の後ろに。正面の半死人を吹き飛ばす。道が開いたら一気に駆け抜ける！」

氷継たちに目配せし、領きを得たセリーヌは、手に馴染む黒剣を一旦腰の鞘に納めた。

前方を見据えたまま柄を軽く握り、歩を広げて腰を落とす。

鼻から息を吸い、蓄勢。

（まだ……まだだ。まだ遠い）

攻撃効率を可能な限り引き上げるため、セリーヌは逸る気持ちを抑えた。

一步、また一步——死臭を纏った半死人がジリジリと迫り、長槍の間合いに入る。まだ遠い。さらに一步——。

（もう一步……今！）

転瞬、引き絞っていた弓弦を放つように、ロイヤルブルーの髪を靡かせてセリーヌが前へ。

「——ライトニングエッジ！」

叫びざま、黒剣を横薙ぎに鞘走らせ

て——シユバアツ！

一瞬にして千里の血路を切り開く、ブーメラシ型の白光。

すぐ間近まで迫っていた半死人たちの上半身は瞬く間に焼失し、その後ろに連なっていた無数の人影もひととめに吹き飛んだ。開けた視界の遥か彼方に、街の終わりを示す門の上端が僅かに見える。

「よし、行くぞ！」

叫んだセリーヌを先頭に、氷継と六人の兵が走り出した。朽ちた荷車を踏み越え、倒れた塔を迂回して——。

（あとどれくらいだ？ 氷継たちはまだ走れるか？）

足を止めぬまま仲間の様子を気遣おうとした女騎士は、次の瞬間、「ッ!!」

慌てて立ち止まって漆黒の魔剣を宙に振った。視界にパッと散ったのは、一輪の薔薇——そして舞い散る花びらの向こうに、無表情な少女を数人従えた白面の貴公子。

古い意匠の夜会服を纏っているが、半死人ではない。頬に血の気こそないものの、男の背に広がる銀髪は輝かしく、赤い眼には意思の光がある。

「誰だッ!!」

「それはこちらのセリフです。我が庭を騒がし、あまつさえ我が兵を魔法で打ち据え……無礼にもほどがあるというもの」

ヌラリと赤い唇をいやらしい笑みの形に吊り上げた男は、薄い胸を偉そうに張って自己紹介を始めた。

「我が名はメイヴェン・ネルクバイル。グラマトン聖教会との契約により、この地に館を構えし者——まあ、わかりやすく言えば吸血鬼です」

「吸血鬼、だと……? それがなぜ、グラマトン聖教会と契約など……?」「彼らに智恵と力を貸す代わりに、彼らが狩り集めた異教徒を譲り受けているのです」

——ぞくり。

楽しげなメイヴェンの言葉を受けて、セリーヌの背筋が不意に冷えた。

倒しても倒してもキリがないほど大量にいる半死人は、この男がグラマト

ン聖教会から譲り受けたという異教徒たち——吸血鬼の食料にされた上、死ぬことすら許されず奴隷にされてしまった生け贄たち。

「ひどい……」

「おや、心外ですなあ。貴女たちとて牛や豚を屠り、実をもちで食すでしよう? それと同じですよ」

「違う! 彼らを死なせぬお前は、他の命を弄んでいるのだ!」

ギイインッ!

夕闇に包まれ始めた廢墟に、耳障りな音が響いた。怒りに任せて振られたクラウソラスが、その切っ先から未精練の魔力を吐いたのだ。

草に埋もれた石畳が一気に捲れ、微塵に砕けて砂埃と化す。辛うじて形をとどめていた廢屋も、余波を受けてガラガラと崩れ——。

しかし、薄く笑ったメイヴェンとその周りにいる少女たちは、まったくの無傷だった。そればかりか、吸血鬼の笑みが嬉しそうに深まる。

「おお、素晴らしい! 先ほどの雷光でもしやと思いましたが、本物のクラウソラスではありませんか!」

「ッ!!」

「それに、今発せられた魔力……懐かしい音色です」

「な、何を言っている……くっ!!」

遠く離れていたはずの白面が、いきなり懐へ飛び込んできた。

(速い……ッ!)

長いクラウソラスを振りかぶる余裕

はなく、鋭く突き出されてきた貫手も剣で受ける。流れて倒れそうになる身体を超人的な脚力で宙に飛ばし、崩れかけた廢屋の屋根へふわりと着地。

「おっと。逃がしませんよ」

ニヤついた吸血鬼は慌てることなく、滑るような動きで追いつがってきた。

(コイツ……できる!)

ナヨナヨとした外見からは想像もつかないほどの手練だ。瓦礫から瓦礫へ飛んで間合いを作ろうとしても、一向に引き離せない。足を止めて剣を振っても、蛇のように身をくねらせて紙一重でかわされる。

「さあ、さあ! 他にどんな技が使えますのです? 出し惜しみせず、私に見せてください!」

「ちい……ッ! ナメるなッ!」

踏み込みつつ擦り上げ、飛び込むようにもう一撃。

どちらもやはりすんでかわされてしまったが、セリーヌの狙いはほんの数秒、数歩分の間を得ること。

「悪足掻きとはみつともな……ッ!!」

ハッと息を飲む吸血鬼の眼前で漆黒のクラウソラスが赤く輝き——。

「インペリアル、ダイブッ!」

ガガアア——ンッ!!

物理的衝撃を伴う雷鳴を轟かせ、渾身の一撃が炸裂した。吸血鬼を切り裂いた刃の延長線上、夕陽に染まる廢屋数軒が、巨大な龍に食い千切られたようにゴッソリ丸くえぐれて消える。

(どうだッ!)

漆黒の剣・クラウソラスに魔力を込めて増幅し、一気に打ち込む必殺技だ。いかに手練の吸血鬼とて、真正面から受ければ無傷ではいられないはず——しかし。

「ククク……フハハッ!」

「ッ!!」

狂気を孕んだ高笑いにハッと振り返った瞬間、額に白い指を突きつけられた。構え直す間もあらばこそ、

「はうっ!!」

眉間から爪先へ駆け下る、鋭い電流。素晴らしい、実に素晴らしいッ!

魔力を吸収できない低級な魔物ならいざしらず、私のように高級な闇の者に闇の力をぶつけても意味はありませんが、威力だけは本物ですなあ! その力が私にいたたましましょう!」

(や、闇の……力? 私の魔力は……闇、な……の……?)

メイヴェンの耳障りな哄笑を聞きながら、セリーヌは意識を失い——。

* * *

——気がつくと、薄暗くて微臭い地下室にいた。

「く……」

枷を嵌められた手首が頭上で交差し、梁から垂れる鎖に高々と吊り上げられている。伸びきった肘と肩が、自らの体重を受けてミシミシ軋む。

(いったい、何がどうなって……)

ぼんやりした頭を振って、まずは身

体の状況を確かめた。左足は辛うじて地に着いている。しかし右足は膝に繩を巻かれ、横へ開きながら腰の高さまで吊り上げられていた。

鎧は無事だが、尻肌を微風を感じる。丈の長いスカートの下、着けていたはずの下着を取られているのか――。

(……怪我はしていない、問題ない)

自分の状況を良好と判断したセリアは、続いてカンテラが照らす地下室に視線を巡らせた。広さを測りつつ出口らしき階段を確認し――。

「ひ、氷継!!」

寝椅子に横たえられている氷継と、その周辺に木偶のように突っ立っているフェイエンの兵たちに気づく。

「み……見ないで……見ないでえ!」

氷継の上擦る哀願は、セリアではなく兵たちに向けられたモノ。四六時中着けているアイマスクを、今は剥ぎ取られているのだ。

幼いころから一度も可愛いと言われたことがなく、それを恥じてアイマスクを着けているそうだが――歪んでいてもなお美しく細い眉、高く真っ直ぐな鼻梁、形よい唇。同性のセリアでさえ思わず見惚れてしまうほど整った顔立ちだ。可愛いと言われなかったのは、おそらく、子供の頃から美しすぎたせいだろう。

理由はどうであれ、氷継は己の顔を恥じ、見られることを極端に嫌う。

なのに、今――揺れる灯火に素顔を晒し、目を血走らせた部下たちにジロ

ジロ見詰められている。

「お願い、見ないでえ……!」

ストラックスに包まれたスマートな脚を振らせ、必死に摺りあわせているのは、ほどよく引き締まった身体を寝椅子にくくりつけられているからか。

両腕は軽く折り曲げられ、頭の左右に革のベルトで固定されている。肩と腹も拘束されていて、イヤイヤと首を振ることしかできない。

「しっかりしろ、氷継! お前たちも……見ないで助ける!」

両手を吊られたセリアが叫んでも、フェイエンの精鋭たちは振り向かなかつた。声など聴こえぬように身動きさせず、啜り泣く氷継をジッと見詰めて続ける――と。

「彼らに責めるのは酷ですよ。私の術で、瞬きひとつできないのですから」

視界の端にフツと、銀色の髪が揺れた。慌てて顔を向けると、真紅の薔薇のにおいを嗅いでうっとり眼を細めたメイヴェン。

(こ、こいつ……いつからいた!?)

声をかけられるまで、まるで気配を感じなかった。白面の貴公子だけでなく、その腰にまとわりつくようにしている無表情な少女たちも、つい先ほどまではいなかったはず――いや、そんなことはどうでもいい。

「活きのよい餌が欲しいなら、私ひとりで十分だろう!? 彼女を放せ!」

血を吸わせるつもりなどもちろんないが、とにかくセリアは叫ぶ。

(今は動けないが、このままでは済まん。隙を見て、もう一度……)

そのためにも、氷継ではなくこちらへ吸血鬼を引き寄せておかなければならない。

しかしメイヴェンは挑発に乗らず、「おふたりとも、私の好みよりやや歳を取りすぎていますが、こちらのお嬢さんは鳴き声が良い」

寝椅子にくくりつけられている氷継へゆっくりと寄った。

「ひ……あ、ああつ!? やめて、ダメ、触らないでっ!」

青ざめて身を強張らせる麗人の、柔らかな腹にソツと手を触れ――。

「はっ!? ううっ!」

どんな魔法を使ったのか、しっかり閉じあわされていた氷継の脚がいきなり力を失ってクタリと伸びた。

「あ、あ……いやああつ!」

ストラックスの股間が引き裂かれ、誰にも見られたくないであろう乙女の秘処が露わにされる。

「ふむ。背は少々伸びすぎですが、こちらはまだ若々しいですね」

赤い瞳をニンマリと細めたメイヴェンが見詰めるのは、うら若き麗人の眩く白い太腿と、その付け根に柔らかに盛り上がった桜色の肉敵。

恥ずかしい場所に視線を感じたのか、顔を見られるだけでも苦痛だという氷継は「ヒィッ」と引き撃つた声を迸らせた。魔法によって脱力した下半身がユルユルと振れ、伸びやかな太腿をも

どかしそうに摺りあわせる。

「メイヴェン……貴様あ……ッ!」

「いけませんね。いくら顔形が美しくても言葉遣いが汚ければ台なしです。こちらのお嬢さんを見習いなさい」

憤るセリアに挑発的な笑みを見せて、メイヴェンは寝椅子の足先に移動した。氷継の細い足首を掴み、持ち上げて――。

「あ? あッ!? やめてえっ!」

悲鳴を無視して横へ大きく開き、肘掛けのように迫り出したアームへ膝裏を引っかけ、スラリとした脚線美がしなやかなM字を描いて固定される。

「こ、こんな……ああ、こんな……」

いつもは漂々しい氷継が、唇を震わせて涙を零した。寝椅子に横たえられ、素顔よりも恥ずかしい秘部を、吸血鬼や六人の部下たちに見せびらかすような姿勢――極度の恥ずかしがり屋には耐えがたい恥辱だろう。

健康的に引き締まった太腿が羞恥に強張り、柔肌を桜色に火照らせて筋をピンと浮き上がらせる。なだらかに起伏する下腹部の先、見るからに柔らかそうな肉敵は、羞恥の色に染まりつつ懸命に口を閉ざしている。

「し、しっかりしろ、氷継!」

慌てて叫ぶセリアの声が聴こえてくるのかいなのか、

「い……い……いやああつ! 見ないで、見ないでえええっ!」

え泣いた。精悍な男装の胸元で形よい乳房が弾み、脚乗せ台に固定された両脚が膝を内側に向けようとしてブルブル、と小刻みに震える。

「うむ、素晴らしい。実によい鳴き声だ。騎士様もこんな声で鳴くのなら、すぐにでも弄って差し上げますよ」

「黙れ……下郎ッ！」

眉を怒らせて叫ぶセリーヌに、メイヴェンはいやらしく微笑んだ赤い瞳をヒタと据えた。

「このお嬢さんを助けたいですか？」

「当たり前だッ！」

「ならば、貴女の身にかけている封印を解いてください」

「ふ……ふう、いん？」

思ってもみない方向に逸れた話に、セリーヌは怪訝な顔になった。それを轆轤と取ったのか、吸血鬼の笑みが凶悪に歪む。

「ほう？ 勇ましい騎士様でも結局我が身が可愛いのですな」

「ま、待て！ いきなり封印と言われても、そんなもの、私には……」

「とぼけないでください。腫にかけられては、魔物を拒む封印ですよ」

ニイツと笑ったメイヴェンが己の股間に手をやり、おもむろに引つ張り出したのは、すでに臨戦態勢の肉棒。

「……何のつもりだ？ そんなモノを見せられても、別に……うっ！」

おぞましい肉棒を見せられてもたいして動じなかった女騎士だが、そのあまりにも異様な形状に気づき、途中で

言葉を失った。

ゴツゴツとした太さ、呆れるほどの長さはまだよいとして——淫茎に、小さな口がいくつも並んでいる。それぞ

れが笑みの形に開き、ミニチュアサイズの鋭い牙を光らせていた。砂漠都市のジユダ王子や洞穴に巣くっていた盗賊たちの男根などは比べ物にならないほど、凶悪な外観。

「私はコレを挿し込むことで、贅の血を吸うのです。しかし、貴女の腫は魔物に対して封印されているから挿入れられない……つまりですね、こちらのお嬢さんを助けなければ封印を解いてください、というわけです」

「ひ……ひっ！」

無防備な秘部を白い指先で撫でられ、氷継が掠れた悲鳴をあげた。プニプニとした柔肉の感触に満足そうに頷きながら、メイヴェンはゆつくりと寝椅子の横へ立ち位置を移す。

「い、いや……ああイヤ、イヤあ！」

視界から退いた吸血鬼の代わりに目に映るのは、獣のように鼻息を荒げた六人の兵。

「イヤ、ダメ、お願い……み、み、見ない……でえ！」

「落ち着け、氷継！ 見られても死ぬことはない！」

声をかけて励まそうとするセリーヌだったが、男勝りな性格だから、氷継が感じている羞恥を推し量ることは不可能だ。火箸を当てられた赤子のように泣き叫ぶ男装の麗人は、涙ばかりか

鼻水まで零し、寝椅子に拘束された細い身体をビクン！ ビクン！ と痙攣させる。

「死ぬことはないでしょうが、おかしくはなるかもしれませんね」

いやらしい流し目をセリーヌにくれて、ねつとりと言葉を繋ぐ吸血鬼。

「私が第一に欲しいのは、貴女の血。インペリアルダイブを可能にする絶大な魔力を、私に譲って欲しいのです。貴女が大人しく封印を解いてくださるなら、こちらのお嬢さんにはこれ以上危害を加えないと約束しましょう」

「勝手なことを言うな、知らんものは知らんのだ！ 私にそんな、絶大な魔力とか、封印とか……」

「やれやれ、困ったおヒトだ」

セリーヌの言葉を嘘だと決めつけたのか、吸血鬼の細い指先が氷継の股間に滑る。色合いも質感もマシユマロに似た軟肉を軽く押し——くばあ。

「ひっ!! ひ、ひ、開かないでえ！」

剥き出しにされた淫唇に冷たい空気を感じ、いつそう激しく泣き叫ぶ氷継。精悍だったその顔は涙と涎でグチョグチョに濡れ、どこか幼い。M字に開かれた両脚を駄々つ子のように跳ね揺らし、柔らかな足裏を見せる素足が薄闇を虚しくかき回す。

「ほほう、これは……予想以上に可愛らしいオマンコだ」
ヌラリと赤い粘膜炎に、メイヴェンの相好が崩れる。しつとり潤んでいるが、形は薄く引き伸ばした耳朶に

似て、ほとんど波打っていない。美青年のように凛々しい面立ちとは裏腹の、可憐で幼気な淫唇だ。

「ひい、ひい、ひい……ッ！」

顔を見られただけでも零れ出していた悲鳴が、一際甲高くなった。

「見ないれ……見ないれええッ！」
滾る羞恥に舌がもつれ、鳴き声がさらに幼くなる。真つ赤な頬に涙が止まらず、喘ぐ唇から涎まで垂れ始めた。

「や、やめる……それ以上氷継に何かしたら……」

「封印を解いていただければ、今すぐにもやめますよ」

歌うように言ったメイヴェンが、氷継の秘裂に指を入れた。耳朶のような淫唇を軽く摘み、指の腹を摺りあわせるようにしてニチュ、クチュ——。

「ひう!! く……ひいひいッ！」

敏感な肉膜に快感を産みつけられ、寝椅子を軋ませて身を振る氷継。ただでさえ赤かった顔が羞恥のためにさらに上気し、宙を掻く爪先が何かを掴むようにキユウツと丸まる。

「おやおや、随分と敏感なお嬢さんだ。ほんの少し弄っただけでこんなに濡れてきた」
「や……ヤダヤダ、変なこと言っちゃ、い、い……いやああ——ッ！」
「イヤですか？ 仕方ありませんね、余計なことは言わないようにしましょう。その代わりに……」
赤い唇を妖しく歪めた吸血鬼が、男装の麗人の秘裂に挿し込んだ細い指を

くねくねと動かし。

「はう……あ、ううう……!?!」

愛蜜に潤む割れ目の内に何度か何度も何度も「の」の字を書かれ、氷継の鳴き声が甘さを増した。白い下半身が震えながら捻れ、座面から滑り落ちそうになっている桃尻がクイツ、クイツ、と淫らに揺れる。

「やう、ああ……や、や、ダメえ!」

ひらめく快感から逃れようとして、ストラックスに包まれた伸びやかな脚をくねらせ、小気味よく引き締まった桃尻を必死に揺らす麗人。

本人は恥じらっているのに、吸血鬼の指を挿し込まれた秘裂は覗き込む男たちを誘うように跳ねる。感じまくっているかのように、カクン、カクンと空腰を打つ。

「イヤだイヤだと言っている割に、随分といやらしい腰使いですね」

「言わないで、言わないでええっ!」

恥じらい泣く氷継の声を、メイヴェンはまったく聞いていなかった。愛蜜に潤んだ粘膜炎をクチュリクチュリと鳴らしつつ、白面に浮いたいやらしい笑みをグツと深める。

「さて、どうします? このまま私の指でいきますか? それとも誰かに挿入れてもらいますか?」

「い、いや……どっちも……ひっ!! あひ、ひいッ!」

親指の腹にクリトリスを扱かれ、氷継の身体が鋭く反った。硬く痲った肉豆は快樂神経の塊だ。

キュッキュッと擦られる度稲光のような快感が炸裂し、絶頂の高みへ為す術もなく追い立てられていく。

「さて、困りましたねえ。どうしましょう、騎士様?」

「や、やめるっ! いくら聞かれても、知らんものは知らん!」

「まだ強情を張りますか? 仕方ありませんなあ」

凶悪な笑みを深めたメイヴェンが、秘裂に挿し込んだ細指の動きを少しずつ強めた。

肉ピラを弾き、抜く。

膣穴に指先を押し当て、クボクボと音を立てて小刻みに抜き差し。

「ひっ!! ひあ、ひあ……やめてお願い、変になる変になりゅう、おかしくなっちゃ、ああ、ううう——ッ!」

羞恥と淫悦に舌をもつれさせ、寝椅子に拘束された細い身体を折れんばかりに振って、狂おしく喘ぎ鳴く氷継。

「大丈夫。貴女のいやらしいオマンコがどれほど淫らに潤んでいるか、お仲間がしつかり見守ってくれていますよ。好きなだけよがりなさい」

「ひっ!! ひい……ああっ!」

悶える麗人を追い詰めるように、吸血鬼の指が巧みさを増す。クチュリクチュリとかき鳴らされる粘膜炎、えぐられ穿られしこかれる肉穴、小刻みに磨き上げられる淫核。

「や……やらあああっ!」
淫唇の悦びに膣穴の快感が混じり、さらに捏ね潰されたクリトリスの淫悦

が加わって耐えがたい羞恥によって加速され——。

「ら、ら……らめええええっ! ら、メ、イクイク、らメ見ないれ見ないれ……見ない、れえ——ッ!」

瞳をギラつかせている兵たちに向け、溢れんばかりの愛蜜に濡れる割れ目を激しく突き上げた。

さらに——びゆる、びゆるるっ! 食い入るように見詰めている六人の兵に向けて、黄金色の小水が勢いよく迸った。

「ハハッ! いい歳してお漏らしですか? 困ったお嬢さんだ」

「やら、やら……やらああああ……」

喉り泣く間も恥ずかしい噴水は止まらず、シタシタと微かな音を立てて寝椅子の座面を濡らし続けた。黴臭かつた薄闇に、生臭くて甘ったるい小便のにおいが混じり、立ち込める。

「メイヴェン……貴様あ……ッ!」
腕を吊る鎖を軋ませ、憤怒の相で唸るセリーヌ。普通の者であれば腰を抜かしてしまいそうなほどの殺気だが、メイヴェンはまったく動じない。

「まだ教えていただけない……:というより、本当に知らないのですか?」

「知らん! 最初からそう言っているだろう!!」

「そうですか……仕方ありませんね、では、流腸しましょう」
「何? か、流腸……? 私を辱めて封印とやらを解かせるつもりか?」

唐突に飛び出してきた汚らわしい言葉に、戸惑うセリーヌ。この、ニヤニヤとした吸血鬼は、いったい何を考えているのか——。

「ふん、好きなようにしろ。知らないのだから、何をされたって……」

「いえいえ、違います。貴女は強力な魔物よけの術に守られています、それはあくまで膣だけ。尻穴はまるで無防備なのですよ」

「……?」
得意げな顔で説明されたが、男女の営みについての知識が極めて少ない女騎士にはピンと来ない。

セリーヌは、囁んで含めるように詳しく説明し直す。
「私は、身体にある穴へコレを挿し込むことで血を吸います。挿し込めるなら別に膣でなくてもいい。例えば、貴女の尻穴とか、ね」

「ッ!! 無理だ……そんなに太いモノ、入るわけないだろう!」

無理だと決めつけた女騎士に対し、白面の吸血鬼も微笑んだまま頷く。
「もちろん、普通は入りませんよ。ペニスを受け入れるようにはできていませんからね。括約筋が固く締まって、異物の侵入を拒むのです」

それで、と手を振るメイヴェンに、え、傍に控えていた無表情な少女たちが流腸器具を捧げ持つて集まった。

紫色の妖しい液体が揺れる大きなボウル、注射器型の太くて長い流腸器が、

それぞれふたつ。

「お尻の穴をじっくり採み解してもいいのですが、もっと簡単なのは排泄直後を狙うこと。汚物をヒリ出すために緩んだ括約筋は、しばらく柔らかいですからね。ついですすから、こちらのお嬢さんの分も用意しました」

「な……何がツイでだ!? 氷継をこれ以上辱める必要はないだろう!」

当然の指摘、なのに薄く笑ったメイヴェンは銀色の長い髪を揺らして静かに首を横に振る。

「私の気持ちを考えてください。好みではない貴女たちで遊ぶのですからゲーム仕立てにでもしないとちっとも面白くないでしょう」

「か、勝手なことを……ッ!」

そうこうしているうちに、無表情な少女たちが注射器型流腸器に紫色の薬液をたっぷりと吸い上げた。そのひとつを受け取り、セリーヌに近づいて、「先に排泄したほうを許してあげましょう。出さずに頑張った方には、私のコレで、人外の淫悦をプレゼントして差し上げます」

白面の吸血鬼が偉そうに言う。

「貴女の血は美味しそうですが、友情を捨ててあちらのお嬢さんを身代わりに差し出してくれるなら、貴女を解放しましょう。貴女の血が飲めなくなるのは惜しいですが、私も貴族です。約束は必ず守ると誓いますよ」

「ば……バカにするな! 自分の身を守るために氷継を犠牲にするなど、絶

対にしない!」

「そうですね? まあいいでしょう、せいぜい頑張ってください」

薄笑いを残した吸血鬼がセリーヌの背後に回り――。

「あつ!? く、くそ……ッ!」

片脚を腰まで吊り上げられて無防備になつていた尻穴に、グリッと冷たい一刺し。注射器型流腸器の嘴管が、力任せに捻じ込まれたのだ。

すぐさまピストンが押され、下腹の奥に冷たいぬめりが広がる。小刻みに波打ち、細かく震えながら、腹の中まで這い昇ってくる。

「ひいつ!? ひあつ!? なに? なに? して……い、いやアアッ!」

裏返つて響くのは、氷継の悲鳴。無表情な少女の手によって、セリーヌと同時に注入されたのだ。

「な、な……ああダメ、やら……流腸なんて、やめてええッ!」

舌つ足らずな声で鳴く男装の麗人は、失禁絶頂の余韻にぼんやりしていたのか、状況が理解できないようだった。駄々っ子のように身体を揺すり、ヒイ、ヒイ、と咽を噎らして、真っ赤な頬に涙を零す。

（氷継……く、くそッ! 氷継だけでも、何とかして助けないと……）

考えている間にも、冷たい感触が尻の先から膣の裏側まで這い上がってきた。薬液に刺激された消化器官が、意思を離れて蠕動する。まるで、鱗のな

腹の奥へ潜り込んできたような――。

内臓がムリムリと押し広げられているような、不快な違和感。

腹のあちこちに刺すような痛みがひらめいては消え、しきりに蠕動する消化器官が震え捻れて、きゅるる、くぼぼ、とはしたくない音を立てる。

「準備ができたようですね。では、競争を始めましょう」

メイヴェンが手を振り、セリーヌの両腕を吊り上げていた鎖がガラガラと鳴った。身体が降ろされ、両足が石畳の床を踏む。

「な……何を……あ? か、身体が……勝手にっ!」

いつの間にか魔法をかけられたのか、身体が意思を無視して歩かされた。フエイエンの兵たちを越え、寝椅子にくくりつけられている氷継に近づき――。

「ううう……くうう……う、あ? セ、セリーヌ、さま……?」

「違う、違うのだ、氷継……これは控られて……くそッ! 私の身体に何をさせる気だ、メイヴェンッ!」

寝椅子に仰向けに拘束されている麗人の上に這い上がり、胸を合わせ腹を重ねて、覆いかぶさってしまふ。

少女たちの手によってロングスカートの捲り返され、しなやかな脚線美が露わになった。大きく開かれている氷継の太腿に触れ、滑らかな柔肌同士がヒタッと寄り添って――上下に重なる

若々しい秘裂。

どちらも無毛、ツルンとして瑞々し

いが、どちらかと言えばセリーヌのほうが土手高だった。赤く潤んだ淫唇の縁も僅かにだがはみ出している。肌の透明感は甲乙つけがたいが、きめの細かさなら氷継、艶めかしい桃色の鮮やかさならセリーヌだろうか。

「ふむ……少々古めかしくても、こうしてふたつ重ねてみると、それなりの趣がありますな」

「き、貴様……ン!? ど、どうした氷継……あ、くっ!」

戸惑う女騎士の下で男装の麗人が喘ぎ、押し潰された身体をくねるように揺らした。

ムニ、ムニ――触れあう股間が擦れ、柔らかな肉敵が相手の肉敵を採み垂める。割れ目の端にコリッと硬い感触は、弾けんばかりに勃起した氷継のクリトリスだろうか?

「先ほどの質問への答ですが、貴女に何かをさせるつもりはありませんよ、騎士様。そのお嬢さんがすべてしてくるはずですよ」

「何だとッ!? き、貴様……氷継に何をした!」

下腹に力を込め、いやらしい吸血鬼に向かって叫んだ瞬間、

――きゅる、きゅくくッ!

流腸液を注入された下腹が不穏な音を立てて鋭く捻れた。排泄器官が蠕動し、肛門が緩んで、溶岩のように熱いモノが噴き出しそうになる。

「ッ!!」

慌てて尻穴を締めるセリーヌの下、



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>